

K-728

中野目Ⅰ遺跡  
中野目Ⅱ遺跡  
発掘調査報告書

2001

特殊法人日本勤労者住宅協会  
山形県労働者住宅生活協同組合  
山形市教育委員会





中野目Ⅰ遺跡  
中野目Ⅱ遺跡  
発掘調査報告書

平成13年3月

特殊法人日本勤労者住宅協会  
山形県労働者住宅生活協同組合  
山形市教育委員会



## 序

本書は、平成11・12年に実施された、中野目Ⅰ遺跡、中野目Ⅱ遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。

調査では、古墳時代から平安時代にかけての竪穴住居跡が、両遺跡合わせて18棟、掘立柱建物跡5棟が検出され、山形市の歴史を知る上で、貴重な資料を得ることができました。

山形市内には、国指定史跡「山形城跡」や「嶋遺跡」をはじめ、約300箇所ほどの埋蔵文化財を包蔵する遺跡が確認されています。これらの遺跡は、郷土の歴史や文化を正しく理解する上で、欠くことのできない市民共有の歴史的財産となっています。

こうした状況のもと、近年は市内各所において、住民福祉の向上を目的とした各種の社会整備に関する開発事業が増加しており、埋蔵文化財保護との調整の結果、遺跡の発掘調査に至る場合が多くなっています。特に、平成5年度以降は市内各地域で大規模な土地区画整理事業が展開されたこともあり、発掘調査の件数及び調査面積が急激に増大しているところです。また、史跡「山形城跡」の保存や整備を目的とした発掘調査も継続されているところです。

本書が、埋蔵文化財の保護と啓蒙のために、そして、皆様の郷土史探求の一助としてご活用いただければ、誠に幸いです。

最後になりましたが、調査にあたって、埋蔵文化財の保護に特段のご理解をいただき、発掘調査に多大なご協力をいただきました事業者や工事関係者の皆様並びに関係各位に、厚くお礼申し上げます。

平成13年3月

山形市教育委員会  
教育長 相田良一

## 例 言

1 本書は、中野目地区住宅団地(ガーデンタウン赤坂)造成事業に係わる「中野目Ⅰ遺跡」「中野目Ⅱ遺跡」の発掘調査報告書である。

2 調査要項は下記の通りである。

遺 跡 名 中野目Ⅰ遺跡 (なかのめいちいせき)  
中野目Ⅱ遺跡 (なかのめにいせき)

所 在 地 山形市大字中野目字赤坂

遺 跡 番 号 平成11年度新規発見

現 地 調 査 中野目Ⅰ遺跡 平成12年4月8日～平成12年6月1日

中野目Ⅱ遺跡 平成11年12月7日～平成11年12月24日

整 理 作 業 平成12年10月31日～平成13年2月28日

調 査 面 積 中野目Ⅰ遺跡 2,500㎡

中野目Ⅱ遺跡 300㎡

調 査 主 体 特殊法人日本勤労者住宅協会

調査実施機関 山形市教育委員会

調 査 担 当 者 中野目Ⅰ遺跡 文化課 課 長 石澤孝一郎

課長補佐 工藤 義夫

文化財係長 江川 隆

主 事 國井 修

主 事 齋藤 仁

臨時職員 岩井 良太

中野目Ⅱ遺跡 文化課 課 長 富田 博

課長補佐 工藤 義夫

文化財係長 江川 隆

主 事 五十嵐貴久

臨時職員 石山 公亮

調 査 協 力 山形県労働者住宅生活協同組合

小笠原建設株式会社

3 整理作業及び本書の作成・執筆は、國井修が担当し、五十嵐貴久、武田和宏がこれを補佐した。

4 発掘調査及び出土遺物の整理にあたっては以下の方々からご協力をいただいた。記して感謝申しあげる。(敬称略)

芦名 久子 伊藤真喜子 大貫 文義 小野 政雄 柿崎 繁 片桐 長作 鴨田 正 岸野 松雄  
熊谷 侃 熊谷 繁 久連山八雄 後藤 富夫 斎藤長栄門 笹原 陽子 佐々木郁子 佐藤 昭司  
三部 秋夫 鳥貫昭二郎 鈴木 輝男 鈴木麻理子 関口 幸子 高橋 清治 長岡 伸恭 半沢 郁造  
深瀬啓次郎 深瀬美貴子(以上中野目Ⅰ遺跡)

大津 弘 小笠原吉二 開沼 孝子 粕谷 和夫 草刈 保子 栗原 清子 栗原 武夫 佐藤 和子  
丹野 一郎 中村 光作 中村 達久 布施哲二郎 町田 雅樹(以上中野目Ⅱ遺跡)

笹原 陽子 鈴木麻理子 深瀬美貴子(以上遺物整理)

5 委託業務は下記の通りである。

基準点測量 共栄測量設計株式会社 (中野目Ⅰ遺跡)

遺構写真実測 アジア航測株式会社 (中野目Ⅰ遺跡)

6 出土遺物、調査記録類については、山形市教育委員会で一括保管している。

## 凡 例

1 本書で使用した遺構・遺物の分類記号は以下の通りである。

SI：竪穴住居跡 SB：掘立柱建物跡 SK：土坑 SD：溝跡・溝状遺構

SP：不明ピット EP：掘立柱建物跡の各柱穴 P：竪穴住居内のピット

P：土器 S：礫 TP：試掘坑

2 遺構番号は現地調査段階での番号をそのまま報告書での番号として踏襲した。

3 遺跡概要図・遺構配置図・遺構実測図中の方位は真北を示している。

4 グリッドの南北軸は、中野目Ⅰ遺跡が、 $N-15^{\circ}20'-E$ 、中野目Ⅱ遺跡が $N-18^{\circ}30'-E$ を測る。

5 遺構実測図は、 $1/40 \cdot 1/60 \cdot 1/80 \cdot 1/200 \cdot 1/400$ の縮図で採録し、各々スケールを付した。

なお実測図中の●は土師器の出土地点、▲は須恵器の出土地点、■は礫の出土地点、×は金属製品の出土地点を表し、○及び△は報告書に採録した土師器及び須恵器の出土地点を表す。

6 遺構実測図のスクリーントーンは焼土を表す。

7 遺構実測図中の水系レベルは標高を表す。単位はmである。

8 土層観察においては、遺跡を覆う基本層序については、ローマ数字を、遺構覆土についてはアラビア数字で表している。

9 遺物実測図・拓影図は $1/2 \cdot 1/3$ の縮図で採録し、各々スケールを付した。

10 遺物実測図中の土器については、断面白抜きが土師器、▲が須恵器を表し、スクリーントーンは黒色ミガキを表す

11 遺構観察表中において、( )内数値は現存値を示す。単位はcmを使用している。

12 遺物観察表中において、( )内数値は図上復元による推計値を、空欄は計測不能を示す。単位はmmを使用している。

13 遺構・遺物番号は、本文、表、挿図、写真図版とも一致している。

14 基本層序及び遺構覆土の色調記載については、『新版土色帳』(小山・竹原：1973)に拠った。

# 目次

I 調査の経緯	
1 調査に至る経過	1
2 調査の方法と経過	1
II 遺跡の立地と環境	
1 地理的環境	4
2 周辺の遺跡分布	4
III 中野目I遺跡	
1 遺跡の概観	9
(1) 遺跡の層序	9
(2) 遺構と遺物の分布	9
2 検出された遺構と遺物	9
(1) 竪穴住居跡	13
(2) 掘立柱建物跡	62
(3) 土坑	69
IV 中野目II遺跡	
1 遺跡の概観	71
(1) 遺跡の層序	71
2 検出された遺構と遺物	73
(1) 竪穴住居跡	73
(2) 土坑	81
(3) マウンド	82
V 総括	
1 調査の成果	84
2 奈良～平安時代の遺構及び遺物について	84
(1) 竪穴住居跡の遺物出土状況について	84
(2) 竪穴住居跡出土の遺物について	85
(3) 遺跡の集落域の変遷について	86
3 まとめ	86
報告書抄録	90

## 表

表1	調査工程表	3	表14	中野目Ⅰ遺跡 SI640遺物観察表	54
表2	中野目Ⅰ遺跡 SI419遺物観察表	13	表15	中野目Ⅰ遺跡 SI680遺物観察表	59
表3	中野目Ⅰ遺跡 SI205遺物観察表	15	表16	中野目Ⅰ遺跡 SI 7遺物観察表	62
表4	中野目Ⅰ遺跡 SI106遺物観察表	28	表17	中野目Ⅰ遺跡 SB745遺物観察表	64
表5	中野目Ⅰ遺跡 SI104遺物観察表	28	表18	中野目Ⅰ遺跡 SK155遺物観察表	69
表6	中野目Ⅰ遺跡 SI101遺物観察表	29	表19	中野目Ⅱ遺跡 SI 1遺物観察表	74
表7	中野目Ⅰ遺跡 SI14遺物観察表	33	表20	中野目Ⅱ遺跡 SI 2遺物観察表	81
表8	中野目Ⅰ遺跡 SI 8遺物観察表	35	表21	中野目Ⅱ遺跡 SK 3遺物観察表	82
表9	中野目Ⅰ遺跡 SI225遺物観察表	37	表22	竪穴住居跡観察表	87
表10	中野目Ⅰ遺跡 SI256遺物観察表	41	表23	掘立柱建物跡観察表	87
表11	中野目Ⅰ遺跡 SI465遺物観察表	46	表24	遺物分類表	88
表12	中野目Ⅰ遺跡 SI490遺物観察表	49	表25	土師器焼出土傾向表	89
表13	中野目Ⅰ遺跡 SI520遺物観察表	52			

## 挿 図

第1図	調査概要図	2	第21図	中野目Ⅰ遺跡 SI225・出土遺物	36
第2図	遺跡位置図(1)	6	第22図	中野目Ⅰ遺跡 SI256(1)	38
第3図	遺跡位置図(2)	7	第23図	中野目Ⅰ遺跡 SI256(2)	39
第4図	地形分類図	8	第24図	中野目Ⅰ遺跡 SI256出土遺物(1)	40
第5図	中野目Ⅰ遺跡土層柱状図	10	第25図	中野目Ⅰ遺跡 SI256出土遺物(2)	41
第6図	中野目Ⅰ遺跡遺構配置図	11	第26図	中野目Ⅰ遺跡 SI465	43
第7図	中野目Ⅰ遺跡 SI419・出土遺物	14	第27図	中野目Ⅰ遺跡 SI465出土遺物(1)	44
第8図	中野目Ⅰ遺跡 SI205・出土遺物	16	第28図	中野目Ⅰ遺跡 SI465出土遺物(2)	45
第9図	中野目Ⅰ遺跡 SI106・104・101(1)	19	第29図	中野目Ⅰ遺跡 SI490(1)	47
第10図	中野目Ⅰ遺跡 SI106・104・101(2)	20	第30図	中野目Ⅰ遺跡 SI490(2)	48
第11図	中野目Ⅰ遺跡 SI106カマド	21	第31図	中野目Ⅰ遺跡 SI490出土遺物(1)	50
第12図	中野目Ⅰ遺跡 SI106・104・101(3)	23	第32図	中野目Ⅰ遺跡 SI490出土遺物(2)	51
第13図	中野目Ⅰ遺跡 SI106・104・101(4)	24	第33図	中野目Ⅰ遺跡 SI520・出土遺物	53
第14図	中野目Ⅰ遺跡 SI106出土遺物	25	第34図	中野目Ⅰ遺跡 SI640・出土遺物	55
第15図	中野目Ⅰ遺跡 SI104出土遺物	26	第35図	中野目Ⅰ遺跡 SI680	57
第16図	中野目Ⅰ遺跡 SI101出土遺物	27	第36図	中野目Ⅰ遺跡 SI680出土遺物	58
第17図	中野目Ⅰ遺跡 SI14・8(1)	31	第37図	中野目Ⅰ遺跡 SI446	60
第18図	中野目Ⅰ遺跡 SI14・8(2)	32	第38図	中野目Ⅰ遺跡 SI 7・出土遺物	61
第19図	中野目Ⅰ遺跡 SI14出土遺物	33	第39図	中野目Ⅰ遺跡 SB745・出土遺物	63
第20図	中野目Ⅰ遺跡 SI 8出土遺物	34	第40図	中野目Ⅰ遺跡 SB746	65

第41図	中野目Ⅰ遺跡 SB747	.....66	第48図	中野目Ⅱ遺跡 SI 1 出土遺物(1)	.....76
第42図	中野目Ⅰ遺跡 SB748	.....67	第49図	中野目Ⅱ遺跡 SI 1 出土遺物(2)	.....77
第43図	中野目Ⅰ遺跡 SB749	.....68	第50図	中野目Ⅱ遺跡 SI 2	.....78
第44図	中野目Ⅰ遺跡 SK155・出土遺物	.....70	第51図	中野目Ⅱ遺跡 SI 2 出土遺物(1)	.....79
第45図	中野目Ⅱ遺跡基本層序	.....71	第52図	中野目Ⅱ遺跡 SI 2 出土遺物(2)	.....80
第46図	中野目Ⅱ遺跡遺構配置図	.....72	第53図	中野目Ⅱ遺跡 SK 3・4・SF 5・SK 3 出土遺物	.....83
第47図	中野目Ⅱ遺跡 SI 1	.....75			

## 図 版

図版 1	中野目Ⅰ遺跡遠景・調査区近景	図版11	SI104・101・14出土遺物
図版 2	SI106・104・101	図版12	SI14・8・225出土遺物
図版 3	SI104・101・419・205・225・256	図版13	SI225・256出土遺物
図版 4	SI14・8・465	図版14	SI256・465出土遺物
図版 5	SI490・520・640・680	図版15	SI465・490出土遺物
図版 6	SI446・7・SB745・746・748	図版16	SI490・520・640・680出土遺物
図版 7	中野目Ⅱ遺跡調査区近景・基本層序	図版17	SI680・7・EP475・SK155出土遺物
図版 8	SI 1・2・SK 3・4	図版18	SI 7・1出土遺物
図版 9	SI419・205・106出土遺物	図版19	SI 1・2出土遺物
図版10	SI106・104出土遺物	図版20	SI 2・SK 3出土遺物

## I 調査の経緯

### 1 調査に至る経過

中野目Ⅰ遺跡・中野目Ⅱ遺跡は、平成11年度に新規に発見された遺跡である。これまで、中野目地区近隣には周知の埋蔵文化財は所在しなかったが、特殊法人日本勤労者住宅協会により53,173㎡に及ぶ住宅団地開発事業が実施されることになり、山形市教育委員会では、埋蔵文化財の有無について照会を受け、開発区域内において試掘調査を実施することとなった。

試掘調査は平成11年11月8日～11日に実施した。開発区域内に任意に31箇所の試掘坑を設定し、重機により表土を剥ぎ、埋蔵文化財の所在の確認を行った。その結果、開発区域の南側に中野目Ⅰ遺跡、中野目Ⅱ遺跡の2つの遺跡が所在することが確認され、新規の遺跡として届出を行った。

これを受けて、開発機関である日本勤労者住宅協会の業務委託団体である山形県労働者住宅生活協同組合と山形市教育委員会により埋蔵文化財の取り扱いについて協議が行われた結果、工事に先立ち、緊急発掘調査を実施し記録保存を行う運びとなった。調査区域については、宅地部分は盛土による現状保存が図られることから、街区道路部分のみ調査を行うこととなった(第1図)。

調査の実施にあたっては、開発行為の申請者である日本勤労者住宅協会と山形市教育委員会とが調査に関する協定を結び、山形市教育委員会が調査を実施することとなった。調査における調整は山形県労働者住宅生活協同組合と山形市教育委員会とで行った。開発事業の工程上、緊急に調査を実施する必要性が生じた中野目Ⅱ遺跡については、冬期間であったが、平成11年12月7日～12月24日の延べ18日間実施された。中野目Ⅰ遺跡については平成12年4月5日～6月1日の延べ43日間実施された。

### 2 調査の方法と経過

中野目Ⅰ・Ⅱの両遺跡の調査区域については、前節の通り、試掘調査で確認された遺跡範囲の内、街区道路部分のみを調査対象とした。各遺跡の調査の方法及び経過は以下の通りである(表1)。

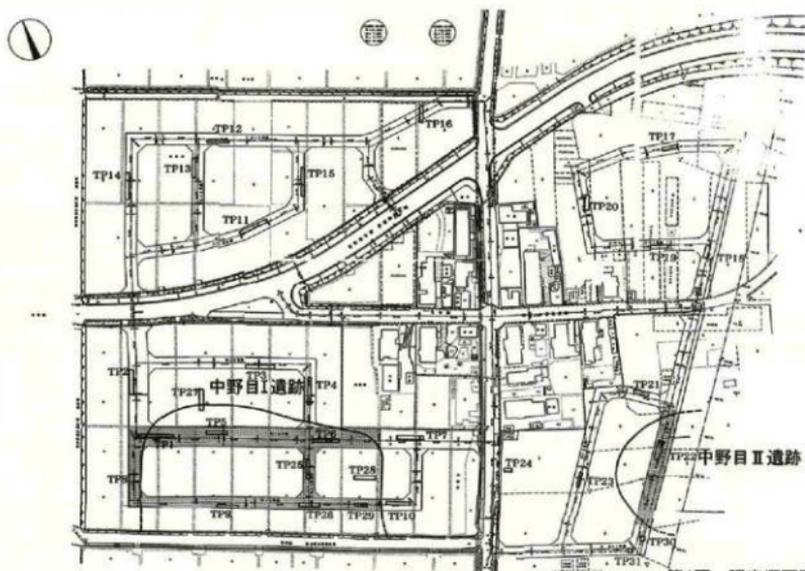
#### (1) 中野目Ⅱ遺跡

平成11年12月7日より調査を開始した。重機により表土を除去し、その後人力により遺構面まで掘り下げを行った。遺構検出面は標高約92mを測る。遺構検出の結果、2棟の竪穴住居跡、2基の土坑、1基のマウンドが検出された。その後、調査区内に街区道路のセンター杭を基準に5m×5mのグリッドを設定し、土層観察用ベルトを残しながら、遺構精査を行った。竪穴住居内より、多数の土師器及び須恵器が出土した。調査区域が道路幅に限定されることから、住居跡全体の構造を把握するには至らなかった。これらの作業と並行して、必要に応じて記録を作成し、その後土層観察用ベルトを取り外した。冬期間という悪条件のもとであったが、平成11年12月24日に現地調査を終了した。

#### (2) 中野目Ⅰ遺跡

平成12年4月5日より、調査区内の表土を除去し、平成12年4月10日より、人力で遺構面まで掘り下げを開始した。遺構検出面は、東側でやや高く、途中でやや落ち込み、西に行くにつれて緩やかに傾斜しており、須川の旧自然堤防であることが看取された。検出面の標高は約92mを測る。調査区内に街区

道路のセンター杭を基準にして5m×5mでグリッドを設定し、遺構検出作業が終了した部分より、検出状況の平面図を作成した。竪穴住居跡と推定されるプランが約20棟、その他、多数のピット、溝跡等が検出された。その後、土層観察用ベルトを残しながら遺構精査を行った。住居跡内からは、多数の遺物が出土し、住居跡の年代は、古墳時代後期から平安時代までと推定された。当初住居跡と推定されたプランの内、自然の落ち込みであることが確認されたものもあり、最終的に検出された竪穴住居跡は16棟であった。調査区域が道路幅に限定されることから、全体の構造を把握できるものは少なかった。また、床面付近が湧水帯にあたり、検出面から約30cmほど掘ると水が湧き出し、精査が非常に困難であった。掘立柱建物跡は、出土遺物は僅少で、年代を推定できる遺物は出土しなかった。5月20日には、発掘調査説明会を開催し、約80名の参加者を得た。5月30日に空中写真撮影を行い、6月1日に器材を撤収し、現地調査を終了した。



第1図 調査概要図

表1 調査工程表

中野目Ⅱ遺跡

月 週	12月													
	1週			2週			3週							
日	7	8	9	10	13	14	15	16	17	20	21	22	23	24
表土除去														
面整埋														
遺構精査														
配線														
備考														

図材撮収

中野目Ⅰ遺跡

月 週	4月																												5月							6月											
	1週				2週				3週				4週				5週				6週			7週			8週			9週																	
日	5	6	7	10	11	12	13	14	17	18	19	20	21	24	25	26	27	28	1	2	8	9	10	11	12	15	16	17	18	19	20	22	23	24	25	26	29	30	31	1							
表土除去																																															
面整埋																																															
遺構精査																																															
配線																																															
備考																																															

図材撮収

調査委員会

調査委員会

調査委員会

調査委員会

調査委員会

調査委員会

## II 遺跡の立地と環境

### 1 地理的環境(第2～4図)

山形市は、山形県の東部に位置する。山形盆地の南部にあたり、東には奥羽山脈が連なり、南部と西部は白鷹丘陵が裾野を広げている。奥羽山脈に源を発する馬見ヶ崎川が北流し、南東から北西に伸びる扇状地を形成しており、その他、周囲の山々から流下する大小の河川が小規模な扇状地をつくり、複合扇状地を形成している。市北西部、扇状地前縁部からは平野部が広がり、河川及び旧河川に沿って自然堤防が点在している。

遺跡の所在する中野目地区は、山形市の北西部、中山町境に位置する。市西部を北流する須川は、馬見ヶ崎川と遺跡南方で合流し、更に山寺から西流してきた立谷川と合流する。遺跡はちょうどこの3つの河川の合流地点に位置する。河川沿いには自然堤防が発達し、その周辺には後背湿地が広がる。遺跡は須川左岸の自然堤防及び後背湿地に立地している。遺跡周辺は南東方向から北西方向にかけて緩やかに傾斜する様相を呈している。遺跡周辺の地目は果樹園及び水田で、標高は約93mを測る。

### 2 周辺の遺跡分布(第2・3図)

山形市には約300の遺跡が確認されており、その約半数が、古墳時代から奈良・平安時代の遺跡である。これらの遺跡は、山形市内においては、馬見ヶ崎川、須川、立谷川等の河川沿いに発達する自然堤防周辺及び、馬見ヶ崎扇状地扇端部周辺に数多く分布している。これまで、山形市北西部の須川及び馬見ヶ崎川に挟まれた平野部の遺跡分布は希薄であったが、東北中央自動車道に係る調査や嶋土地区画整理事業に係る調査で、若干の増加がみられる。過去に撮影された航空写真や地形分類図からみると多数の旧河川の痕跡がみられ、それに沿って発達した自然堤防周辺に遺跡の分布をみることができる。

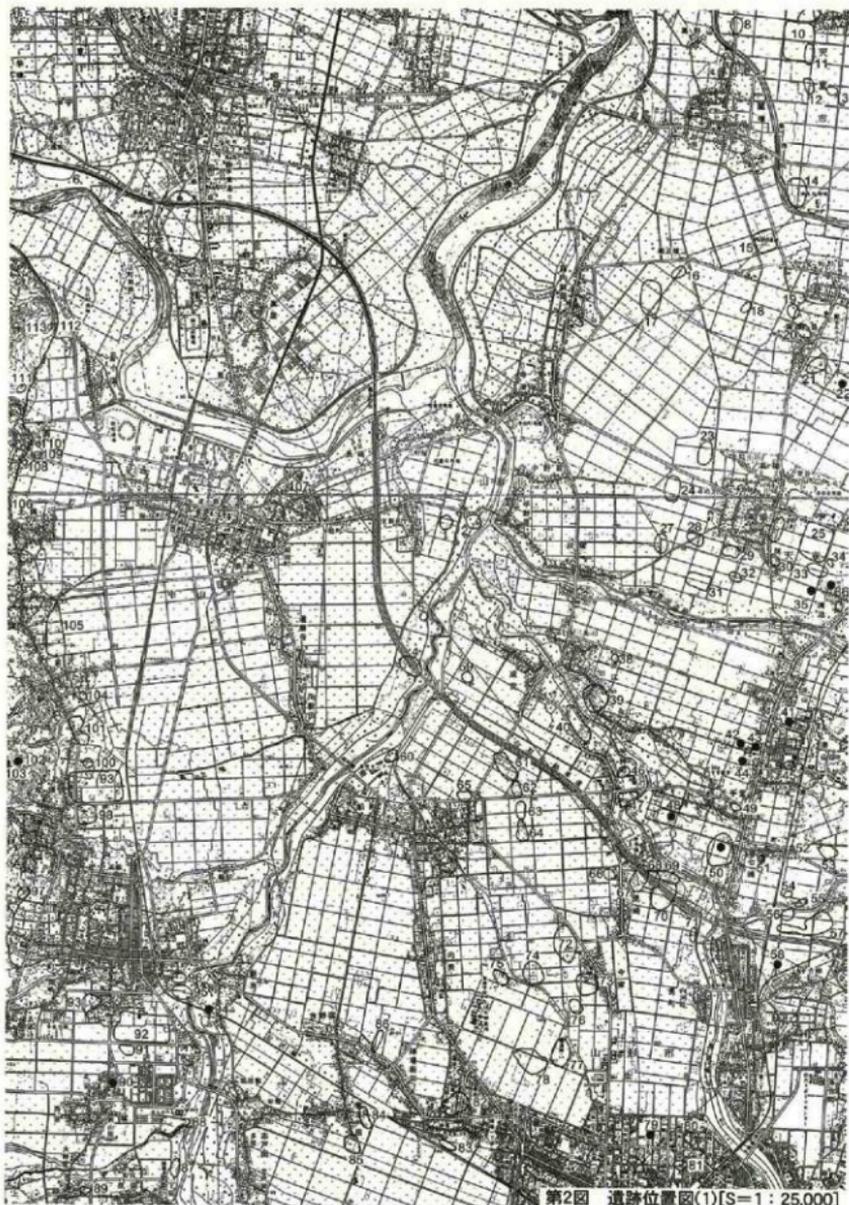
時期別にみれば、古墳時代の集落跡は、立谷川下流域、馬見ヶ崎川下流域、須川上流域にその集中がみられ、凡そ、漆山付近の古墳の集中域、高原付近の古墳集中域及び谷粕付近の古墳集中域にその分布をみることができる。

奈良・平安時代の集落跡は古墳時代の集落跡とその集中域がほぼ重なるが、若干平野部よりその分布域が広がり、またその数も増加傾向にある。特に馬見ヶ崎扇状地の前縁部付近にその集中域が認められ、更に云えば、馬見ヶ崎扇状地の前縁部付近でも、河川沿いの自然堤防上に多く立地するようである。昭和56・57年には東北横断自動車道建設に係る緊急発掘調査で、境田C・C'・D遺跡の発掘調査が、平成5年には宅地造成及び分譲住宅建設に係る緊急発掘調査で、今塚遺跡の調査が、近年は東北中央自動車道建設に係る緊急発掘調査で、渋江遺跡、向河原遺跡等の調査が行われている。今塚遺跡では、古墳時代前期及び9世紀遺構遺物が検出され、溝跡から仁寿参年(853年)の年号の付された木簡が出土している。山地及び山間部での分布は希薄で、白鷹丘陵や蔵王山麓に窯跡が分布し、また笹谷街道沿いに包蔵地が散見される。窯跡は近年、中央高速自動車道に係る緊急発掘調査で、白鷹丘陵に位置するオサヤズ窯跡、小松原窯跡の発掘調査が行われており、また蔵王山麓に位置する三本木窯跡は昭和56年、県立西蔵王口線整備事業・園路工事に係る発掘調査が実施されている。オサヤズ窯跡は、奈良時代末から平安時代初めの瓦を主体とした窯跡である。小松原窯跡は、9世紀第1四半期から第2四半期にかけての須恵器の窯跡である。三本木窯は、赤焼土器を主体とする10世紀代の窯跡であることが明らかになっ

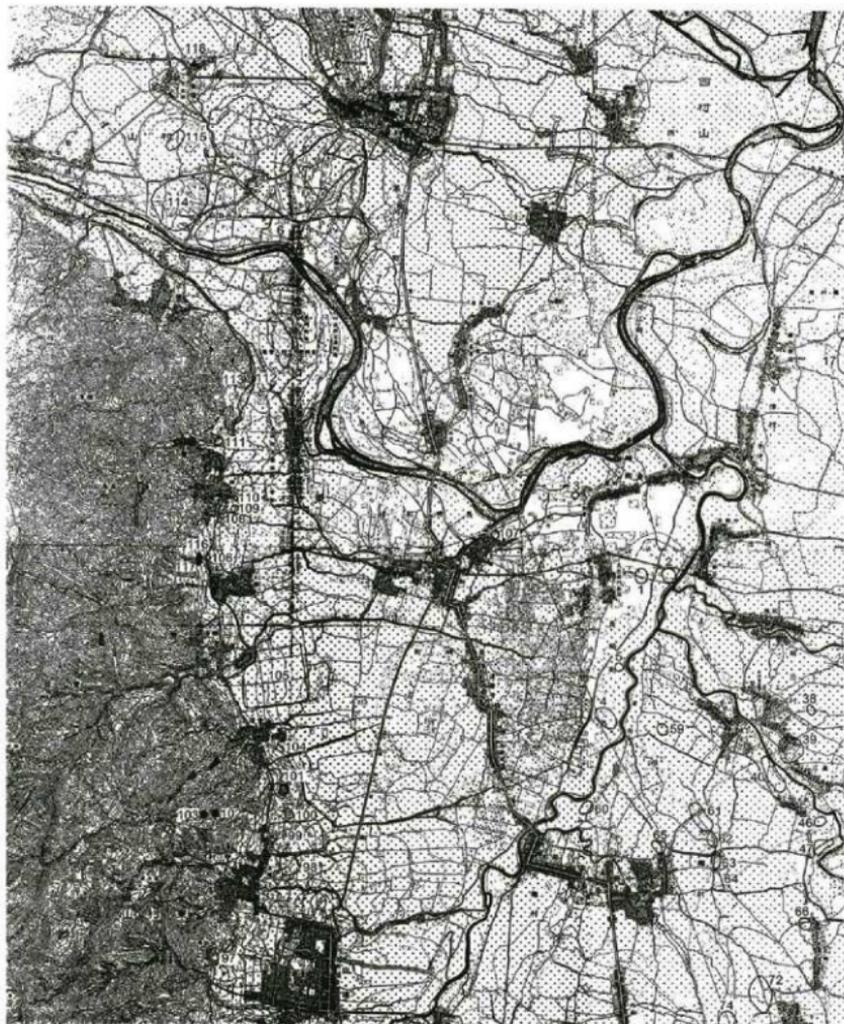
ている。包蔵地では、馬見ヶ崎川上流域に散見される。東北横断自動車道建設工事に伴い、新山A遺跡(昭和61年調査)、向山遺跡(昭和62年調査)、関沢B遺跡(昭和62調査)の3遺跡の緊急発掘調査が実施されている。新山A遺跡では、二次堆積と推定される遺物が出土したのみであるが、向山遺跡では、9世紀中葉の竪穴住居跡が検出されている。

中野目Ⅰ・Ⅱ遺跡の周辺は前節でのべたように、山形市内を流下する3本の河川の合流地点に位置し、河川を利用した交通手段という観点でみると、有利な立地であるとみることもできる。しかし、周辺には、数えるほどしか遺跡は分布していない。これは、詳細な分布調査が実施されず、未発見の遺跡が埋もれている可能性もあるが、河川の営力等、自然的な要素に起因するとも考えられる。本遺跡の北西約1kmに位置する中山町三軒屋物見台遺跡では、昭和58～59年に東北横断自動車道酒田線建設に伴う2次にわたる調査と、昭和59年に東北電力鉄塔移設工事に伴う小規模な発掘調査が実施されており、調査では、古墳時代後期を主体とする遺構・遺物が出土し、溝跡で数回の洪水の痕跡が確認されている。またこの遺跡は昭和36年に山形大学教授、故柏倉亮吉氏により発掘調査が実施され、住社式に併行する県内の標準遺跡(三軒屋式)とされたことで著名である。近代以降も、中野目地区では洪水の度に甚大な被害を受けている。遺跡東方の中野目橋は、明治27年に初めて架橋されたが、以降これまで、度々流失している。その他近隣の遺跡としては南方約1.5kmに、中山町達磨寺遺跡が所在する。中野目Ⅰ・Ⅱ遺跡同様の須川左岸の自然堤防上に立地しており、昭和58～59年に2次にわたる調査が実施され、8世紀末～10世紀にかけての遺構・遺物が出土している。

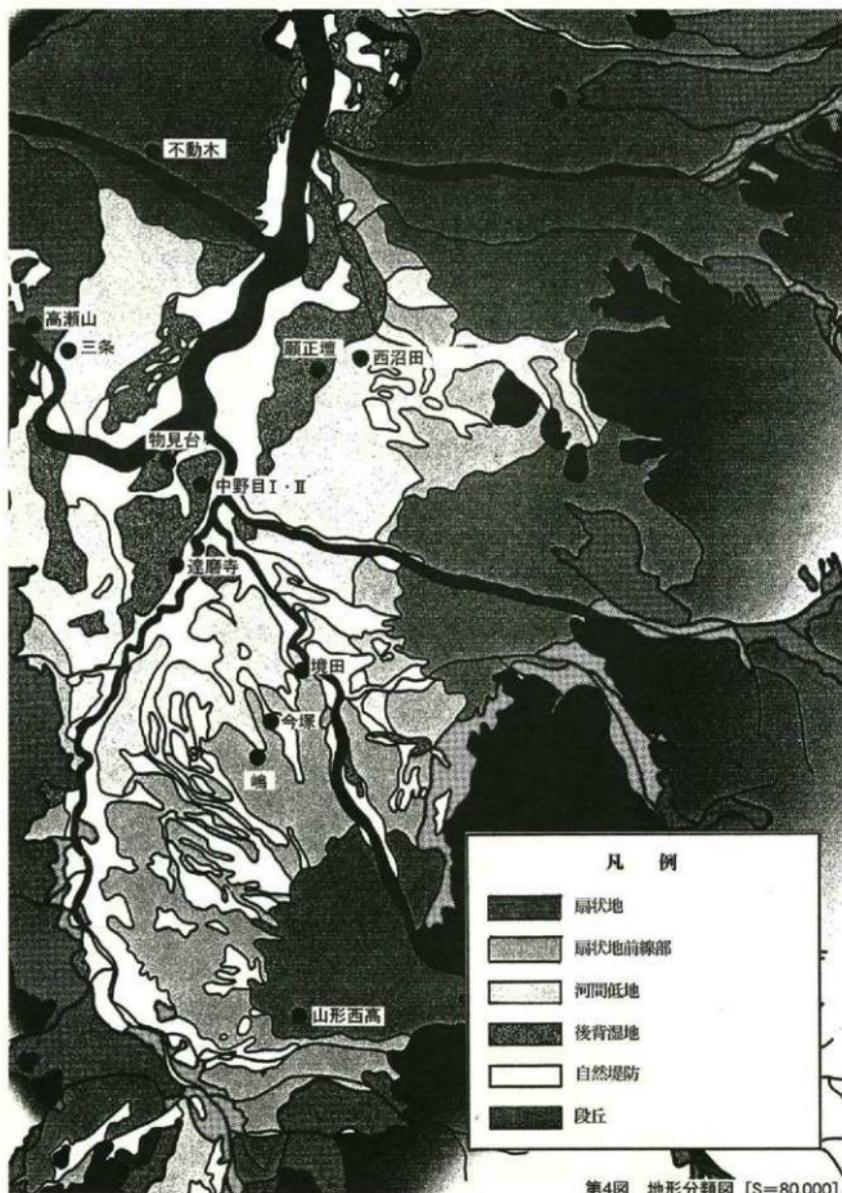
No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名	No	遺跡名
1	中野目Ⅰ	21	塚野目B	41	柴崎古墳群	61	馬洗馬B	81	川原田	101	新館
2	中野目Ⅱ	22	塚野目古墳群	42	衛守塚2号墳	62	馬洗馬A	82	陣場	102	坊主塚古墳群
3	三軒屋物見台	23	中袋	43	衛守塚古墳群	63	藤治屋敷	83	馬上台	103	塚の山古墳群
4	達磨寺	24	砂子田	44	衛守塚4号墳	64	服部	84	東志戸田	104	前田
5	川前	25	礼井戸桑里	45	北道上B	65	中野	85	塚田	105	柳沢桑里
6	高瀬山	26	高瀬南浦	46	新井田	66	見崎	86	熊ノ木	106	滝1
7	三桑	27	影沢北	47	天神	67	塚田C	87	梅在家	107	川端
8	蔵増北B	28	松重	48	狐山2号墳	68	塚田C'	88	大塚	108	岡境
9	的場	29	高瀬南浦	49	千手堂大門	69	塚田B	89	下反田	109	八幡の懸
10	三桑桑里	30	入水	50	七浦古墳群	70	塚田D	90	大塚天神古墳	110	八幡前
11	板橋2	31	高瀬南	51	五反	71	塚田A	91	一本杉	111	松荷
12	板橋1	32	桜江	52	大明神	72	長表	92	山辺南桑里	112	塚ノ原
13	清瀬清水	33	高瀬東	53	深山長表	73	今塚	93	嶋之前	113	松岡山
14	蔵増押切	34	清池西	54	北陣2	74	八ッ口	94	去手路古墳	114	落衣長者屋敷
15	西沼田	35	火矢塚1号墳	55	北陣1	75	行才1	95	庚殿	115	高松1
16	願正壇	36	火矢塚2号墳	56	下陣C	76	河原田	96	柳清水	116	滝2
17	鍋田	37	火矢塚	57	下陣A	77	嶋	97	深沼原	117	滝3
18	阿部塚	38	三桑ノ目	58	白山堂前	78	梅野木前1	98	塚田	118	柴橋壺
19	矢口	39	清江	59	八幡田	79	宮町古墳	99	山辺北桑里		
20	塚野目A	40	向河原	60	春日堂	80	松葉ノ木	100	良美塚		



第2図 遺跡位置図(1)[S=1:25,000]



第3図 遺跡位置図(2) [S=1:25,000]



第4図 地形分類図 [S=80,000]

### III 中野目 I 遺跡

#### 1 遺跡の概観

中野目 I 遺跡は、山形市西部を北流する須川の左岸に位置する。遺跡の南方は、奥羽山脈から流下する立谷川、白川(馬見ヶ崎川)の合流地点にあたり、遺跡は3つの河川の合流地点に位置する。調査時の地目は水田で、遺跡北東部の県道沿いに現在の中野目集落がある。遺跡東方及び北方は果樹園となり、南方及び西方は水田となる。遺跡は現在の自然堤防から後背湿地にかけて立地する。標高は約92~93mを測る。

#### (1) 遺跡の層序(第5図)

遺跡の層序は凡そ7層に区分し得る。東側が須川の旧自然堤防となり一段高くなっており、調査区中央部でやや落ち込み、西側へかけて緩やかに傾斜する。調査区東側は耕作による削平をうけているが、その他の部分については自然堆積土が厚く堆積しており、遺跡の保存状態は良好であった。自然堆積土は東側では薄く、西側に行くほど厚くなる斜面堆積の様相を呈している。

I層は耕作土で調査区全域において認められるものである。褐色を基調とし、西側では明褐色に変化する。層厚は約20cmで水平に堆積する。II層は自然堆積土で、ほぼ均質である。黒褐色を基調とし、調査区東側自然堤防上で認められる。西側へ行くにつれて薄くなり、自然堤防下では確認できない。III層は自然堆積土で、自然堤防西端から調査区中央部にかけて堆積する。若干の遺物を包含する。所々やや層厚に変化がみられるものの、凡そ安定して堆積している。IV層は自然堆積土で、III層と同様、自然堤防西端から調査区中央部にかけて堆積する。若干の遺物を包含する。ほぼ水平に堆積し、層厚は全体的にIII層よりもやや薄い。III層とV層の漸移層である。V層は自然堆積土で、調査区西側の低位面で確認される。比較的安定した堆積状況を呈し、層厚は約30~50cmである。VI層はII層とVII層の漸移層である。自然堤防上から中央部の落ち込みにかけて明瞭に確認できるが、自然堤防下ではあまり明瞭でない。VII層は地山面で、遺構の床面を構築する層で、火山灰質土で緻密である。

#### (2) 遺構と遺物の分布(第6図)

検出された主な遺構は、竪穴住居跡が16棟、掘立柱建物跡が5棟、その他土坑、溝跡、ピットなどで、時期は古墳時代後期、奈良時代末から平安時代初頭の時期に大別される。遺構の密度は東側が高く、西側へ行くにつれて、低くなる様相を呈する。

竪穴住居跡は調査区全域に分布するも、東側自然堤防上にやや高い集中がみられ、切り合った住居跡も検出され、比較的長い期間居住域として機能したことが窺える。出土遺物の9割以上が竪穴住居跡から出土している。土器の出土状況に差異が認められ、その時期により埋没状況に違いが認められる。

掘立柱建物跡は、竪穴住居跡同様、調査区東側(自然堤防端部)に集中する。遺物はほとんど出土しない。

土坑は、浅いものがほとんどで、遺物の出土は僅少である。

ピットは多数検出されたが、ほとんどは近代以降の稲杭と推定され、また、遺物の出土も僅少である。

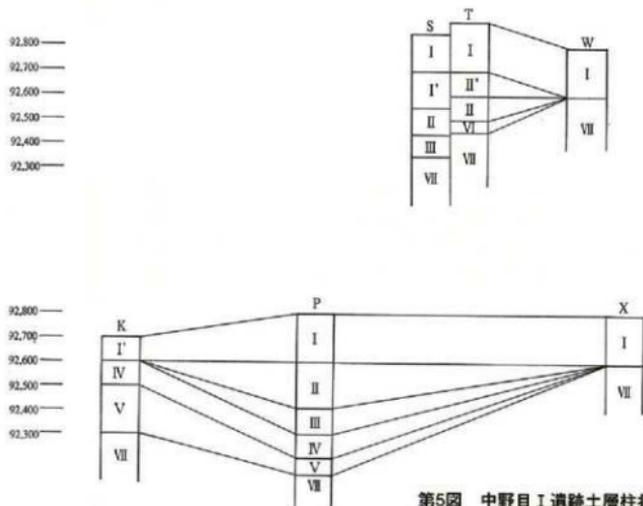
溝跡は、3条確認されている。若干の遺物が出土したが、時期の特定はできなかった。切り合い関係

から、9世紀中葉以降と判断される。

遺構外出土の土器については、Y軸Q～Sグリッド付近の調査区中央部落ち込み部分から僅かに出土するのみである。

今回の調査は、街区道路部分のみの調査であったが、保存が図られる部分についても、多数の遺構が遺存している可能性が非常に高く、本遺跡は大規模な集落跡であることが推定される。

前節の遺跡の埋没状況と、これらの遺構の分布を概観すると、少なくとも、平安時代初頭(9世紀中葉)までは、遺跡周辺は自然堤防として機能していたことが窺われる。また中野目地区は、過去に度々洪水に見舞われた地域ではあるが、今回の調査では顕著な痕跡は確認できなかった。ただ西側に位置する竪穴住居跡(SI256)で、やや色調の明るい覆土が堆積しており、洪水があった可能性もある。



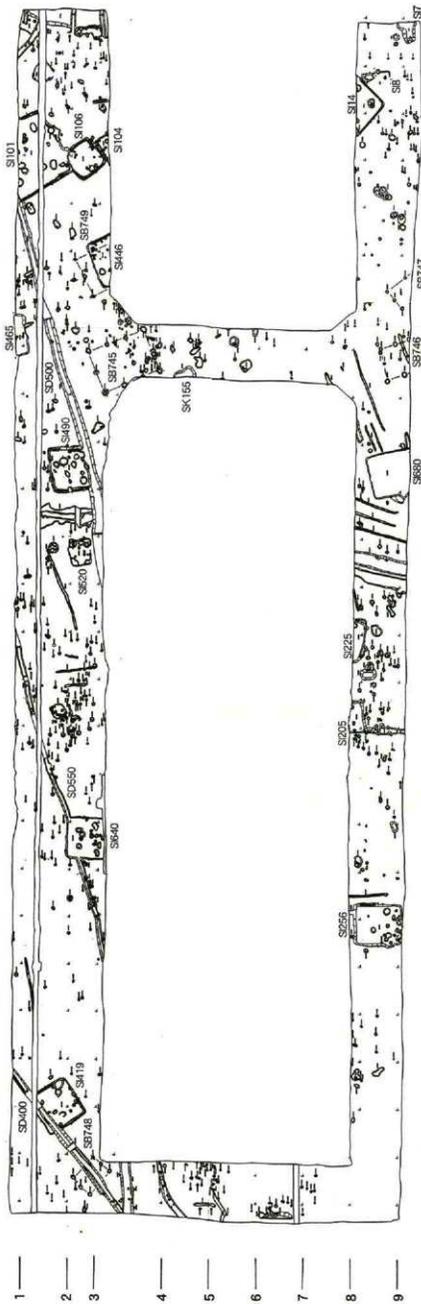
第5図 中野目I遺跡土層柱状図

基本層序

層位	土色	土質	備	考
I	10 YR 4/4 褐色	砂質シルト	ほぼ均質。(耕作土)	
I	10 YR 5/1 褐色	砂質シルト	鉄分多量に含む。粘性強い。しまり強い。(耕作土)	
II	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	均質。	
II	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト僅かに含む。自然堤防上で確認される。	
III	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト僅かに含む。自然堤防端から確認される。	
IV	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト僅かに含む。焼土粒含む。炭化物含む。自然堤防端から確認される。	
V	10 YR 2/1 黒色	シルト	10YR4/4褐色シルト僅かに含む。焼土粒含む。炭化物含む。自然堤防下で確認される。	
VI	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトまだらに含む。地山との新移層。	
VII	10 YR 4/4 褐色	シルト	均質。地山。	



A | B | C | D | E | F | G | H | I | J | K | L | M | N | O | P | Q | R | S | T | U | V | W | X | Y | Z



第6図 中野目I遺跡遺構配置図

## 2 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は堅穴住居跡16棟、掘立柱建物跡5棟、その他土坑、溝跡、不明ピットなどである。堅穴住居跡の全体のプランや遺構の床面付近は第I章でも述べたように十分な精査を実施することはできなかった。遺物は大半が堅穴住居跡からの出土で、その他の遺構からは少量出土したのみである。整理箱で24箱出土した。以下、堅穴住居跡を中心に遺構毎にその概要を略述する。

### (1) 堅穴住居跡(第7～38図 図版2～6・9～18)

#### SI419(第7図 図版3・9)

(位置・重複関係・遺存状態)B・C-1・2グリッドに位置する。Ⅱ層上面で確認した。SD400に切られる。削平をうけており、遺存状態は良くない。

(規模・平面形・方向)4.7m×4.5mの方形のプランを持ち、主軸方向は不明である。

(堆積土)削平により、あまり遺存していない。ほぼ水平に堆積している。

(壁の状況)削平によりほとんど不明。ほぼ垂直に立ちあがるようである。高さは最大で約13cmを測る。

(床)地山を床面としている。ほぼ平坦で、東側に焼土の広がりがみられる。

(柱穴)数本のピットが検出された。覆土には焼土が含まれていた。主柱穴を構成するかは不明。

(周溝)幅約24cm、深さ約9cmを測る

(カマド)東側に焼土の広がりが確認されたが、削平されて不明。

(出土遺物)小破片が数片散見される。図化したのは、2点でいずれも柱穴から出土したものである。遺存状態は良好でなく、両者とも摩滅している。全体の器形は判別できない。

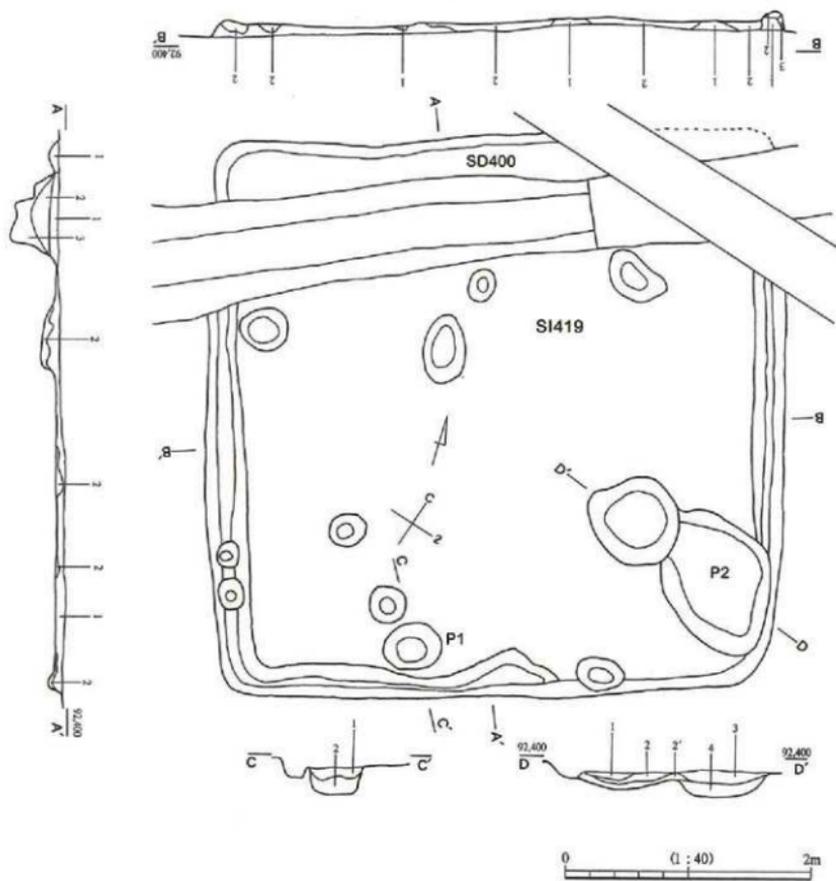
(年代)遺物の出土状況から、古墳時代後期を下限とする。

#### SI419土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備 考
SI419	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト層を含む。
	2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト層を含む。
	3	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。濁る。
	P1F1	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状を含む。炭化物含む。
	P1F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土粒含む。炭化物含む。
	P2F1	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	焼土粒含む。
	P2F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状を含む。
	P2F3	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト層を含む。
SD400	P2F4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト層を含む。
	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。下部に鉄分沈殿する。
	2	10 YR 4/1 褐灰色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状(φ5mm)含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状(φ5mm)含む。

表2 SI419遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	壁厚		外面	内面	底面			
419-01	P2	土師器	杯?					5	粗砂	黒色ミガキハケ	黒色ミガキ			7	9
419-02	P1	土師器	甕					7	粗砂	ミガキ			摩滅。被熱。	7	9



0 (1:3) 10cm

第7圖 中野目 I 遺跡SI419・出土遺物

SI205(第8図 図版3・9)

(位置・重複関係・遺存状態)L・M-7・8グリッドに位置する。V層下面からⅧ層上面で確認した。北側が調査区外となる。ほとんど攪乱をうけておらず、良好に遺存していた。

(規模・平面形・方向)一辺が約4.4mの方形のプランを持つと推定される。主軸方向は不明である。

(堆積土)F1は東側へのみ広がる。かなり厚く堆積している。遺物は全く包含していない。F2はほぼ全域に堆積している層で東側へ行くにつれて薄くなる。遺物を包含する。F3は床面直上に堆積する層で西側では検出面直下から堆積し、東側へ行くにつれて薄くなり、東側壁際では確認できない。

(壁の状況)全周において明瞭に確認された。西壁及び南壁はほぼ垂直に立ちあがるが、東壁はやや緩やかに立ちあがる。特に硬化部分等は確認されなかった。高さは最大で約35cmを測る。

(床)地山をそのまま床面にしている。やや凹凸がみられ、西側へ向ってやや傾斜する。

(柱穴)不明。

(周溝)無し。

(カマド)不明。

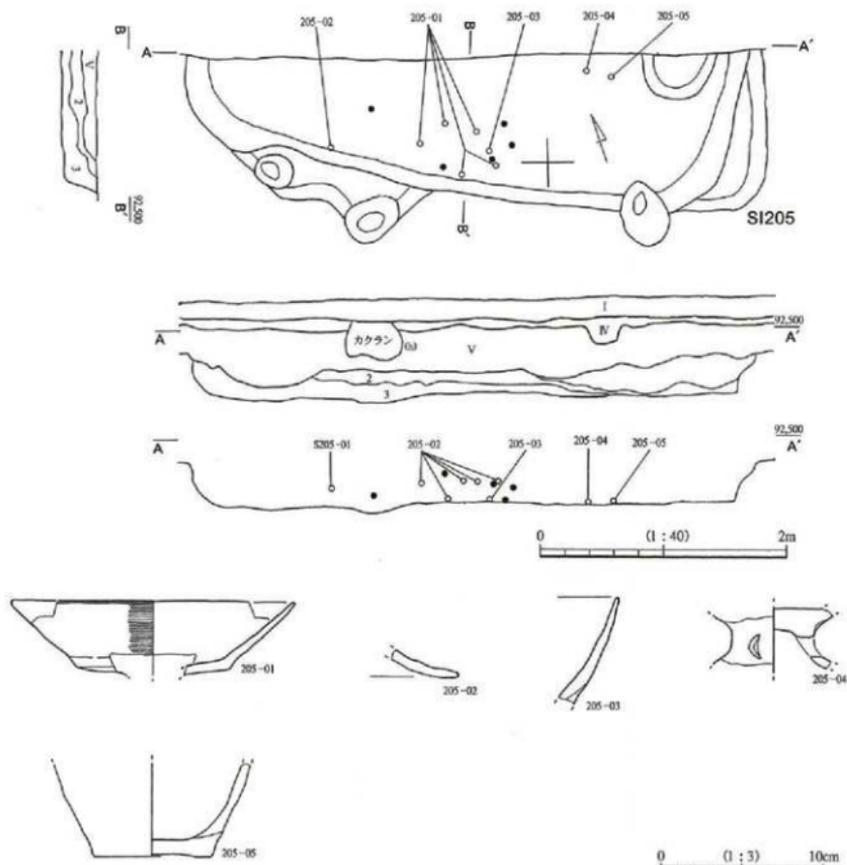
(出土遺物)南側に十数片出土したのみである。出土物には須恵器(甕)、土師器(高坏・甕)があり、須恵器の出土は微量である。図示した遺物は6点である。いずれも被熱の痕跡が認められ、遺存状態はあまり良くない。205-01は、内面に火はね痕が顕著にみられる。

SI205土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI205	1	10 YR 2/1 黒色	シルト	10YR4/4褐色シルト全体にやや多量に含む。炭化物少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト、10YR5/4にぶい黄褐色シルト全体に極めて多量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	3	10 YR 2/1 黒色	シルト	10YR4/4褐色シルト、10YR5/4にぶい黄褐色シルトまばらに多量に含む。7.5YR4/3褐色シルトブロック(φ10mm)含む。炭化物少量含む。焼土粒微量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。

表3 SI205遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	押四	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
205-01	F1	土師器	高坏		(170)			5.5	粗砂	ナアガキ	ミガキ		内面火はね。被熱。	8	9
205-02	F3	土師器	高坏			(128)		7	石英砂	ハケメ	ハケメ			8	9
205-03	Y	土師器	高坏					6.5	石英母砂	ミガキ	ミガキ		摩滅。	8	9
205-04	Y	土師器	高坏					6	細砂	ロクロナア	黒色ミガキ		被熱。	8	9
205-05	Y	土師器	甕				72	6.7	粗砂				摩滅。外面炭化物付着。被熱。	8	9



第8図 中野目Ⅰ遺跡SI205・出土遺物

(年代)須志器の出土もあったが、遺構上面の検出面付近から出土しており、遺構に伴うとは判断されない。土師器は、床面付近から出土しているが、その分布状況と遺存状態から、住居廃絶後の覆土に伴うものと判断される。よって、覆土の出土遺物から古墳時代後期を下限とする。

## SI106(第8~13図 図版2・9・10)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、V・W-2・3グリッドに位置する。I層乃至VI層下面からVII層上面で確認した。SI101、SI104に切られる。上面は耕作による削平をうけており、遺存状態はあまり良くない。

(規模・平面形・方向)一辺が約3.6mの方形のプランを持ち、主軸方向はN-27°-Wを測る。

(堆積土)水平堆積を呈すが上面が削平されているので、詳細は不明である。F1は地山起因の褐色シルトをブロック状に多量に含んでいる。F2は大量の炭化材を含んでおり、遺物の出土は基本的にこの層の下部からである。焼土は全く含んでいない。炭化材の出土から焼失家屋であると推定される。

(壁の状況)全周において比較的明瞭に確認されたが、SI104及び南東部付近でやや不明瞭である。緩やかに立ちあがる様相を呈すが、遺存状態が良くないため確認はできなかった。特に硬化部分等は認められない。高さは最大で約12cmを測る。

(床)一部に貼床がみられるが、基本的に地山を床面にしている。

(柱穴)7基のピットを確認しているが、柱穴と推定されるのはP1のみである。また、周溝を切るようにして、ピットが検出されたが、覆土の状況等から、住居には伴わないと判断される。

(周溝)幅22cm、深さ13cmでほぼ全周する。南壁付近はSI104に切られて明確ではない。

(カマド)南壁東寄りに位置する。

(出土遺物)全体的に散見されるが、カマド付近でやや密度が高い。まとまった状態で出土したものが多し。またP1付近では被熱した礫がまとまった量で出土しており、接合する。須恵器(坏)、土師器(坏・高坏・甕)が出土し、図示した遺物は10点である。106-06は須恵器坏で、ほぼ完形で出土している。この住居跡での須恵器の出土はこれ1点のみである。106-07はほぼ完形で逆位で出土している。106-08は、土師器の鉢で押し潰された状態で出土している。106-09は土師器甕で、まとまった状態で出土している。

(年代)106-06~106-09はその出土状況から一括遺物と認定できるので、古墳時代後期の所産と判断される。

## SI104(第8・9・11・12・14図 図版2・3・10・11)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、W-2・3グリッドに位置する。I層下面からVII層上面で確認した。SI106を切り、南半は調査区外となる。上面は耕作により削平をうけている。

(規模・平面形・方向)方形プランであると推定されるが大半が調査区外となるため規模は不明である。

(堆積土)一部に攪乱がみられるものの、定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。西側にカマド構築土と推定される粘土質土や焼土が認められ、また炭化物の堆積が認められる。F1・2は近似した状況を呈し、その混入物からIII層起因の堆積土の可能性がある。F3はIV層と近似した様相を呈すが、耕作による削平により、IV層である確認はできなかった。

(壁の状況)全周において比較的明瞭に確認されたが、SI106との切り合い部分がやや不明瞭である。ほぼ垂直に立ちあがる状態を示すが、VII層以上ではやや軟弱である。高さは最大で約12cmを測る。

(床)地山をそのまま床面にしている。やや凹凸がみられ、西部にカマド起因の焼土及び炭化物の広がりがみられる。

(柱穴)不明。検出できなかった。周溝を切るようにしてピットが5基検出されたが、住居に伴うもので

はないと推定される。

(周溝)無し。

(カマド)住居北西隅若しくは西壁北寄りに位置すると推定される。カマド構築土と推定される粘土質土や焼土及び炭化物を断面で確認している。全体の構造は不明である。

(出土遺物)カマド付近に密集し、そのほとんどが土師器甕である。上層から出土した小破片はほとんど接合せず、多くは流れ込みであろう。出土遺物には須恵器(坏・付付坏・蓋・甕)、土師器(坏・甕)があり、図示した遺物は12点である。

(年代)出土遺物は、その大半が住居廃絶後の堆積土に起因すると判断される。また床面付近から出土した遺物もあったが、年代を特定することはできなかった。よって覆土の出土遺物から8世紀中葉を下限とする。

#### SI101(第8・9・11・12・15図 図版2・3・11)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、W・X-1グリッドに位置する。I層下面からⅧ層上面で確認した。SD500及び近代以降の暗渠に切れ、SI106を切る。北側は調査区外となる。上面は耕作による削平をうけている。

(規模・平面形・方向)一辺が約7.5mの方形のプランを持ち、主軸はN-18°-Eを測る。

(堆積土)削平により不明瞭である。F1は中央部付近に広がる地山起因と推定される褐色シルト層で遺物の接合状況から後世の流れ込みと判断される。土壁などの崩落土に起因する可能性もあるが、確認はできなかった。F2は、遺物を包含している。F3は暗褐色シルト層で、粘質を帯び、地山のブロックを含む。貼床である。

(壁の状況)全周において明瞭に確認された。特に硬化面等は確認されなかった。遺存状態が良好でないが、ほぼ垂直に立ちあがるようである。高さは最大で約14cmを測る。

(床)中央部は地山を床面としており、壁沿いに貼床を構築している。ほぼ平坦である。部分的に焼土の広がり確認され、掘り下げると柱穴が検出された。

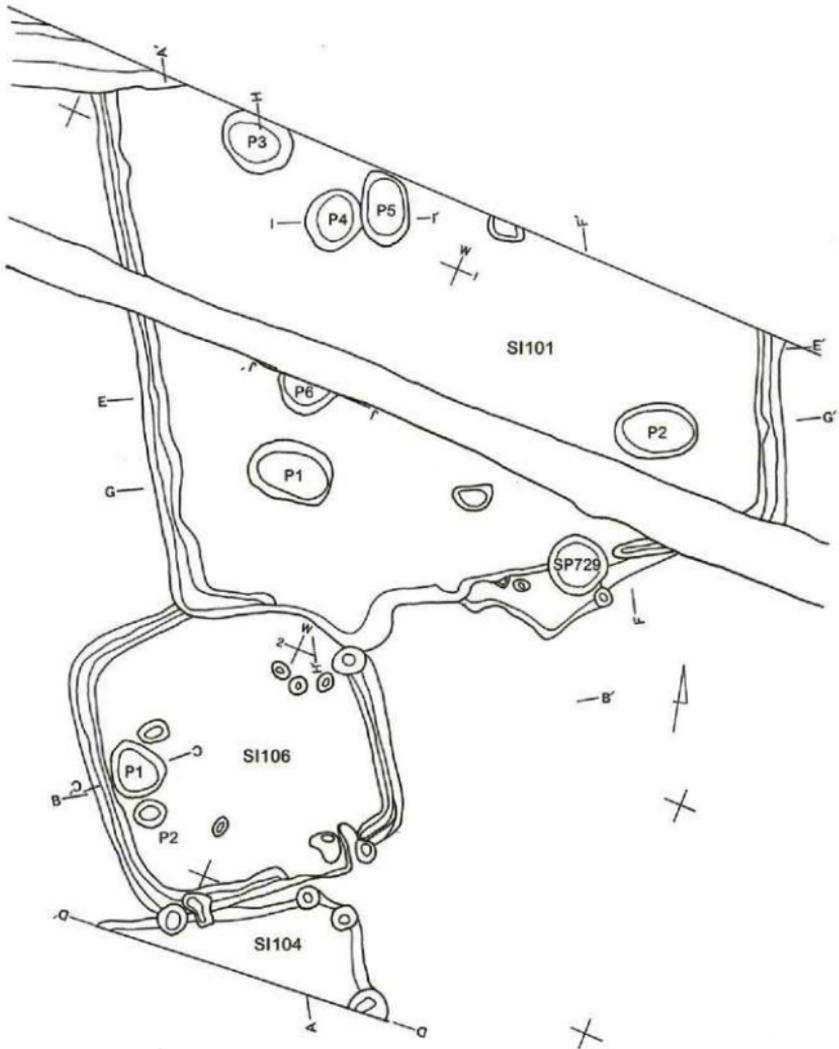
(柱穴)P1～6が確認され、主柱穴はP1～3である。覆土には多量の焼土及び炭化物を包含している。遺物の出土も多い。P4・5出土の遺物とF2とほぼ同一のレベルで出土している遺物が接合することから、P4・5そのものが住居に伴わない可能性がある。また、床面付近から掘り方にかけてまとまった量の遺物が出土したことから、柱穴や貯蔵穴を確認できなかった可能性がある。

(周溝)幅約20cm、深さ約14cmを測る。全辺に認められるが、北側は調査区外のため不明。

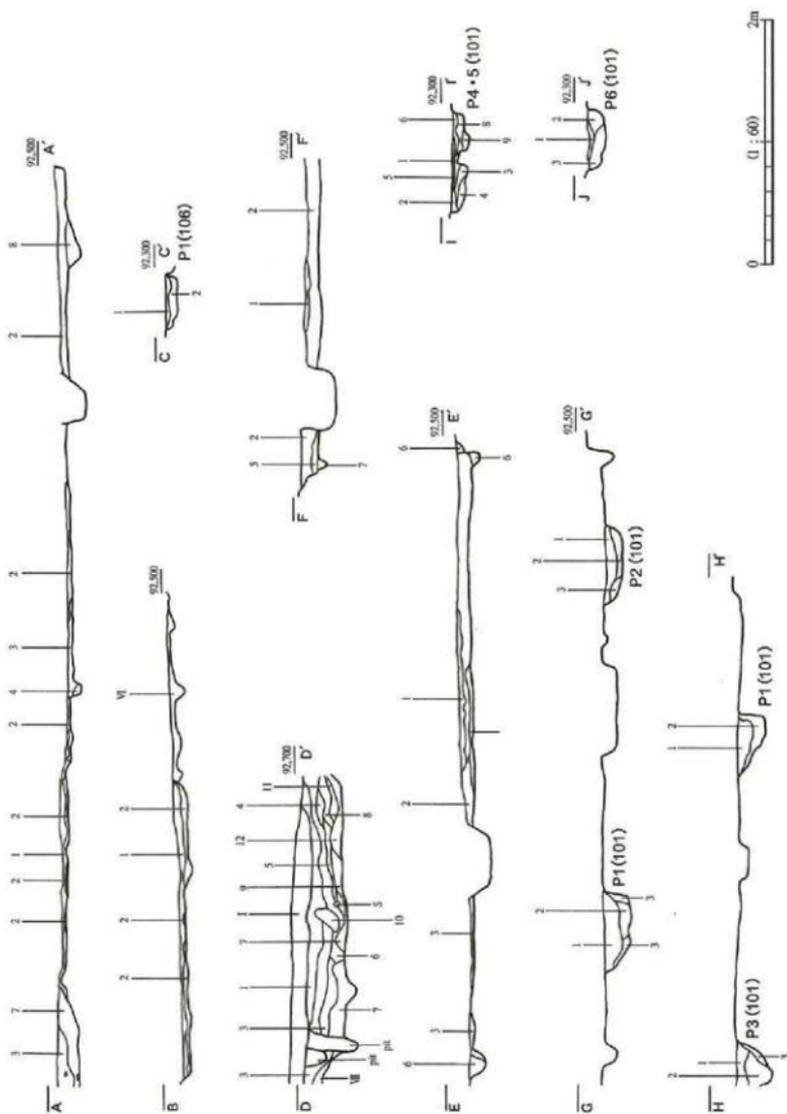
(カマド)南側のやや張り出す部分にカマドを持つ。SP729により壊されており、また削平によりほとんど遺存していない。

(出土遺物)南側カマド付近及び東側壁沿いに集中する。小破片が多く、ほとんど接合しない。またP4・5付近に密集しているものは、柱穴に伴う遺物と判断される。須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(甕)が出土し、土師器甕が大半を占める。かなり離れた距離での接合も確認されることから、大半が流れ込みの遺物であると判断される。図示した遺物は15点である。

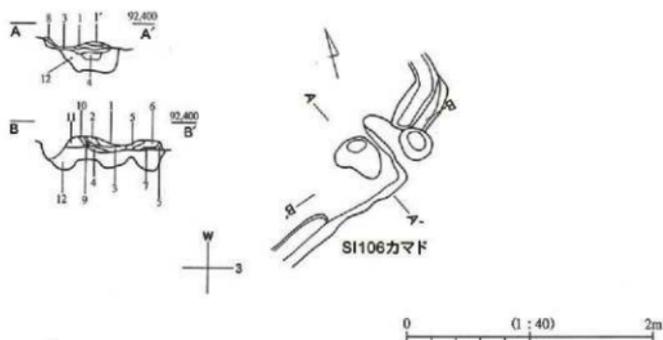
(年代)出土遺物は、住居廃絶後の覆土に伴うものと判断されるので、覆土の出土遺物から、8世紀末葉～9世紀初頭を下限とする。



第9図 中野目I遺跡SI106・104・10(1)



第10圖 中野目I遺跡SI106・104・102(2)



第11図 中野目 I 遺跡SI106カマド

SI106土層注記

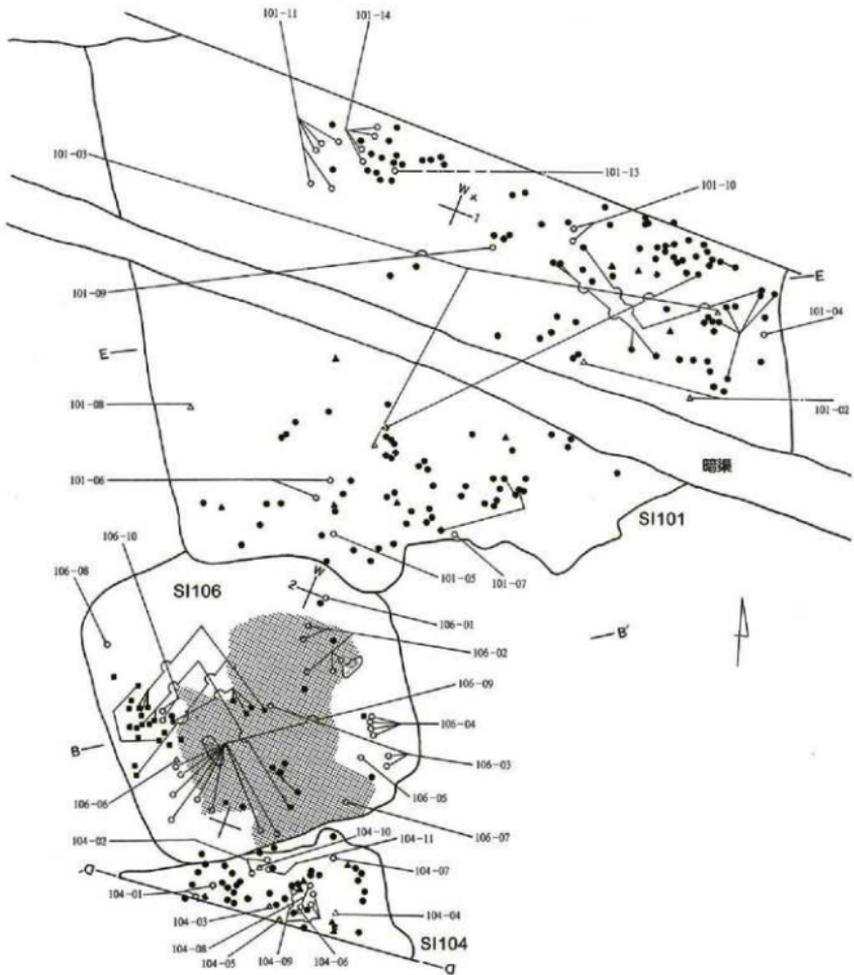
遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI106	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む(10%)。炭化物(φ1~2mm)含む(2%)。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。炭化物ブロック(φ10~50mm)含む。炭化物は構築材か?
	P1F1	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	炭化物全体を含む。焼土粒微量を含む。しまり強い。粘性やや強い。
	P1F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物全体を含む。焼土粒僅かに含む。しまり弱い。粘性やや強い。
	カマDF1	10 YR 3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土全体に多量を含む。砂多量を含む。しまりやや強い。粘性やや弱い。
	カマDF2	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	焼土全体に多量を含む。砂やや多量を含む。しまり強い。粘性弱い。
	カマDF3	7.5 YR 3/2 黒褐色	砂質シルト	炭化物微量を含む。砂少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。やや赤みがかる。
	カマDF4	10 YR 3/2 黒褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト粒状を含む(少量)。砂僅かに含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	カマDF5	10 YR 3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土やや多量を含む。砂やや多量を含む。しまり強い。粘性弱い。
	カマDF6	10 YR 2/2 黒褐色	砂質シルト	焼土微量を含む。炭化物微量を含む。砂やや多量を含む。しまり強い。粘性弱い。
	カマDF7	10 YR 3/3 暗褐色	砂質シルト	焼土微量を含む。砂やや多量を含む。しまり強い。粘性弱い。
	カマDF8	10 YR 5/4 にぶい黄褐色	砂	均質。しまり強い。粘性弱い。
カマDF9	7.5 YR 7/6 褐色	焼土	しまり強い。粘性なし。カマド内壁。	
カマDF10	7.5 YR 7/4 にぶい褐色	焼土	しまり強い。粘性なし。カマド袖。	
カマDF11	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	砂質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト全体を含む。砂少量含む。しまり強い。粘性弱い。カマド袖。	
カマDF12	10 YR 3/3 暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色シルトブロックやや多量を含む炭化物少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。カマド掘り方。	

SI104土層注記

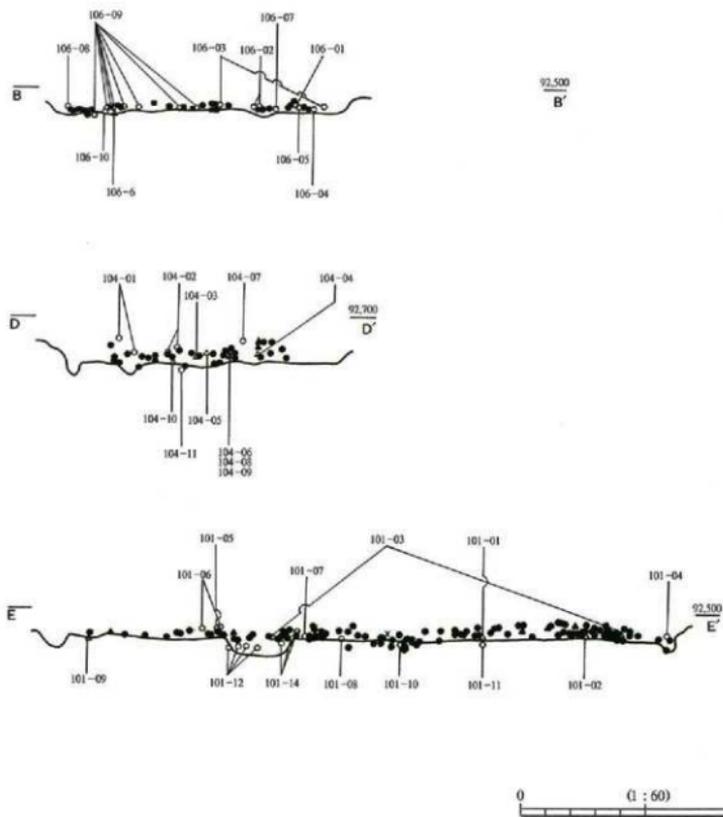
遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI104	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。焼土含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。炭化物含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。炭化物(φ1~3mm)含む(1%)。焼土粒(φ2mm)含む(1%)。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土含む。F3とF8の漸移層。
	5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊状を含む。下部に炭化物層。
	6	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト塊状を含む。しまる。
	7	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む(20%)。10YR4/4褐色シルトブロック(φ30mm)含む(5%)。焼土含む。炭化物含む。
	8	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック多量を含む。10YR4/4褐色シルトブロック含む。カマド崩落土。
	9	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊状を含む。カマド崩落土。
	10	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	炭化物含む。焼土粒含む。カマド崩落土。
	11	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4シルトブロック含む。焼土粒含む。(カマド崩落土)
	12	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4シルト塊状を含む。薄る。カマド袖。

SI101土層注記

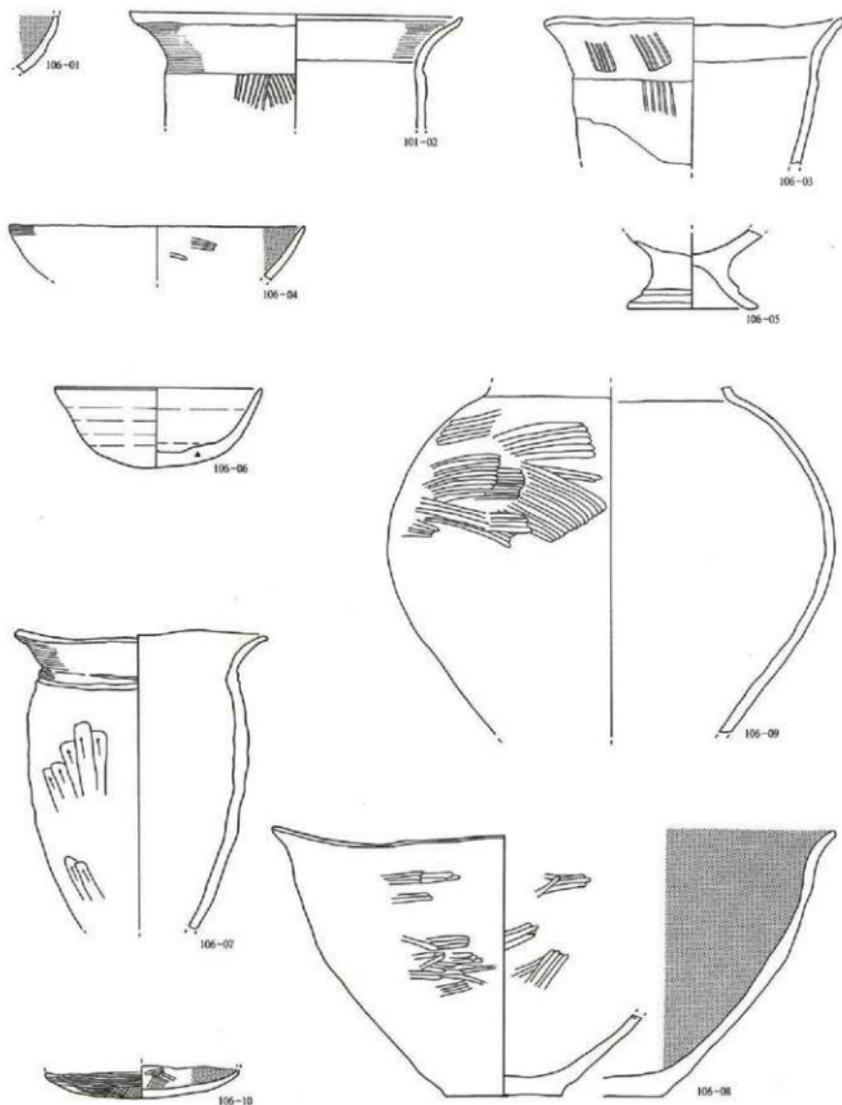
遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI101	1	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量に含む。ほぼ均質。崩壊落土?
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物(φ0.5mm)含む(1%)。焼土粒(φ1mm)含む(1%)。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2mm)を含む(20%)。10YR4/4褐色シルトブロック(φ20mm)含む(5%)。貼床か?
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む(10%)。炭化物(φ2mm)含む(5%)。周溝覆土。
	5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塵に含む。周溝覆土。
	7	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。ほぼ均質。周溝覆土。
	8	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック(φ30~50mm)含む(30%)。遺物含む。
	P1F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭化物含む。焼土含む。ポソポソする。
	P1F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塵に含む。
	P1F3	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト塵に含む(上層に偏る)。
	P2F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。
	P2F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塵に含む。
	P3F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。焼土粒微量に含む。
	P3F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塵に含む。ポソポソする。
	P3F3	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト塵に含む(上層に偏る)。
	P6F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土多量に含む。炭化物微量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	P6F2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト全体に多量に含む。炭化物少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	P6F3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト全体に多量に含む。焼土少量含む。炭化物少量含む。しまり強い。粘性強い。
	P4・5F1	10 YR 2/2 黒褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色シルト筋状に含む。しまり強い。粘性強い。
	P4・5F2	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト少量含む。焼土微量に含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	P4・5F3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	焼土やや多量に含む。遺物含む。しまり弱い。粘性強い。
	P4・5F4	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	F3の土をやや多量に含む。焼土少量含む。炭化物少量含む。しまり弱い。粘性強い。
	P4・5F5	10 YR 4/4 褐色	シルト	焼土少量含む。しまり強い。粘性やや強い。F2に似る。
	P4・5F6	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト多量に含む。焼土全体に含む。炭化物少量含む。しまりやや強い。粘性やや強い。
	P4・5F7	10 YR 3/3 暗褐色	砂質シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。しまり強い。粘性やや強い。
	P4・5F8	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	焼土やや多量に含む。遺物含む。しまり弱い。粘性強い。



第12図 中野目Ⅰ遺跡SI106・104・101(3)



第13圖 中野目 I 遺跡SI106・104・101 (4)

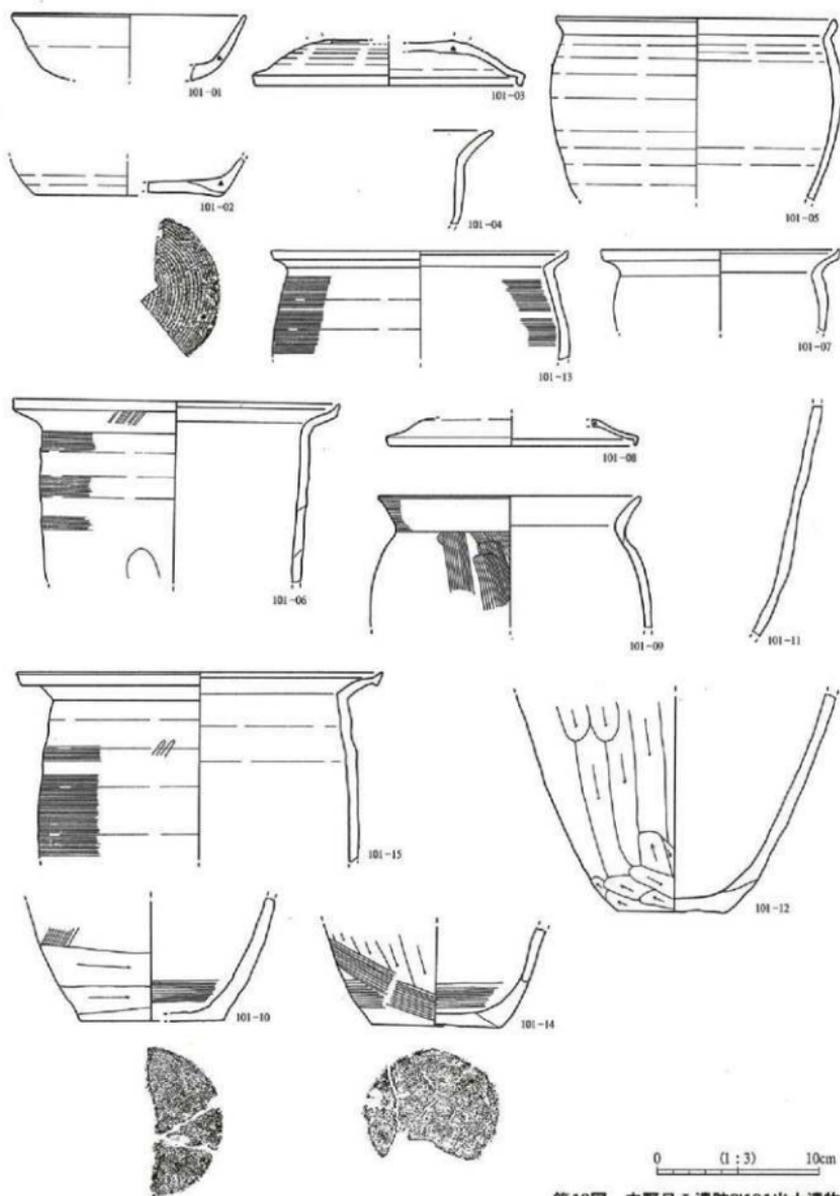


0 (1:3) 10m

第14図 中野目I遺跡SI106 出土遺物



第15図 中野目I遺跡S104出土遺物



第16図 中野目 I 遺跡S101出土遺物

表4 SI106遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
106-01	F1	土師器	坏					6	雲母粗砂	ケズリミガキ	黒色ミガキ			14	9
106-02	F1	土師器	甕		(200)			5.5	粗砂	ナデハケメ	ナデ			14	9
106-03	F1	土師器	甕		180			6	粗砂	ハケメ	ナデ			14	9
106-04	F2	土師器	坏		(176)			5	雲母粗砂	ナデミガキ	黒色ミガキ		坏? 被熱。	14	9
106-05	F2	土師器	高坏			78		7	石英・雲母・海綿骨針	ハケメ	ミガキ			14	9
106-06	Y	須恵器	坏		126	74	48	5	細砂	ロクロ	ロクロ	回転蹴切	胴部から被熱産物多数出土。	14	10
106-07	Y	土師器	甕		152			7	石英・雲母・凝灰岩質砂	ナデケズリ	ナデミガキ		逆位で埋設。	14	10
106-08	Y	土師器	鉢		(280)	70	164	7	雲母粗砂	ミガキハケメ	黒色ミガキ	不明	内外面炭化物付着。被熱。	14	10
106-09	Y	土師器	甕					5	石英・雲母・粗砂	ミガキ	ミガキ		外面炭化物付着。被熱。	14	10
106-10	P1	土師器	甕			(90)		6	粗砂	ハケメ	黒色ミガキ	ハケメ		14	10

表5 SI104遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
104-01	F1-2	土師器	甕	II D8	(228)			6	石英・雲母・海綿骨針	ロクロナデ	ナデ		外面炭化物付着。	15	10
104-02	F2	土師器	甕	II D7c		80		6	雲母粗砂	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		15	11
104-03	F3	須恵器	坏	I Aa	142	86	38	4	凝灰岩質砂・粗砂	ロクロ	ロクロ	回転蹴切	底部窪掘き「×」	15	10
104-04	F3	須恵器	坏	I Aa	(134)	(80)	39	6.3		ロクロ	ロクロ	回転蹴切	摩滅。	15	11
104-05	F3	須恵器	甕	I C				6	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロケズリ	ロクロ			15	11
104-06	F3	須恵器	甕	I D2				6.6	粗砂	クタクキロクロナデ	ロクロナデ			15	11
104-07	F3	土師器	坏	II Ab		(60)		8	石英・海綿骨針	ミガキ	黒色ミガキ	不明		15	11
104-08	F3	土師器	甕	II D8	(188)			5	雲母・海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ		被熱。	15	10
104-09	F3	土師器	甕	II D8	(236)			6	石英・雲母・海綿骨針	クタクキロクロナデハケメ	ロクロナデハケメ		アテ痕らしき円形の窪みが取られるも形状は不明。内外面炭化物付着。	15	10
104-10	F7	須恵器	甕	I D1				6	石英・凝灰岩質砂	クタクキナデ	ハケメ			15	11
104-11	Y	土師器	甕	II D8	(256)			6	雲母・凝灰岩質砂	ロクロナデハケメ	ロクロナデハケメ			15	10
104-12	F	土師器	坏	II Ab	(150)	84	33	4	石英・雲母・粗砂	ミガキ	黒色ミガキ			15	11

表6 SI101遺物観察表

遺物 番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	挿図	図版	
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面
101-01	F2	須臬器	坏	IA	(140)			5	凝砂	ロクロ				10	11
101-02	F2	須臬器	坏	IAc		(130)		4.5	凝灰岩質 凝灰質砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	底部墨書 「□」	10	11
101-03	F2	須臬器	甕	IC	(164)			4.5	石英凝灰 凝灰質砂	ロクロ ケズリ	ロクロ			10	11
101-04	F2	土師器	甕	IID1				6	雲母	ハケメ ナデ	ハケメ		摩滅	10	11
101-05	F2	土師器	甕	IID7①	(170)			4	雲母 凝灰岩質 凝灰質砂	ロクロ ナデ	ロクロ ナデ			10	11
101-06	F2	土師器	甕	IID8	(196)			6	雲母 凝灰岩質 凝灰質砂	ハケメ			摩滅	10	11
101-07	F3	土師器	甕	IID7②	(144)			6	石英凝灰 岩質砂				摩滅	10	11
101-08	Y	須臬器	甕	IC	(152)			3	凝灰岩質 砂 海綿 骨針	ロクロ	ロクロ			10	11
101-09	Y	土師器	甕	IID2	(158)			6	凝灰岩質 砂	ナデ ハケメ	ナデ			10	11
101-10	Y	土師器	甕	IID5d		(88)		8	石英凝灰 骨針	ハケメ ケズリ	ハケメ	不明		10	11
101-11	P4	土師器	甕	IID8				6	雲母 粗 砂	ケズリ	ヘラナデ			10	
101-12	P4	土師器	甕	IID8f		(66)		7.5	雲母 粗 砂	ケズリ	ナデ			10	
101-13	P5	土師器	甕	IID8	(178)			5	雲母 凝灰岩質 凝灰質砂	ハケメ	ハケメ			10	11
101-14	P5	土師器	甕	IID5		78		7	雲母 凝灰岩質 凝灰質砂	ハケメ	ハケメ	ナデ		10	11
101-15	F	土師器	甕	IID8	(220)			7	雲母 粗 砂	ケナキ ロクロ ナデ ハケ メ	ロクロ ナデ			10	

## SI14(第16~18図 図版4・11・12)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、W・X-7・8グリッドに位置する。I層下面からⅧ層上面で確認した。北側の一部が調査区外となる。SI8に切られる。上面は耕作により削平をうけている。

(規模・平面形・方向)一辺が約4.5mの方形のプランを持ち、主軸方向はN-42°-Wを測る。

(堆積土)層厚は一定せず、かなり不安定な様相を呈す。F11(P1)、F12(P3)は柱穴の覆土である。

(壁の状況)ほぼ垂直に立ちあがる。特に硬化部分等は確認されなかった。高さは最大で約15cmを測る。

(床)地山を床面している。ほぼ平坦で特に硬化面等は確認されない。東側に小範囲ながら焼土の広がりが見られる。カマド起因のものと推定される。

(柱穴)P1~4の4本が確認され、P1~3が主柱穴である。

(周溝)西壁から南壁にかけて確認された。幅約18cm、深さ約10cmを測る。

(カマド)南壁東側に位置する。断面で確認した。SI8に切られて詳細は不明である。

(出土遺物)北西隅に僅かに分布するのみで、ほとんどが小破片である。P3付近にやや密集する。須臬器(坏・台付坏・甕)、土師器(坏・甕)が出土している。図化した遺物は6点である。14-06は南壁の立ち上がり部分からの出土である。

(年代)出土遺物は、その層位及び出土状況から、住居廃絶後の覆土に伴うものと判断される。よって覆土出土遺物の年代から、8世紀末葉~9世紀初頭を下限とする。

SI8 (第16・17・19図 図版4・12)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、X-7・8グリッドに位置する。W層上面で確認した。SI14を切る。上面は耕作による削平をうけており、東側の一部が遺存しているのみである。

(規模・平面形・方向)遺物の接合関係から、一辺が南北約3.2m、東西約3.2m以上のやや東西方向に長い方形のプランと推定される。主軸方向はN-76°-Wを測る。

(堆積土)削平されて不明瞭であるが、定期的に堆積したレンズ状堆積を呈するようである。F1は南西部に一部みられるのみで他の部分では見当たらない。F2は全面的に堆積する層で、この層から遺物のほとんどが出土している。F3は北東部付近に堆積する層で焼土及び炭化物を僅かながら包含する。カマド由来の覆土と判断される。

(壁の状況)東半で確認されたに過ぎない。北壁はセクションで確認している。最も残存している部分で高さが約9cmを測る。

(床)地山を床面とする。ほぼ平坦である。

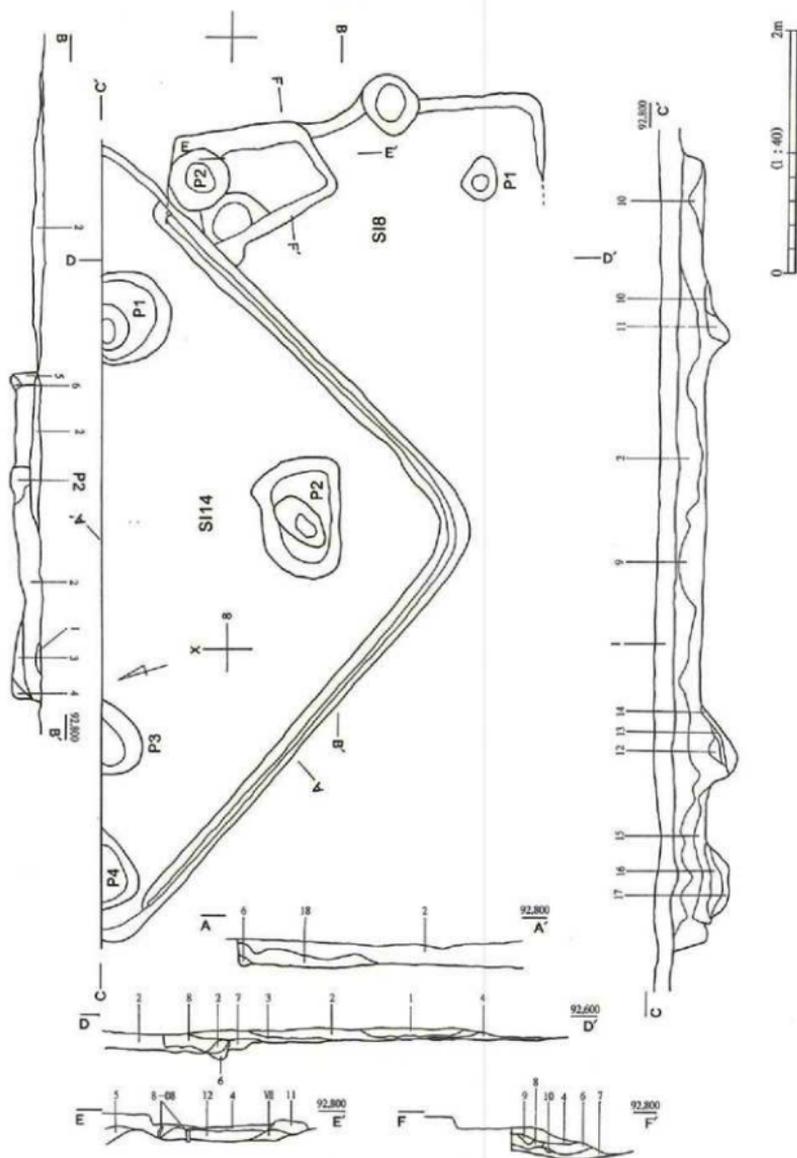
(柱穴)P1・2の2本が確認された。P1は主柱穴と判断される。またカマド脇にP2が確認されたが、カマドに近接していることから柱穴にならないと推定される。

SI14土層注記

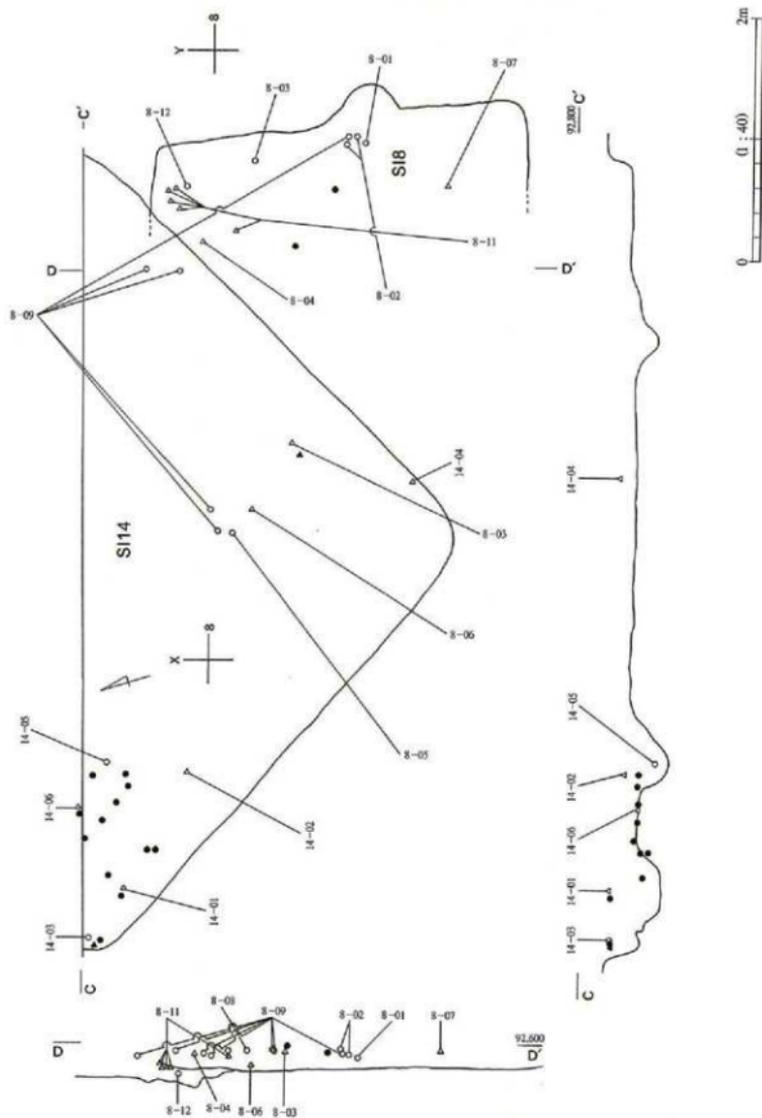
遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI14	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2mm)を含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊を含む。滑る。
	4	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊を含む。滑る。
	5	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。ほぼ均質。
	6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2mm)を含む(少量)。層積覆土。
	7	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状を含む。
	8	5 YR 5/8 明赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルトブロック含む。SI8に切れ、壊される。カマドの一部か?
	9	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊を含む。
	10	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。滑る。柱穴掘り方?
	11	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック含む。ボソボソする。柱穴覆土(P1)。
	12	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。柱穴覆土(P3)。
	13	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック含む。焼土含む。
	14	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。滑る。
	15	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト含む。焼土含む。炭化物含む。滑る。
	16	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。滑る。
	17	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト織状を含む(P16との境界に偏る)。
	18	10 YR 4/4 褐色	シルト	均質。壁崩落土か?

SI8土層注記

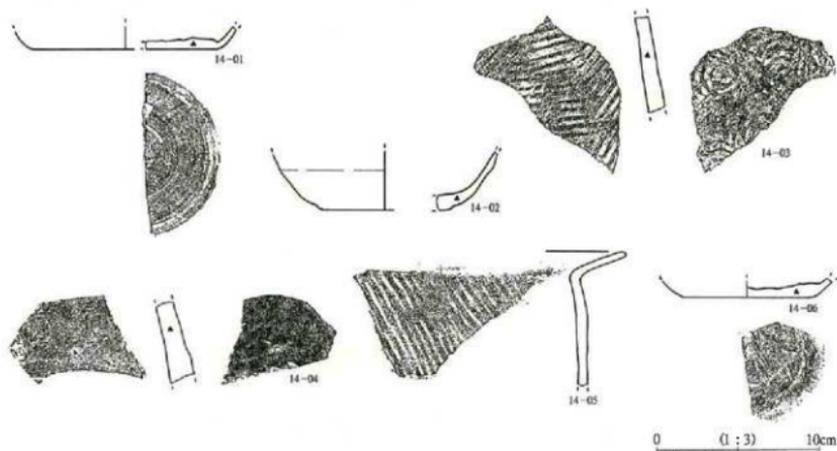
遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI8	1	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む。壁崩落土か?
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2mm)を含む(少量)。焼土含む。炭化物含む。
	4	5 YR 5/8 明赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルトブロック含む。
	5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック含む。
	6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック含む。10YR3/2黒褐色シルト織状を含む。カマド崩落土。
	7	5 YR 3/2 暗赤褐色	シルト	焼土微量を含む。
	8	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト含む。焼土ブロック含む。
	9	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック含む。F1と同じか?
	10	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。F4と同じか?
	11	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト塊を含む。焼土粒含む。炭化物含む。
	12	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状を含む。
	13	5 YR 3/2 暗赤褐色	焼土	



第17図 中野目 I 遺跡SI14・8(1)



第18圖 中野目I遺跡SI14・8(2)



第19図 中野目Ⅰ遺跡SI14出土遺物

表7 SI14遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
14-01	F2	須恵器	坏	IAa		(112)		4	石英・凝灰岩質砂	回転寛切	回転寛切	回転寛切	内外面炭化物付着。	19	11
14-02	F2	須恵器	坏	IA		(74)		4	石英・凝灰岩質砂 海綿骨針	回転寛切	回転寛切	回転寛切	回転寛切か?	19	12
14-03	F2	須恵器	甕	ID1				8.5	石英・凝灰岩質砂 海綿骨針	平行叩き目	同心円状アテ痕			19	12
14-04	F2	須恵器	甕	ID1				13	凝灰岩質砂	ナデ	ナデ			19	12
14-05	F13	土師器	甕	ID				6	石英・凝灰岩質砂 海綿骨針	タタキ 回転ナデ			摩滅。	19	12
14-06	Y	須恵器	坏	IAa		(76)		4	凝灰岩質砂 海綿骨針	回転寛切	回転寛切	回転寛切		19	12

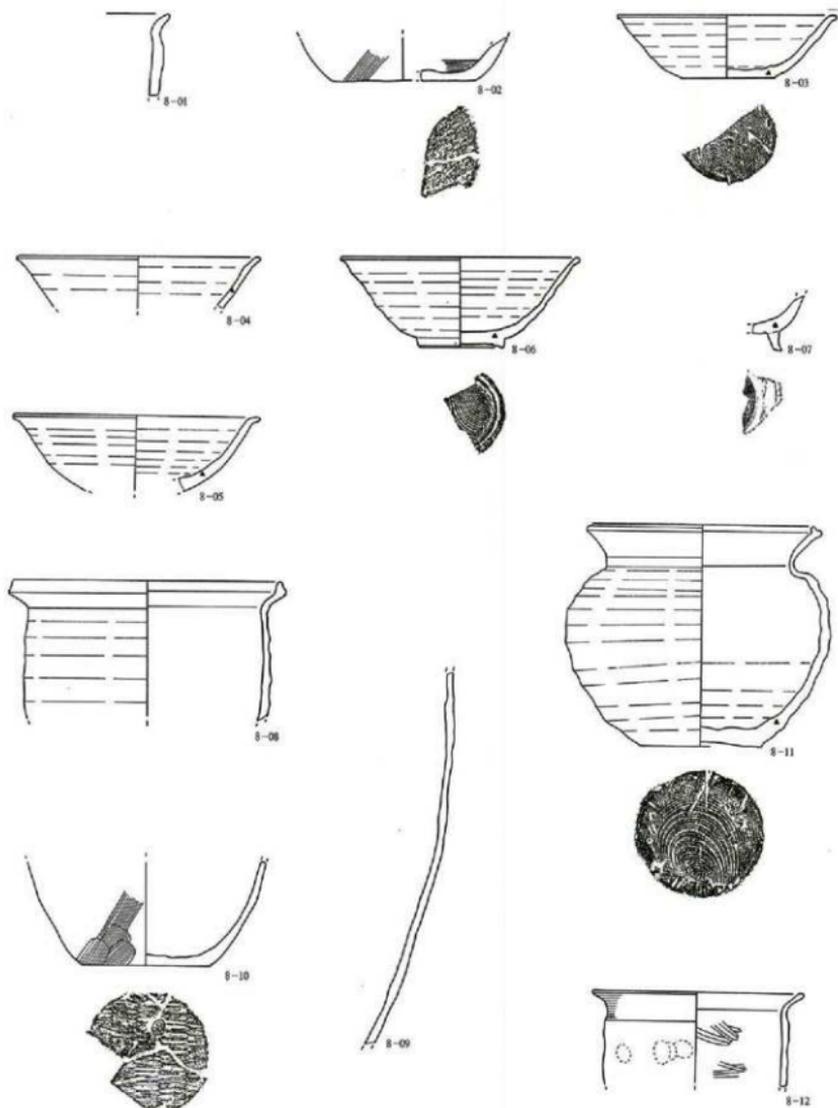
(周溝)無し。

(カマド)東壁北寄りに位置する。削平により全体の構造は不明。

(出土遺物)遺物はカマド付近にやや密集している。須恵器(坏・台付坏・壺)、土師器(甕)が出土している。図化した遺物は12点である。8-11はP2から一括して出土している。内面に自然釉がかかり、火はね痕がみられる。

(年代)住居跡の遺存状態が良好でないことから、床面出土の遺物を抽出することができなかった。覆土出土遺物の年代から、9世紀中葉を下限とする。

Ⅲ 中野目Ⅰ遺跡



0 (1:3) 10cm

第20圖 中野目Ⅰ遺跡S18出土遺物

表8 SI8 遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	持図	図版		
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面	
8-01	F1	土師器	甕	II D1				7	凝灰岩質砂	ハケメナナ	ハケメ			20	12	
8-02	F1	土師器	甕	II D5		(84)		7	砂	ハケメ	ハケメ	腐物圧痕	被熱。	20	12	
8-03	F2	須恵器	坏	I Ac	(132)	(28)	38	4.1	凝灰岩質砂 海綿骨針	ロクロ	ロクロ		回転糸切	20	12	
8-04	F2	須恵器	坏	I A	(148)			3	細砂	ロクロ	ロクロ			20	12	
8-05	F2	須恵器	坏	I A	(150)			4.5	海綿骨針	ロクロ	ロクロ			20	12	
8-06	F2	須恵器	台付坏	I Bc	(144)	52	55	4.5	石英 凝灰岩質砂 海綿骨針	ロクロ	ロクロ		回転糸切	20	12	
8-07	F2	須恵器	台付坏	I B				7	凝灰岩質砂	ロクロ	ロクロ	不明	回転糸切か?	20	12	
8-08	F2	土師器	甕	II D7①	(168)			6	石英 雲母	ロクロナア			カマド印体。内面炭化物付着。被熱。	20	12	
8-09	F2	土師器	甕	II D5				6	砂	ハケメミガキ	ハケメ			20	12	
8-10	F	土師器	甕	II D5e		75		6	凝灰岩質砂	ハケメ		腐物圧痕	内外面炭化物付着。被熱。	20	12	
8-11	P2	須恵器	甕	I E1c	(142)	74	136	6	石英 凝灰岩質砂 海綿骨針	ロクロ	ロクロ		回転糸切	内外面自然釉。	20	12
8-12	P2	土師器	甕	II D1	(128)			6	石英 雲母 凝灰岩質砂	ロクロナア 指頭痕	ミガキ			内外面炭化物付着。被熱。	20	12

## SI225(第20図 図版3・12・13)

(位置・重複関係・遺存状態)J-K-7・8グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認された。北側が調査区外となる。上面は試掘の際のトレンチで削平されている。

(規模・平面形・方向)一辺が約3.4mの方形プランを持つと推定され、主軸方向は不明である。

(堆積土)F1は東側及び南側にのみ、F2は東側にのみ確認されることから、切り合いがあった可能性もある。その他の層は各層とも全体的に堆積し、西側から東側へかけて薄くなる。

(壁の状況)全周で明瞭に確認された。西壁及び南壁はほぼ垂直に立ちあがっていくが、東壁のみ、緩やかに立ちあがる。特に硬化部分等は確認されなかった。高さは最大で約24cmを測る。

(床)地山を床面にしている。ほぼ平坦で、顕著な凹凸等は認められない。

(柱穴)6本のピットが確認されたが、柱穴となるかは不明。

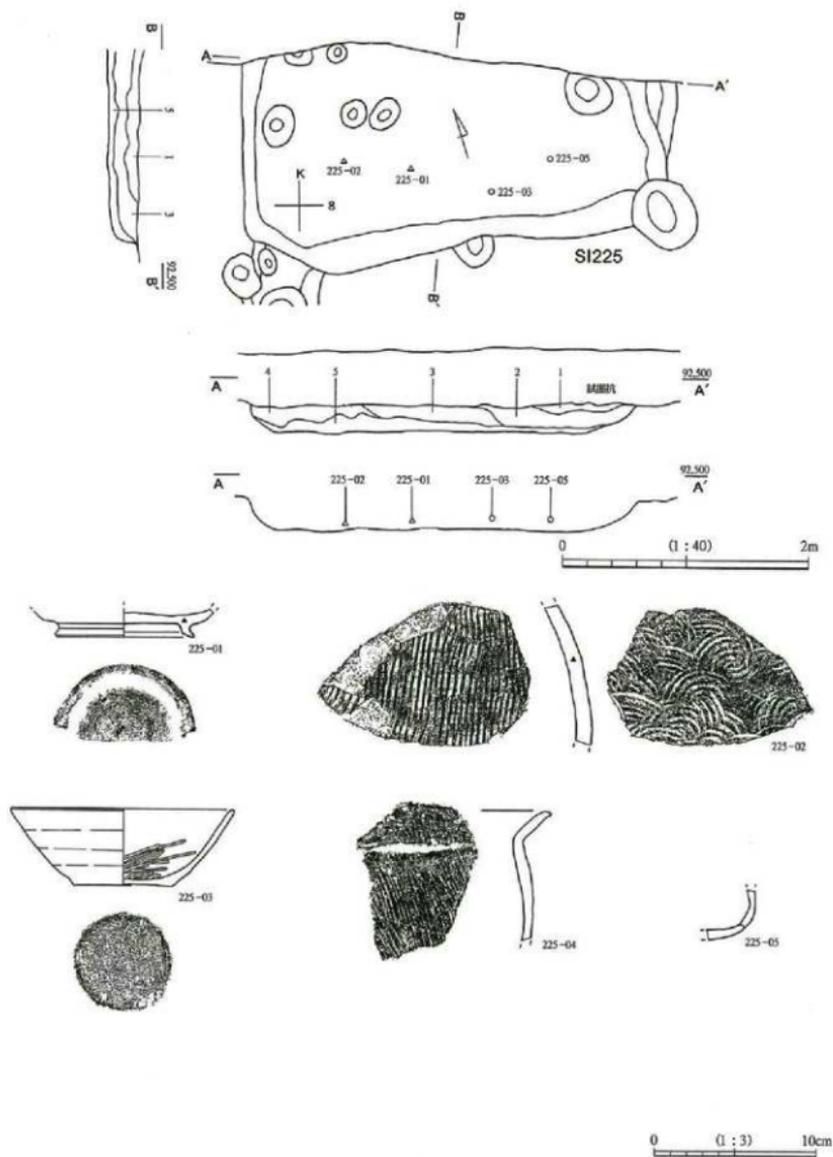
(周溝)無し。

(カマド)試掘調査の際に、調査区外にあたる東壁にカマドと推定される焼土の広がりを確認している。

(出土遺物)10数片が出土したのみである。須恵器(台付坏・甕)、土師器(内黒坏・甕)が出土している。

図化した遺物は5点である。225-03はほぼ完形の状態出土しているが、外面は、摩滅が激しい。225-05は被熱しており、摩滅している。恐らく底部と判断されるが器形は不明である。

(年代)遺物はほぼ床面から出土しているが、その遺存状況及び接合関係から、覆土に伴う遺物と判断される。よって9世紀中葉を下限とする。



第21圖 中野目I遺跡SI225・出土遺物

## SI225土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI225	1	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトまだらに含む。濁る。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5~10mm)に含む。炭化物微量に含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)に含む。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	5	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2mm)に含む。下部に炭化物多量に含む。

表9 SI225遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	埴圓	四取	
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面
225-01	F5	須恵器	台付	I Bb		(84)		6	薄緑骨針	ロクロ	ロクロ	回転切削		21	13
225-02	F5	須恵器	甕	I D 1				9	薄緑骨針 粗砂	クダキ	アテ			21	13
225-03	F5	土師器	坏	II Ac	135	58	48	3.5	細砂	ロクロ	黒色ミガキ	回転切削	摩滅。	21	12
225-04	F5	土師器	甕	II D				6.5	粗砂	ハケメ ナデ	ナデ ケメ		外面炭化物付着。	21	13
225-05	F5	土師器	不明	II				4.5	粗砂	不明	不明	旋削り	手捏ね? 被熱。	21	13

## SI256(第21~24図 図版3・13・14)

(位置・重複関係・遺存状態)F・G-7~9グリッドに位置する。Ⅷ層上面で確認した。南側の一部(カマド煙道部分)が調査区外となる。SD257・259、SP258に切られる。上部が耕作によりやや削平をうけているものの、良好に遺存していた。

(規模・平面形・方向)5.1m×4.6mの方形のプランを持ち、主軸方向はN-17°-Eを測る。

(堆積土)層厚はほぼ一定であるが、やや起伏に富んでいる。F1はやや色調が明るく、他の住居跡では観察されない。また、F1出土遺物の接合関係をみると、北東から南西にむけて、出土レベルがやや低くなる傾向にあることから、断面では確認できなかったが、F1は北東から南西にかけて厚くなる傾向にあるようである。前節で述べたように、このF1は、洪水による堆積土の可能性もあるが、確証は得られなかった。F3は南側カマド付近でのみ確認される層で、恐らくカマドの崩落土であると推定される。

(壁の状況)全周で明瞭に確認された。西壁のみ緩やかに立ち上がり、他の壁はほぼ垂直に立ちあがる。東壁北側がやや張り出す。特に硬化部分等は確認されなかった。高さは最大で約31cmを測る。

(床)地山を床面にしている。やや凹凸がみられる。

(柱穴)15本のピットが検出されている。主柱穴を構成するのは、P1・2である。

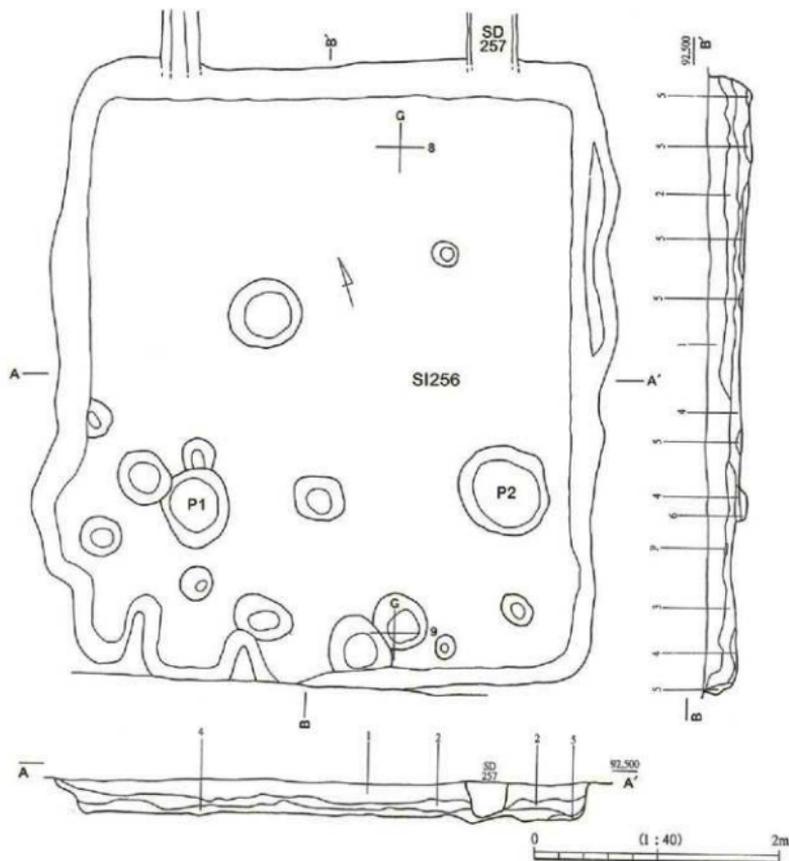
(周溝)無し。

(カマド)南壁やや西寄りに位置する。煙道が伸びるが、調査区外のため不明。

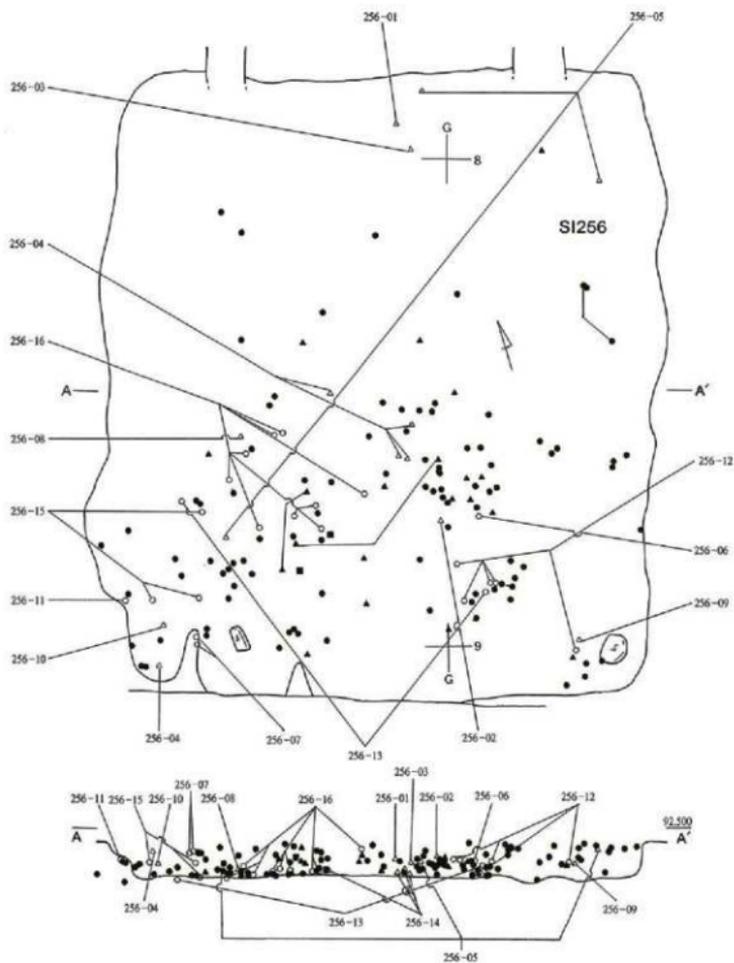
(出土遺物)住居南半のカマド付近に密集し、北半では十数片が散見されるに過ぎない。接合関係はかなり広範囲にわたる。層毎の傾向として、F1出土遺物の須恵器は、底部切り離しが回転切削のものを主体としており、F2以下の層では、回転切削の遺物を主体としている。また検出面付近出土の遺物も多数存在することから、ほとんどは流れ込みによるものと推定される。須恵器(坏・台付付・甕・甕)、土師器(内黒坏・台付坏・甕)、被蒸窯が出土している。図化した遺物は17点である。256-04は、須恵器双耳環で、体部に対称の剥離痕が認められる。高台部分に窺描きらしき痕跡が認められるが、意図したものであるかは判断ができない。底部に墨書が認められる。また、256-10の須恵器甕には、256-05

と同一文字の墨書がなされており、出土位置も近く、セットをなしていた可能性がある。256-12の土師器甕は、この器形で底部に葉脈痕が認められるのはこの遺物のみである。256-16の土師器長胴甕は、被熱しており、体部外面上半に炭化物が付着する。外面に縦位の刷毛目が施されており、底部に繩物圧痕が認められる。この住居でのみ出土する器形である。

(年代)出土遺物は、床面付近から、検出面付近まで満遍なく出土しており、またその接合関係はかなり広範囲にわたることから、出土遺物の大半は覆土に伴う遺物と判断される。よって覆土の出土遺物から9世紀前葉を下限とする。



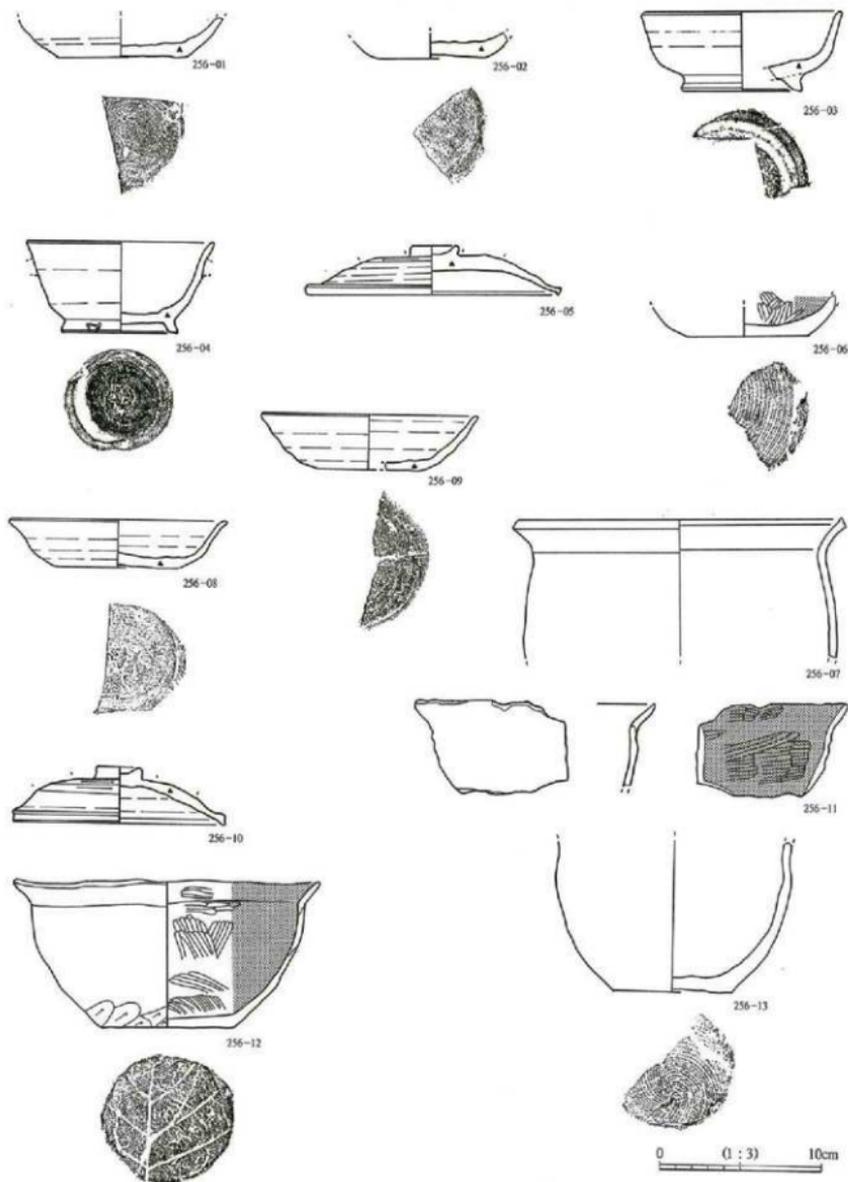
第22図 中野目I遺跡SI256(1)



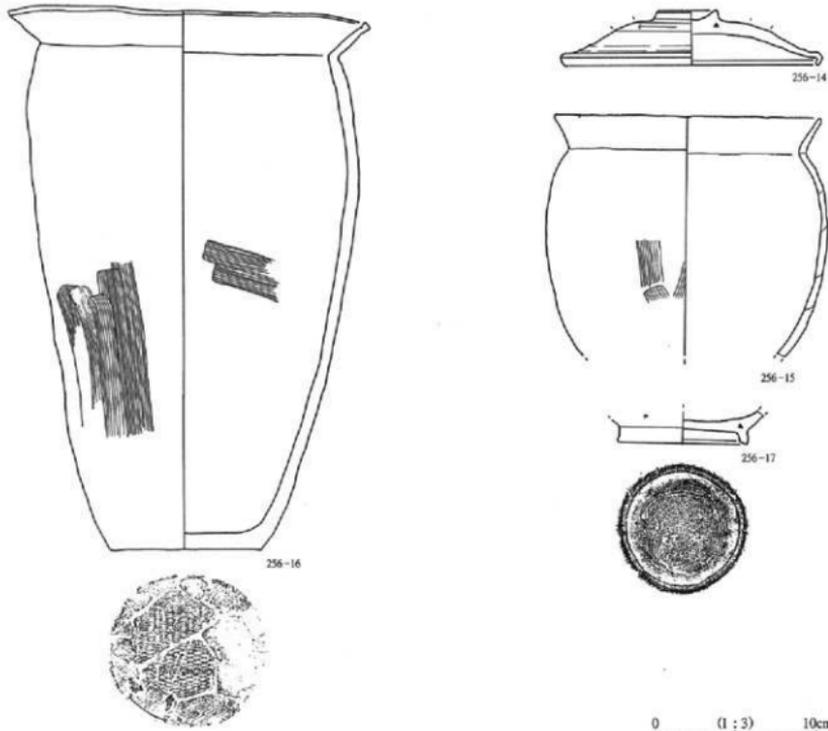
0 (1 : 40) 2m

第23図 中野目 I 遺跡SI256(2)

III 中野目 I 遺跡



第24図 中野目 I 遺跡S256出土遺物(1)



第25図 中野目 I 遺跡SI256出土物(2)

SI256土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI256	1	10 YR 4/1 褐灰色	シルト	ほぼ均質。非常にしまる。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ 5mm)を含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	炭土粒(φ 5~10mm)含む。10YR4/4褐色砂含む。
	4	10 YR 5/2 灰黄褐色	細砂	10YR3/2黒褐色シルト斑を含む。貼床?
	5	10 YR 5/2 灰黄褐色	細砂	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。堆山。
	6		炭化物層	炭土粒(φ 20mm)含む。

表10-1 SI256遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	挿図	図版		
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面	
256-01	F1	須恵器	杯	I Ac		(78)		6	雲母	ロクロ	ロクロ	回転糸切		24	13	
256-02	F1	須恵器	杯	I Ac			66	8	細砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		24	13	
256-03	F1	須恵器	台付耳	I B	(120)	(72)		48	6	細砂	ロクロ	ロクロ	不明	摩擦。	24	13
256-04	F1	須恵器	双耳杯	I Ba	112	70	56	4	粗砂	ロクロ	ロクロ	回転寛切	底部陽書「常」? 白に染抜き の記号?	24	13	

表10-2 SI256遺物観察表

遺物 番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
256-05	F1	須恵器	蓋	I C1c	153		30	7	凝灰岩質 砂 海綿 骨針 粗砂	ロクロ ケズリ	ロクロ	天井部回 転糸切		24	13
256-06	F1	土師器	坏	II Ac		(76)		6	粗砂	ロクロ	黒色ミガ キ	回転糸切		24	13
256-07	F1	土師器	甕	II D7①	(200)			4.3	粗砂	ロクロナ デ			摩滅。	24	14
256-08	F2	須恵器	坏	I Aa	(130)	(70)	29	4	細砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		24	13
256-09	F2	須恵器	坏	I Aa	130	60	34	4.5	細砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	被熱。	24	13
256-10	F2	須恵器	蓋	I C1	127		34	5.5	砂	ロクロ	ロクロ		内面墨書 「香」?	24	13
256-11	F2	土師器	甕	II D3				4	粗砂		黒色ミガ キ		摩滅。被 熱。	24	14
256-12	F2	土師器	甕	II D3d	(184)	78	91	4	砂	ケズリ ナデ	黒色ミガ キ		素眼痕	24	13
256-13	F2	土師器	甕	II D7c		70		6	粗砂	ロクロナ デ	ロクロナ デ	回転糸切	摩滅・割 離。被熱。	24	13
256-14	F4・ P1	須恵器	蓋	I C1	158		34	6	凝灰岩質 砂 海綿 骨針 粗砂	ロクロ ケズリ	ロクロ			25	13
256-15	F4	土師器	甕	II D5	(160)			5	雲母 粗 砂	ハケメ	ナデ		内面炭化 物付着。 被熱。	25	14
256-16	F4	土師器	甕	II D4e	215	90	333	7	粗砂	ハケメ	ハケメ	縦物圧痕	被熱。	25	13
256-17	F	須恵器	台付 坏	I Bc		78		6	海綿骨針 粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		25	13

## SI465(第26~28図 図版4・14・15)

(位置・重複関係・遺存状態)S・T-0・1グリッドに位置する。VII層上面で確認している。北半が調査区外となる。自然堆積土に厚く覆われており、良好に遺存している。

(規模・平面形・方向)一辺が約4.4mの方形のプランを持つと推定され、主軸方向はN-2°-Eを測る。

(堆積土)定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。F1はIII層との近似した様相を呈し、間に若干の遺物を包含しており、同一の層である可能性がある。F4は地山起因の褐色シルトを粒状に若干包含し、IV層と近似した様相を呈する。IV層起因の堆積土と推定される。F5は暗褐色土を微量に含んだ地山起因の褐色シルトで、壁の崩落土である。F6は、暗褐色シルトをブロック状に混在する褐色シルトでやや硬く、壁を構築している可能性がある。

(壁の状況)全周で明瞭に壁際に確認された。西壁では、壁面を構築している可能性がある(F6)。西壁及び南壁はほぼ垂直に立ちあがるが、東壁は崩落しており、立ちあがりは緩やかである。高さは最大で約53cmを測る。

(床)西半に貼床を構築している。但し、床面付近が湧水帯になっており詳細は不明である。

(柱穴)確認できなかった。

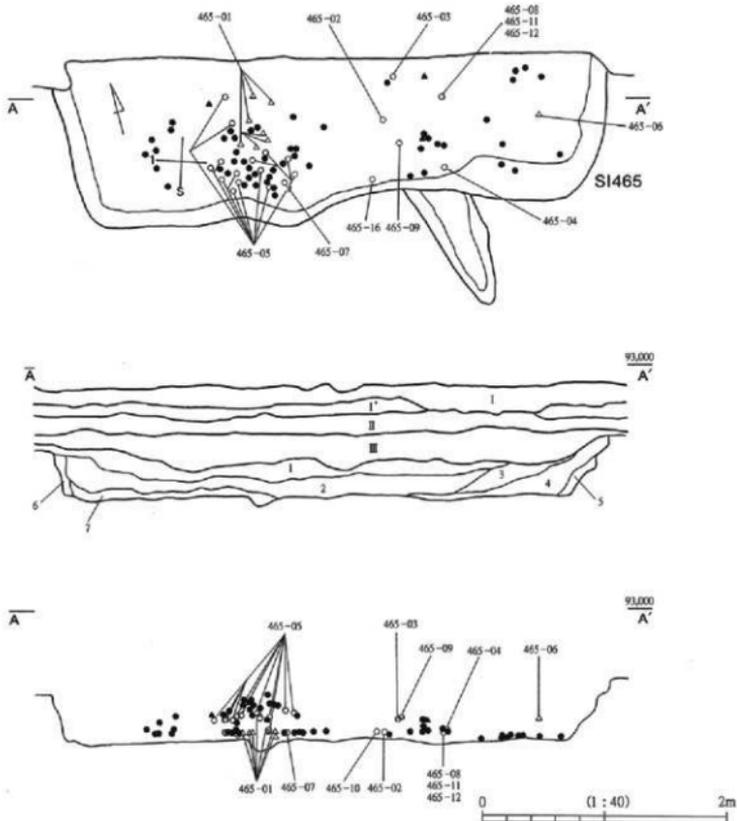
(周溝)無し。

(カマド)カマドは南壁中央部に位置し、煙道を持つ。詳細な構造は確認できなかった。

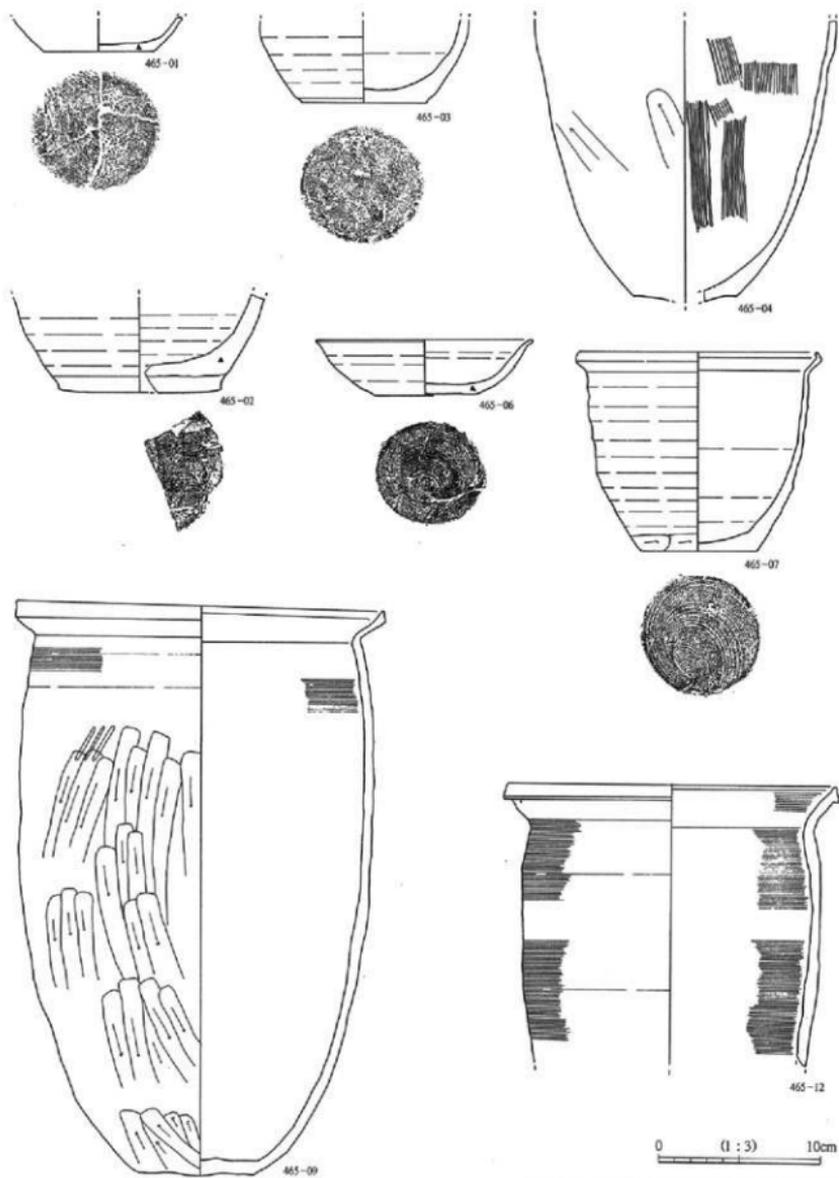
(出土遺物)カマド付近に個体としてまとまって出土している。正位で出土する個体が多い。西半では、小破片が密集しており、近接した遺物と接合し、出土レベルもほぼ水平である。また上下に密集域が区

分される。東半では、かなりの遺物が密集して出土しており、出土地点の記録が困難であったので、集中域毎に取り上げた。須恵器(坏・甕)、土師器(甕)が出土しており、土師器が出土遺物の大半を占める。特に長胴甕の出土が多い。図化した遺物は12点である。465-06の須恵器坏、465-07の土師器甕は、ほぼ完形の状態ですべて出土している。

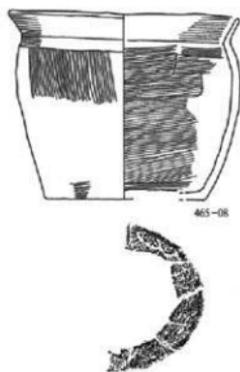
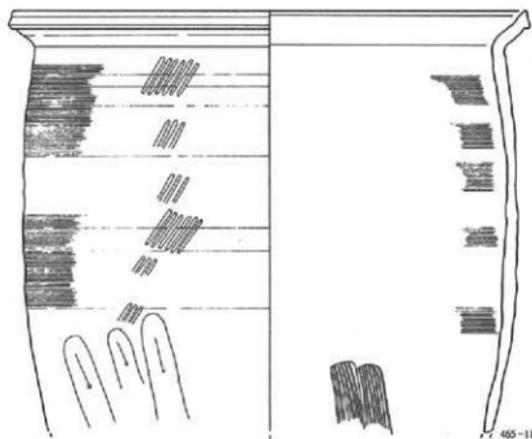
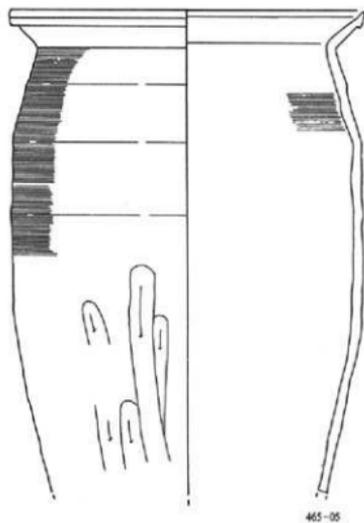
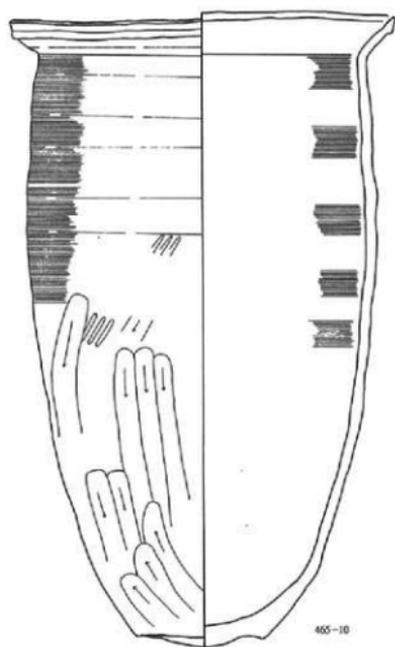
(年代)465-07~12はその分布状況や遺存状況から床面一括出土の遺物と判断できるがいずれも土師器の甕であり、詳細な時期を判断することができなかった。よって、覆土出土の遺物から9世紀中葉を下限とする。



第26図 中野目I遺跡SI465



第27圖 中野目Ⅰ遺跡S465出土遺物(1)



0 (1:3) 10cm

第28圖 中野目 I 遺跡S1465出土遺物(2)

SI465土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI465	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	上部に遺物含む。ほぼ均質。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ3mm)を含む。焼土粒微量を含む。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。
	5	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。
	6	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロック含む。
	7	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト含む。粘床。

表11 SI465遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	押図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
465-01	F2	須恵器	坏	I Ac		67		3.5	粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	摩滅。	27	14
465-02	F2	須恵器	甕	I E		(98)		9.3	粗砂	ロクロ	ロクロ	焼削り	内面自然輸。	27	14
465-03	F2	土師器	甕	II D7c		37		6	石英砂	ロクロナデ	ロクロナデ	ナデ	被熱。	27	14
465-04	F2	土師器	甕	II D8f		(60)		5.5	雲母砂	ケズリ	ハケメ	指頭痕	外面炭化物付着。	27	14
465-05	Y	土師器	甕	II D8	212			65	雲母砂	ロクロナデハケメケズリ	ハケメ			28	14
465-06	F3	須恵器	坏	I Ac	130	62	35	6	海綿骨針細砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	底部墨書?ほぼ完形で正位で出土。	27	14
465-07	Y	土師器	甕	II D7c	(248)	67	122	4	雲母海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	被熱。ほぼ完形で正位で出土。	27	14
465-08	Y	土師器	甕	II D2d	119	98	115	4.5	粗砂	ハケメ	ハケメ	薬痕	被熱。	28	15
465-09	Y	土師器	甕	II D8f	222	67	352	5.5	雲母砂	タタキロクロナデハケメケズリ	ロクロナデハケメ	指頭痕	内面炭化物付着。	27	15
465-10	Y	土師器	甕	II D8f	233	79	386	5.5	石英母骨針砂	タタキロクロナデハケメケズリ	ハケメ	指頭痕	被熱。	28	15
465-11	Y	土師器	甕	II D8	(310)			7	雲母砂	タタキロクロナデハケメケズリ	ハケメ		かなり大型。	28	14
465-12	Y	土師器	甕	II D8	(200)			7	雲母砂	ロクロナデハケメ	ハケメ		内外面炭化物付着。被熱。	27	14

SI490(第29~32区 図版5・15・16)

(位置・重複関係・遺存状態)O・P-1・2グリッドに位置する。III層下面からIV層上面で確認した。SD500に切られるが、良好に遺存していた。

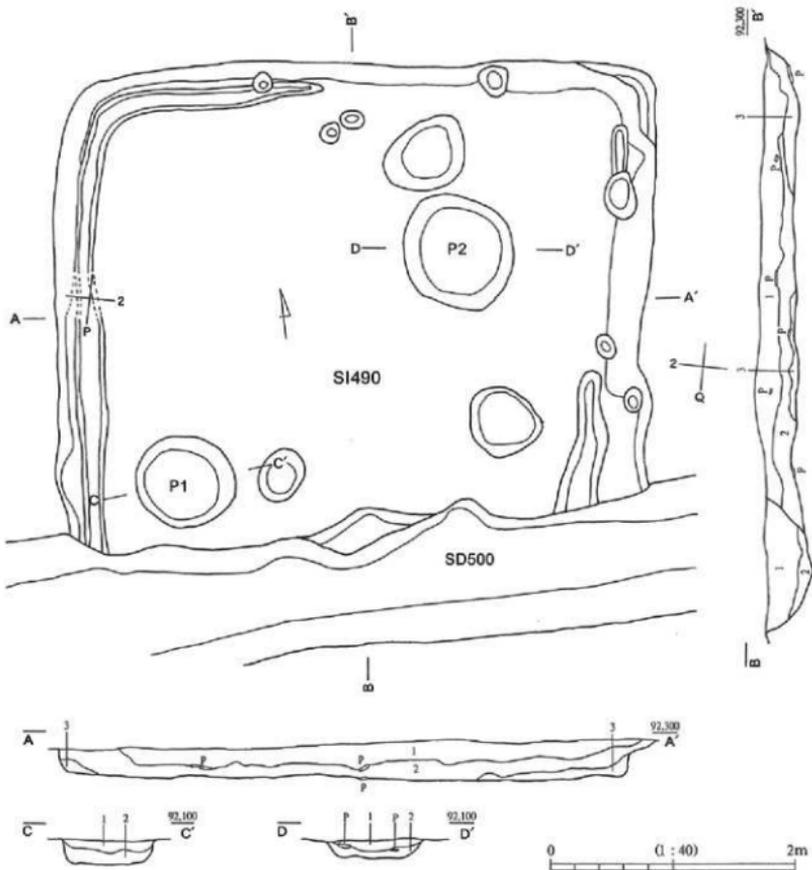
(規模・平面形・方向)一辺が約4.9mの方形のプランを持つと推定され、主軸方向はN-8°-Eと推定される。東壁南寄りやや張り出すが意図的なものかは確認できなかった。周溝を切るビットを壁柱穴と仮定すると、意図的なものである可能性もある。

(堆積土)定期的に堆積したレンズ状堆積を呈する。F1はIII層と近似した様相を呈する。III層起因の堆積土であると推定される。F2は、地山起因の褐色シルトと焼土粒をごく微量に包含するが、自然堆積と判断される。IV層起因の堆積土の可能性もある。

(壁の状況) 南壁は、SD500に切られ不明であるが、その他の部分は比較的明瞭に確認された。西側ではほぼ垂直に立ちあがるが、北壁及び東壁はやや緩やかに立ちあがっている。北壁付近では、貼床と同様の土が堆積しており、壁を構築している可能性がある。西壁付近でも同様の土が若干認められる。高さは最大で約34cmを測る。

(床) 壁周辺に貼床を構築している。中央付近は地山を床面にしてている。ほぼ平坦で北東隅に炭化物の広がりが認められた。また南側に焼土及び炭化物の広がりが確認された。

(柱穴) 数本のピットを確認しているが、支柱穴を構成すると判断されるのはP1・2である。また、北壁及び東壁に周溝を切るピットが検出されたが、壁柱穴となるかは不明である。

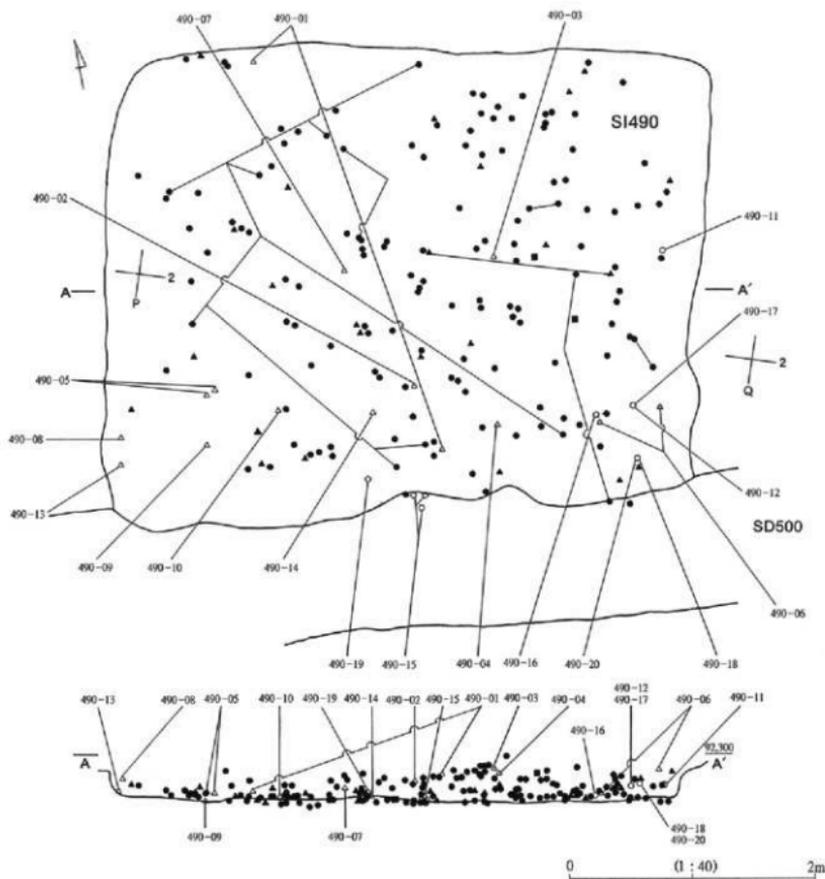


第29図 中野目 I 遺跡SI490(1)

(周溝)西壁と北壁の西半、北東隅及び東壁南半で検出された。幅約24cm、深さ約32cmを測る。東壁付近では、壁よりやや内側にある。

(カマド)南側に焼土及び炭化物の広がりが見られ、その付近にカマドがあったと推定されるがSD500により切られており詳細は不明である。

(出土遺物)全体に散布する。F1とF2の境界付近に多く包含されている。南側にややまとまった個体で出土している。出土レベルは東から西にかけて低くなる傾向が看取される。かなり離れた遺物の接合関係が認められ、ほとんど住居廃絶後に流れ込んだ遺物と判断される。須恵器(坏・台付坏・蓋・甕)、



第30図 中野目I遺跡SI490(2)

土師器(甕)、甕が出土している。他の住居に比して須恵器蓋の出土量が多い。図化した遺物は20点である。490-04の須恵器蓋のツマミ形状は、この住居跡でのみ確認される。490-05の須恵器甕は器高が低く、蓋の可能性もあるが、坏と分類した。

(年代)出土遺物は、その分布状況から、住居跡廃絶後の覆土に伴うと判断される。よって、8世紀末葉から9世紀初頭を下限とする。

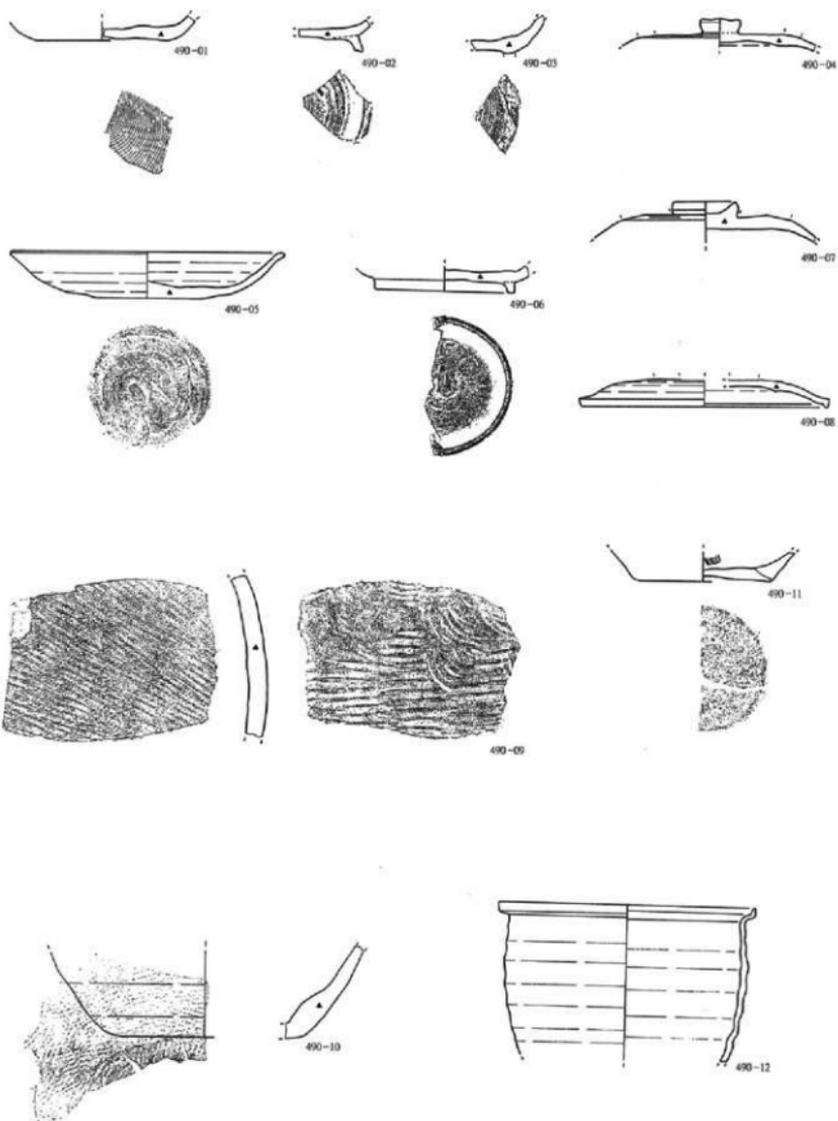
## SI490土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI490	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。しまり強い。
	2	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。焼土粒(φ1mm)含む。しまり強い。
	3	10 YR 4/1 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト斑を含む。10YR5/2灰黄褐色細砂質シルト含む。粘性強い。貼床。
	P1F1	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト混じる。10YR3/3黒褐色シルト混じる。焼土織状を含む。
	P1F2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/3黒褐色シルトブロック状(φ20mm)を含む。
	P2F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色細砂質シルト斑を含む。焼土粒(φ5mm)含む(1%)。
SD500	P2F2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。
	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量を含む。遺物含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色細砂質シルト斑を含む。

表12 SI490遺物観察表

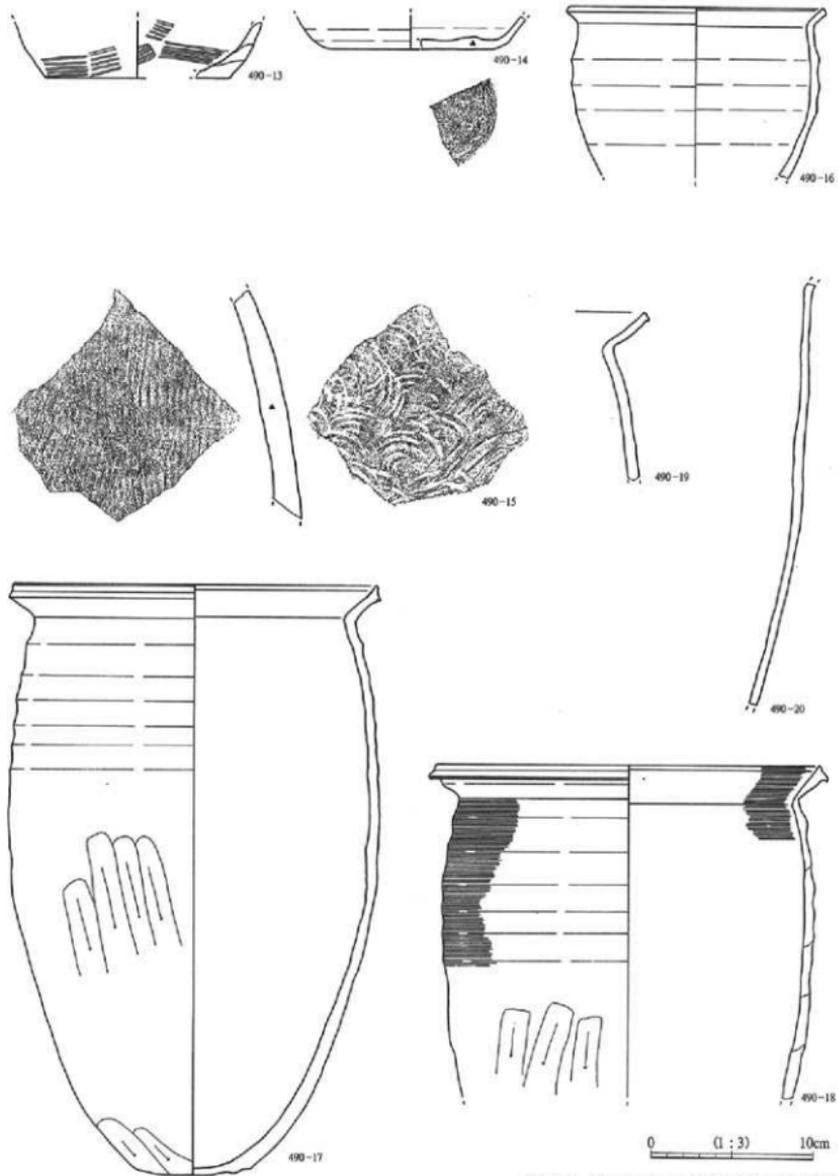
遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿回	図取
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
490-01	F1	須恵器	坏	I Ac			82	7	石英 灰岩質砂 海綿音	ロクロ	ロクロ	回転糸切	内面に火はね痕。被熱。	31	15
490-02	F1	須恵器	台杯	I Bc				5.5	砂	ロクロ	ロクロ	回転寛切		31	15
490-03	F1	須恵器	台杯	I Bc				6.5	砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		31	16
490-04	F1	須恵器	蓋	I C2				5.5	砂	ロクロ ケズリ	ロクロ			31	15
490-05	F2	須恵器	坏	I Aa	166	64	28	4	粗砂	ロクロ	ロクロ	回転寛切	器高非常に低い。	31	15
490-06	F2	須恵器	台杯	I Ba			(87)	7	砂	ロクロ	ロクロ	回転寛切		31	15
490-07	F2	須恵器	蓋	I C1				6.5	石英 海綿音 針砂	ロクロ ケズリ	ロクロ			31	15
490-08	F2	須恵器	蓋	I C	(170)			4	砂	ロクロ	ロクロ			31	15
490-09	F2	須恵器	甕	I D1				10	砂	タタキ	アテ		アテ痕2種類。	31	16
490-10	F2	須恵器	甕	I D			(100)	8.3	砂	タタキ		タタキ	内面火はね。被熱。	31	16
490-11	F2	土師器	甕	II D5			76	7	石英 雲母 粗砂		ハケメ ナデ	不明	被熱。	31	15
490-12	F2	土師器	甕	II D7c	154			4	雲母 砂	ロクロ	ロクロ		摩滅。	31	16
490-13	F2	土師器	甕	II D5		(112)		8	粗砂	ハケメ	ハケメ	不明	被熱。	32	15
490-14	F3	須恵器	坏	I Aa		100		3.5	砂	ロクロ	ロクロ	回転寛切		32	15
490-15	Y	須恵器	甕	I D1				14	細砂	タタキ	アテ			32	15
490-16	Y	土師器	甕	II D7①	(154)			5	雲母 粗砂	ロクロ	ロクロ		被熱。	32	16
490-17	Y	土師器	甕	II D8f	224	70	361	6	雲母 粗砂	ロクロ ナデ ケズリ タタキ	ハケメ ナデ	指頭痕		32	16
490-18	Y	土師器	甕	II D8	240			6	雲母 粗砂	ロクロ ナデ ハケメ ケズリ	ハケメ			32	16
490-19	Y	土師器	甕	II D8				7	雲母 粗砂	ハケメ	ハケメ			32	16
490-20	Y	土師器	甕	II D6				6	粗砂	ハケメ ミガキ	ハケメ		外面炭化物付着。被熱。	32	16

III 中野目I遺跡



0 (1:3) 10cm

第31圖 中野目I遺跡S490出土遺物(1)



第32図 中野目 I 遺跡S490出土遺物(2)

## SI520(第33図 図版5・16)

(位置・重複関係・遺存状態)N-2・3グリッドに位置する。W層上面で確認された。上面は耕作により削平をうけており、遺存状態はあまり良くない。

(規模・平面形・方向)2.7m×2.3mの南東隅がやや張り出す方形のプランを持ち、主軸方向はN-82°-Wを測る。

(堆積土)削平されてほとんどのこっていない。暗褐色シルトが水平に堆積している。

(壁の状況)削平によりほとんど不明。高さは最大で約9cmを測る。

(床)ほぼ平坦で、貼床と推定される明褐色シルトが散見されるも、詳細は不明。南東部分にカマド起因の焼土の広がりが見られる。

(柱穴)数本のピットを確認している。P1・3が支柱穴を構成すると判断される。P2はカマドの掘り込みと判断される。

(周溝)無し。

(カマド)東壁やや南よりに位置する。焼土の広がり及び掘りこみ(P2)が確認されたが、詳細は不明である。

(出土遺物)北側に数片が散布する。壁際からの出土が多い。須恵器(坏・甕)、土師器(甕)が出土している。図化した遺物は5点である。520-01は底部に墨書が認められる。

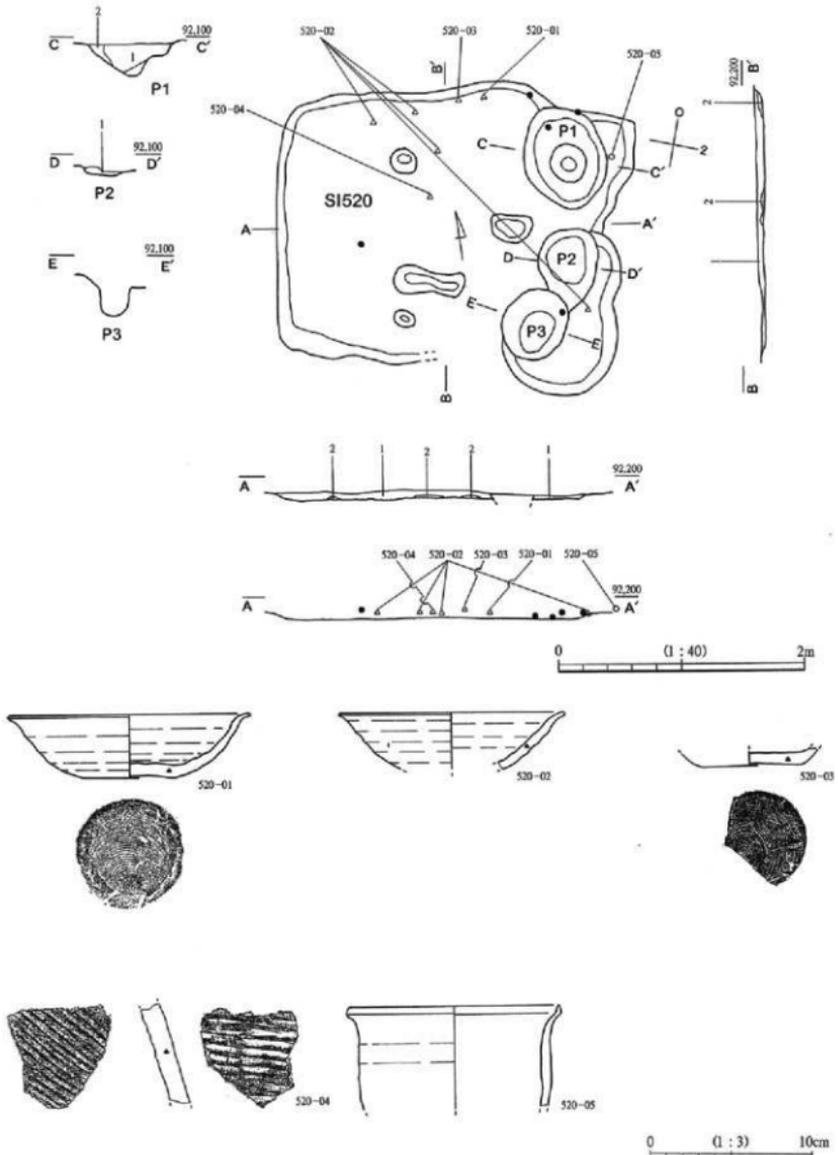
(年代)遺物の接合状況から遺構に伴う遺物は確認できなかった。よって覆土出土の遺物から9世紀中葉を下限とする。

## SI520土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI520	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ2~10mm)を含む(20%)。
	2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量を含む。貼床。
	P1F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑を含む(40%)。柱穴。
	P1F2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト斑を含む(20%)。掘り方。
	P2F1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土粒微量を含む。カマド掘り方。

表13 SI520遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	押図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
520-01	F1	須恵器	坏	I Ac	(146)	57	39	6	石英 霰 灰岩質砂 海綿骨 針	ロクロ	ロクロ	回転糸切		33	16
520-02	F1	須恵器	坏	I A	(136)			4.3	凝灰岩質 砂 海綿 骨針	ロクロ	ロクロ			33	16
520-03	F1	須恵器	坏	I Ac		60		6.5	海綿骨針 粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		33	16
520-04	F1	須恵器	甕	ID1				11	細砂	タタキ	アテ			33	16
520-05	Y	土師器	甕	IID7②	(127)			5	石英 海 綿骨針 粗砂	ロクロナ デ			外面炭化物 付着。	33	16



第33図 中野目 I 遺跡SI520・出土遺物

## SI640(第34図 図版5・16)

(位置・重複関係・遺存状態)H・I-1・2グリッドに位置する。Ⅶ層上面で確認した。SD550との切り合いは確認できなかつたが、恐らく切られると思われる。上面は削平されている。遺存状態はあまり良くない。床面付近が湧水帯にあたり、詳細な精査はできなかった。

(規模・平面形・方向)一辺約4.3mの方形のプランを持つ。主軸方向は不明である。

(堆積土)F1がほぼ全域に堆積している。F2は貼床である。F3は北壁付近にのみ確認される。

(壁の状況)南壁付近が不明瞭であったが、比較的明瞭に確認された。垂直に立ちあがるようである。西壁及び南壁付近に貼床と類似した土が堆積しており、壁を構築している可能性がある。高さは最大で約14cmを測る。

(床)ほぼ平坦である。断面観察では一部貼床が認められるも詳細は不明。南側に焼土及び炭化物の広がりが見られる。

(柱穴)数本のピットが検出された。覆土に焼土及び炭化物を多量に包含する。

(周溝)不明。

(カマド)南側に広範囲の焼土の広がり確認できたが詳細は不明。

(出土遺物)降雨により、住居が水没し、遺物が流れてしまったので、一括で取り上げている。出土量はあまり多くなく、出土遺物の大半は住居南半から出土しており、柱穴からの出土が比較的多い。また、640-01及び640-02はSD550のプランが伸びると推定される位置から出土しており、住居に伴わない可能性がある。須恵器(蓋・甕)、土師器(甕)が出土している。土師器は被熱しているものが多く認められるのが特徴である。遺物の遺存状況は良くない。図化したのは4点である。

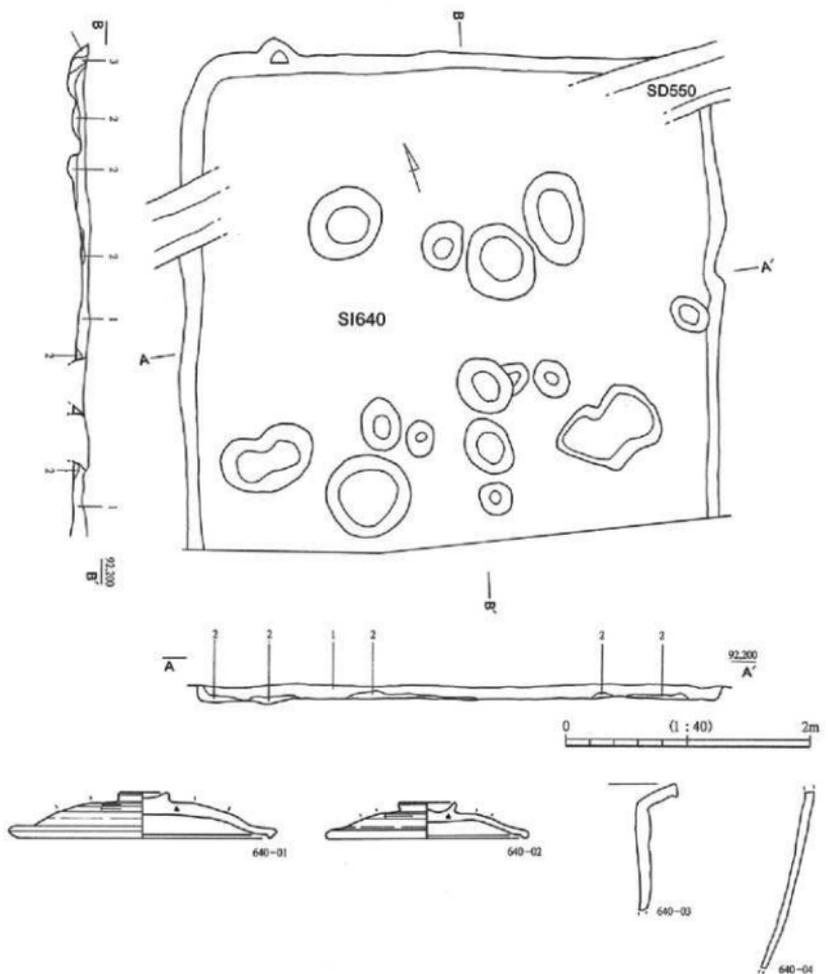
(年代)上記の理由により、住居跡に伴う遺物を確認できなかった。出土遺物から9世紀前葉～中葉を下限とする。

## SI640土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI640	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状(φ1mm)を含む(1%)。焼土粒(φ1mm)微量を含む。
	2	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト粒状(φ3mm)を含む(5%)。貼床。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状(φ2~5mm)を含む(20%)。焼土粒(φ2mm)含む(1%)。

表14 SI640遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	押図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
640-01	F	須恵器	蓋	I C1c	162		28	4	粗砂	ケズリ				34	16
640-02	F	須恵器	蓋	I C1	162		22	4	海綿骨針 粉	ケズリ			天井部回 転糸切	34	16
640-03	F	土師器	甕	II D8				7.3	雲母 砂				摩滅。	34	16
640-04	F	土師器	甕	II D8				4	雲母 粗砂	ケズリ	ハケメ			34	16



第34図 中野目 I 遺跡SI640・出土遺物

SI680(第35・36図 図版5・16・17)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防端部、O・P-8・9グリッドに位置する。V層下面からⅧ層上面で確認した。南側は調査区外である。表土除去の際、一部重機により掘削してしまったが、遺存状態は良好である。しかし、床面付近が湧水帯にあたり、詳細な精査はできなかった。

(規模・平面形・方向)一辺が約4.8mの方形のプランを持ち、主軸方向はN-28°-Wを測る。

(堆積土)定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。但しF2・4のみ西側付近にしか堆積していない。

(壁の状況)全周で比較的明瞭に確認された。断面観察から恐らく垂直に立ちあがっていたと推定される。高さは最大で約28cmを測る。

(床)貼床を構築しているようである。

(柱穴)不明。

(周溝)不明。

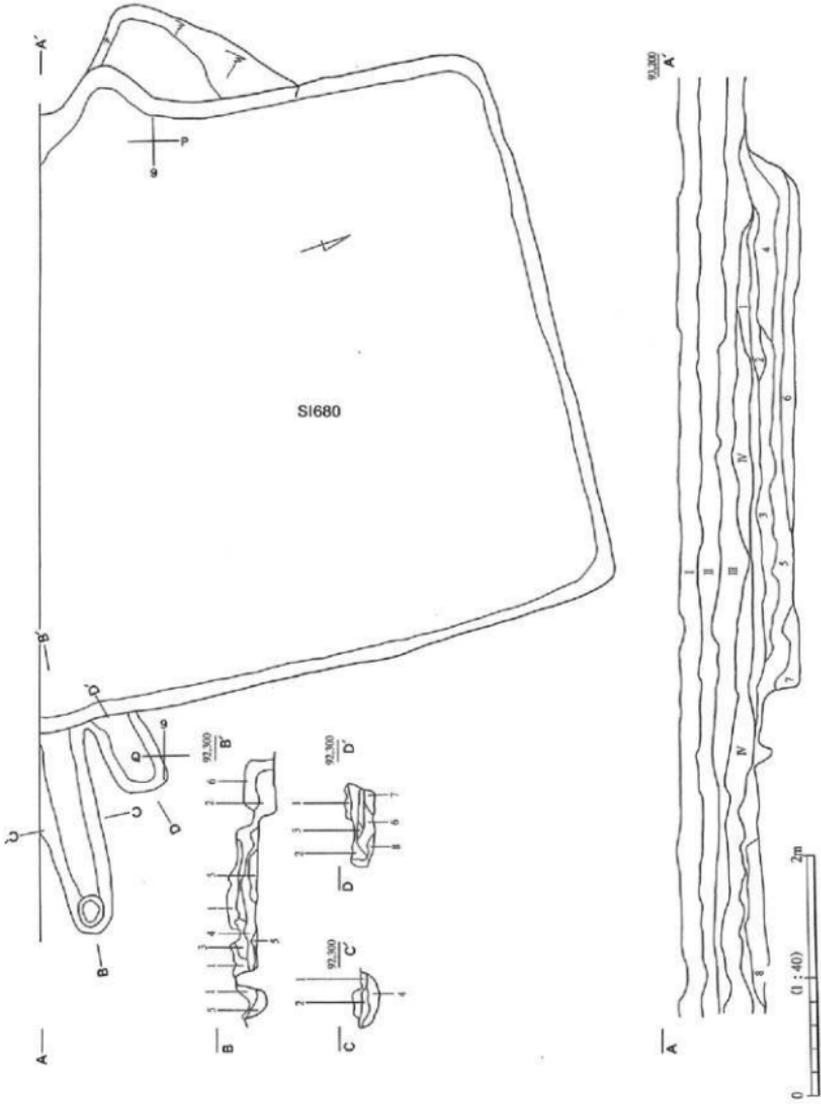
(カマド)南東隅にカマドが位置し、煙道が伸びる。煙道は2本確認されたが、切り合いは不明である。住居覆土F7はカマド袖と推定される。

(出土遺物)一括で取り上げているので、詳細は不明であるが、カマド付近に密集している。須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(甕)が出土している。土師器甕の出土が多く、須恵器はほとんど出土しない。須恵器の蓋は破片が1点出土したのみである。9点図化している。680-09の土師器甕は内外面がかなり摩擦しているが、体部末端が口縁部となるかもしれない。また底部中央は人為的な穿孔の可能性がある。

(年代)出土遺物から8世紀末葉～9世紀初頭を下限とする。

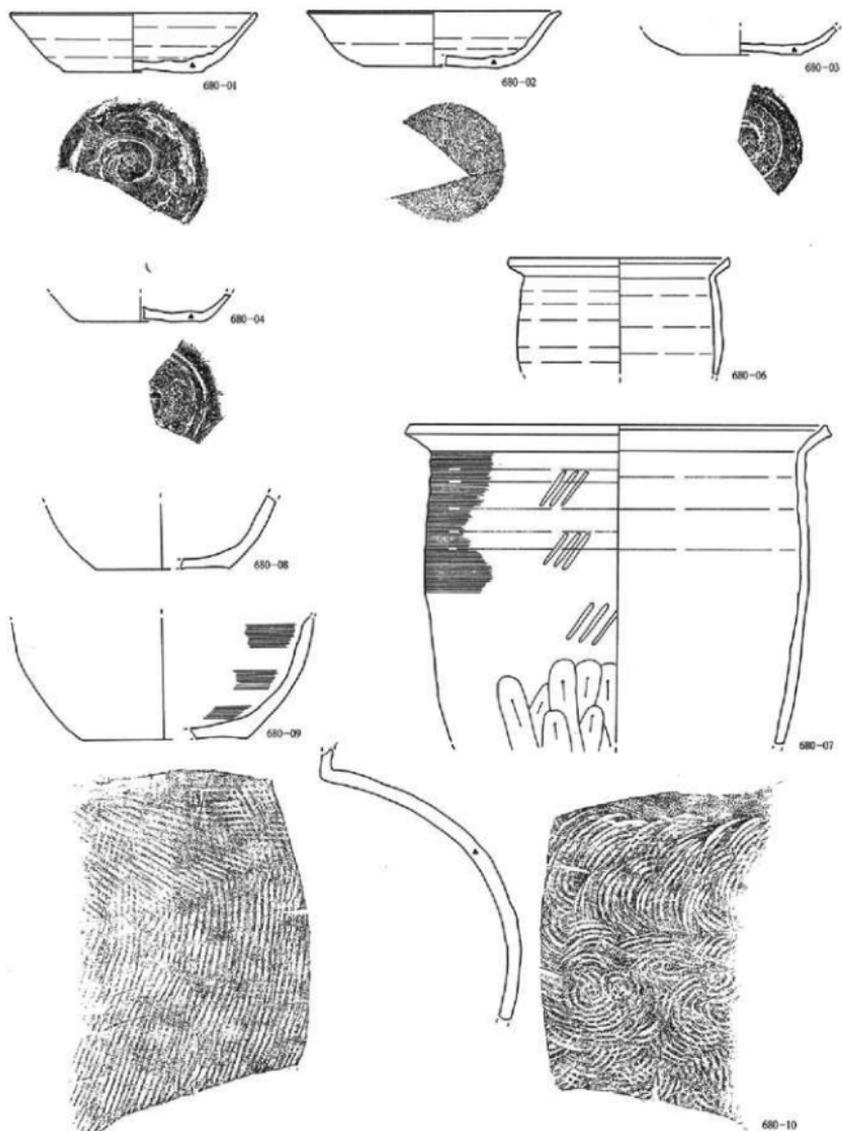
SI680土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI680	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状に含む。遺物含む。炭化物含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状に含む。
	3	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状に含む。遺物含む。焼土粒含む。
	4	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒に含む。炭化物含む。
	5	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒に含む。10YR2/2黒褐色シルト粒に含む。
	6	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒に含む。貼床。
	7	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト粒に含む。カマド崩落土。南カマドF6と同じ。
	8	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状に含む。焼土微量に含む。カマド崩落土?
	南カマドF1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック多量に含む。
	南カマドF2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土ブロック微量に含む。
	南カマドF3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。焼土ブロック微量に含む。
	南カマドF4	2.5 YR 4/6 赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルト微量に含む。10YR4/4褐色シルトブロック含む。
	南カマドF5	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	焼土ブロック含む。
	南カマドF6	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルトブロック含む。
	北カマドF1	2.5 YR 4/6 赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルト粒に含む。
	北カマドF2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	焼土粒状に含む。
	北カマドF3	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量に含む。焼土粒微量に含む。
	北カマドF4	2.5 YR 4/6 赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルト塊状に含む。
	北カマドF5	10 YR 4/4 褐色	シルト	焼土微量に含む。
	北カマドF6	10 YR 4/3 にぶい黄褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。
北カマドF7	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。	
北カマドF8	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。焼土微量に含む。	



第35図 中野目 I 遺跡SI680

III 中野目 I 遺跡



第36圖 中野目 I 遺跡SI680出土遺物

表15 SI680遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	押図	図版	
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面
680-01	F	須恵器	坏	I Aa	(148)	(84)	36.5	4.6	石英砂	ロクロ	ロクロ	回転挽切		36	16
680-02	F	須恵器	坏	I Aa	(152)	(83)	35	6	粗砂	ロクロ	ロクロ	回転挽切	外面炭化物付着。	36	16
680-03	F	須恵器	坏	I Aa		73		5	粗砂	ロクロ	ロクロ	回転挽切		36	17
680-04	F	須恵器	坏	I Aa		(74)		5	石英砂	ロクロ	ロクロ	回転挽切		36	17
680-05	F	須恵器	甕	I D 1				7.8	海綿骨針 粗砂	タタキ	アテ			36	17
680-06	F	土師器	甕	II D7①	(132)			3.3	砂	ロクロ	ロクロ			36	17
680-07	F	土師器	甕	II D 8	(256)			5	雲母砂	タタキ ロクロ ロクロ ナハケズ メリ	ロクロナ デ		外面炭化物付着。	36	17
680-08	F	土師器	甕	II D8f		(80)		7	雲母砂				摩滅。被熱。	36	17
680-09	F	土師器	甕	II Df	(182)	100	75	7	雲母海綿骨針 粗砂		ハケメ		摩滅。	36	16

## SI446(第37図 図版6)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、T・U-2・3グリッドに位置する。VI層下面からVII層上面で確認した。南半が調査区外となる。遺存状態は良好である。またEP750はSB749を構成する柱穴である。切り合いは確認できなかった。

(規模・平面形・方向)一辺約4.9mの方形のプランを持つと推定され、主軸方向は不明である。

(堆積土)一部擾乱をうけるものの、凡そ定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。F1は地山起因のブロック状の褐色シルトが混在し、遺物を包含する。人為的堆積の可能性もあるが確証はない。F2は東壁付近、F3は西壁及び北壁付近でのみ確認される。両者とも地山起因の褐色シルトが混在するが、明確な粒状構造を為さず、自然堆積であると推定される。東西壁付近に地山粒混じりの土(F4・5)が堆積しており、壁が崩落した可能性がある。

(壁の状況)全周で明瞭に確認された。東壁及び北壁はほぼ垂直に立ちあがるが、西壁のみ緩やかに立ちあがる。特に硬化部分等は確認されなかった。高さは最大で約33cmを測る。

(床)地山を床面としている。ほぼ平坦で、焼土及び炭化物等は認められない。

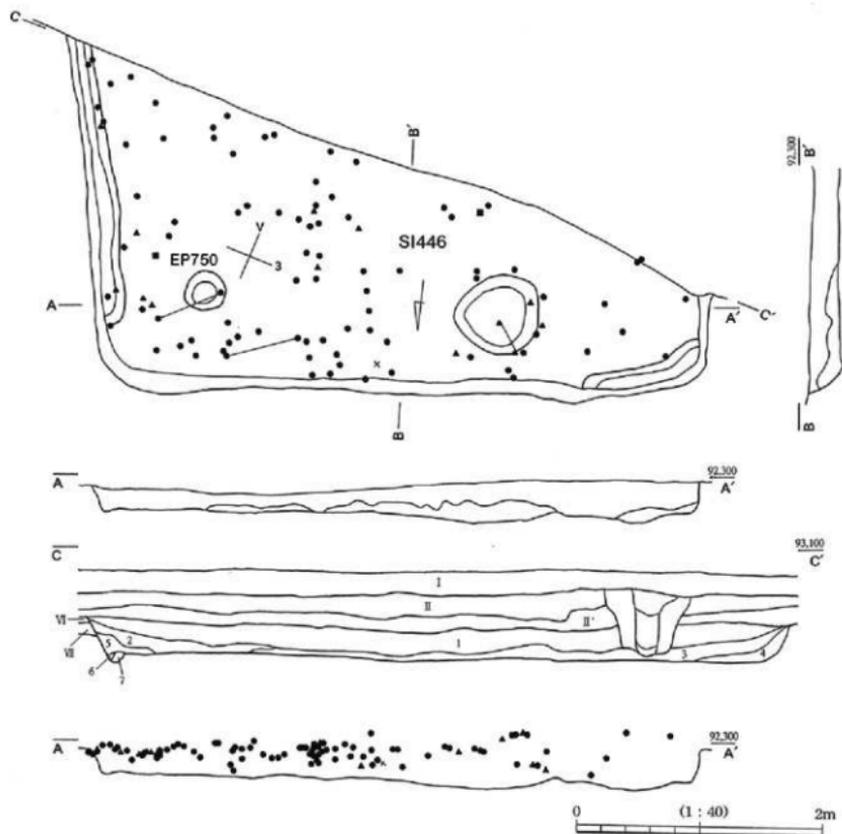
(柱穴)P1が確認された。

(周溝)東側に確認された。幅約24cm、深さ約6cmを測る。

(カマド)不明。

(出土遺物)全域にまばらに散布する。全てが小破片でほとんど接合しない。F1出土の遺物がほとんどで遺構に伴わないと判断される。須恵器(坏・甕)、土師器(内黒坏・甕)が出土している。SB749が新しいと仮定すれば、その構築の際に整地したのかもしれない。

(年代)凡そ9世紀代と推定される。



第37図 中野目I遺跡SI446

SI446土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI446	1	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック僅かに含む。炭化物含む。遺物含む。
	2	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルトブロック少量含む。遺物含む。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック少量含む。
	5	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ 5mm)に含む。
	6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト全体に含む。腐食覆土。
	7	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量に含む。腐食覆土。

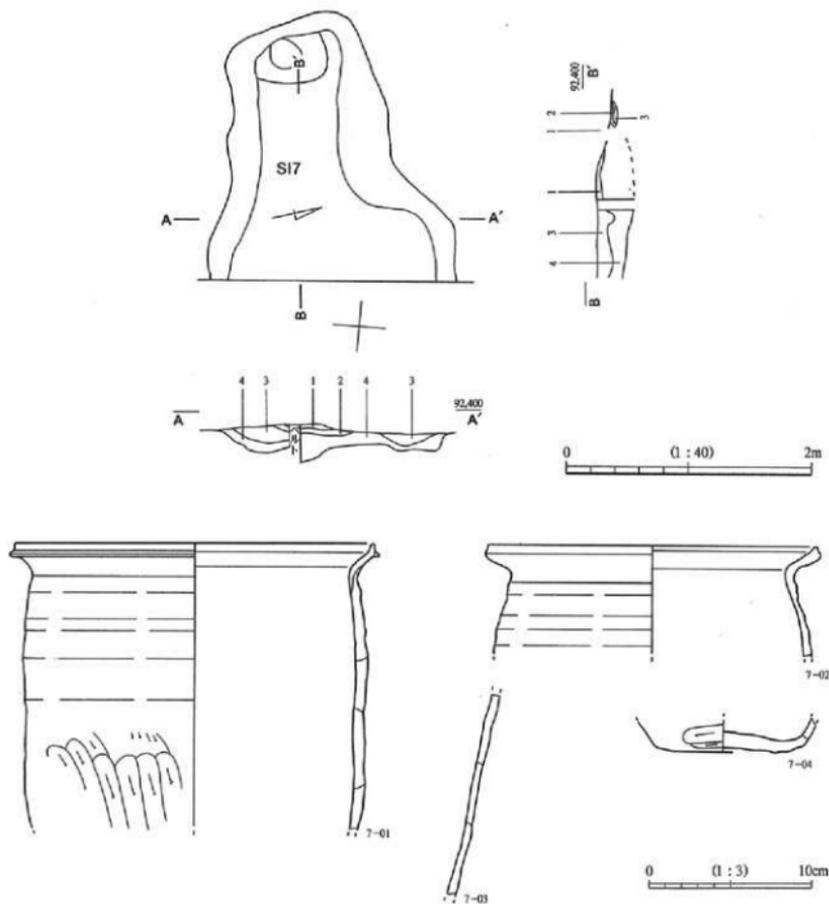
SI7 (第38図 図版6・17・18)

(位置・重複関係・遺存状態)自然堤防上、Y-9グリッドに位置する。Ⅶ層上面で確認した。耕作により削平をうけており、ほとんど遺存しておらず、カマドの一部が検出されたに過ぎない。

(カマド)住居内のどの場所に位置するかは不明。

(出土遺物)土師器甕が出土している。いずれも被熱しており、遺存状態は良くない。

(年代)遺物が僅少であり、住居跡のプランが不明であるが、恐らく8世紀末葉から9世紀中葉の範囲におさまるものと推定される。



第38図 中野目I遺跡SI7・出土遺物

SI7 土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SI7	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。ほぼ均質。しまる。
	2	5 YR 5/8 明赤褐色	焼土	10YR3/2黒褐色シルト粒状(φ5mm)を含む。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む(末端に偏る)。
	4	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト混じる。滑る。

表16 SI7 遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
7-01	F	土師器	甕	ⅡD 8	(222)			7	石英 雲母 炭灰 岩質砂 海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ			38	18
7-02	F	土師器	甕	ⅡD 8				5	石英 雲母 炭灰 岩質砂 海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ			38	17
7-03	F	土師器	甕	ⅡD		82		4.5	石英 雲母 炭灰 岩質砂 海綿骨針 磁砂	ケズリ		指頭痕	内外面摩滅。被熱。	38	18
7-04	F	土師器	甕	ⅡDf	(220)			5	石英 雲母 炭灰 岩質砂 海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ		外面炭化物付着。	38	18

(2) 掘立柱建物跡(第39~43図 図版6・18)

5棟確認された。現地調査段階で確認し得たのは、SB745、746、748の3棟で、その他の2棟は整理作業中に図上で確認している。長軸方向はほぼ北を指している。遺物の出土は僅少で、時期を特定することはできなかった。

SB745(第39図 図版6・17)

(位置)自然堤防末端、R・S-2・3グリッドに位置する。V層上面乃至Ⅷ層上面で確認した。

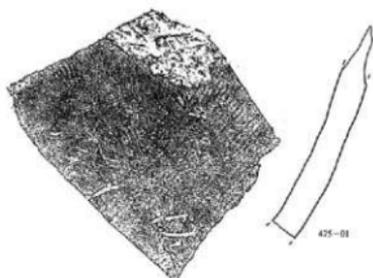
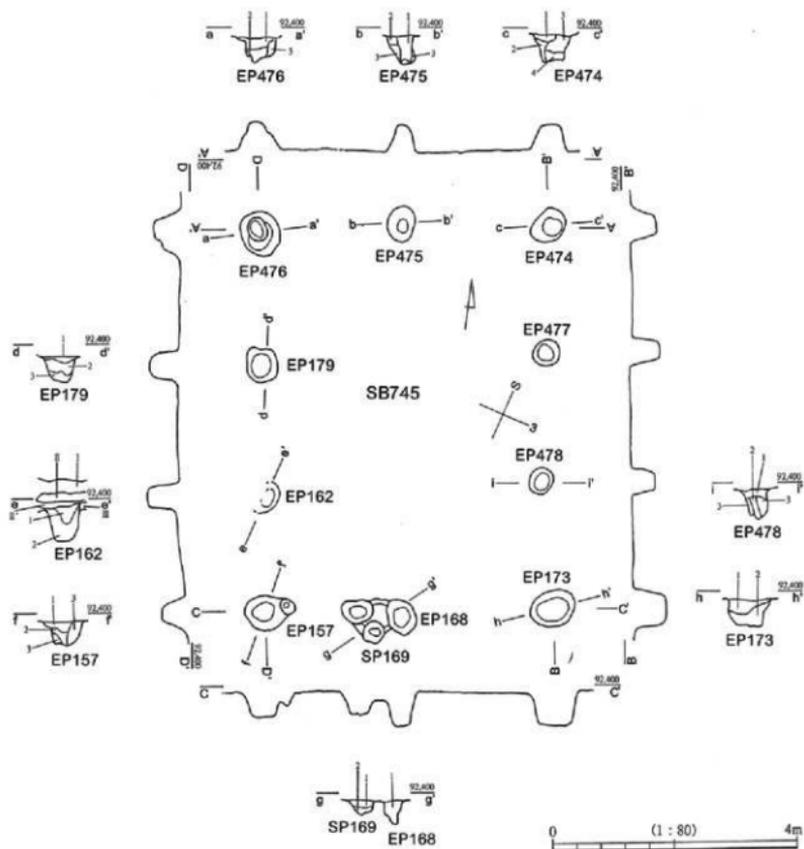
(規模)桁行2間、梁行3間で、桁行5.3m、梁行6.9mを測る。桁行の柱間は1.6m、梁行の柱間は1.7~1.8mである。

(主軸方向)N-7°-Wを測る。

(柱穴)平面形は不整な円形を呈し、直径60~70cm、深さ40~50cmを測る。

(出土遺物)EP475の床面から1点出土したのみである。酸化焙焼成の須恵器甕体部である。

(年代)恐らく奈良~平安時代と推定される。



0 (1:3) 10cm

第39圖 中野目Ⅰ遺跡SB745・出土遺物

SB745土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
EP157	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト微量に含む。柱抜き取り後の覆土。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	均質。柱穴。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト層に含む。掘り方。
EP162	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ 3mm)に含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ 5~10mm)に含む。
EP168	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト少量含む。掘り方。
	2	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト少量含む。ボソボソする。
EP173	1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10Y4/3にぶい黄褐色シルト微量に含む。しまる。柱穴。
	2	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10Y4/4褐色シルト多量に含む。柱抜き取り後の覆土。
EP179	1	10 YR 2/1 黒色	シルト	ほぼ均質。柱抜き取り後の覆土。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトやや多量に含む。掘り方。
	3	10 YR 2/1 黒色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト微量に含む。掘り方。
EP474	1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。柱抜き取り後の覆土。
	2	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト少量含む。柱穴。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトやや多量に含む。掘り方。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	粘質シルト	10YR4/4褐色シルト少量含む。掘り方。
EP475	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	均質。柱穴。
	2	10 YR 3/4 暗褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト多量に含む。掘り方。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	粘質シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト少量含む。掘り方。
EP476	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト層に含む。柱抜き取り後の覆土。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	均質。柱穴。
EP478	3	10 YR 4/4 褐色	シルト	ほぼ均質。掘り方。
	1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10Y4/3にぶい黄褐色シルト微量に含む。掘り方。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	均質。柱穴。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色シルト少量含む。掘り方。

表17 SB745遺物観察表

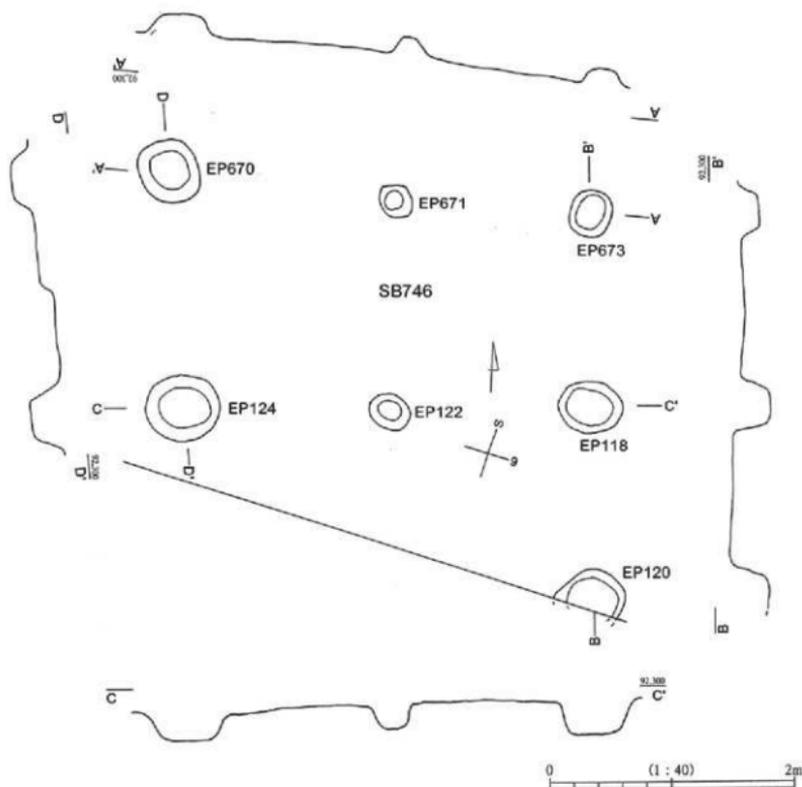
遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	挿固	図版	
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面
475-01	F	須臾器	甕	ID1				17	粗砂	タタキ	アテ	ナデ	酸化焙焼成。	39	17

SB746(第40図 図版6)

(位置)自然堤防末端、R・S-8・9グリッドに位置する。V層中乃至VI層上面で確認した。  
 (規模)南半が調査区外となるため全体の構造は不明である。桁行2間、梁行3間以上でやや北西方向に張り出す。桁行3.8m、梁行3.6m以上、桁行の柱間は1.2m、梁行の柱間は1.1~1.2mである。  
 (主軸方向)N-3°-Wを測る。  
 (柱穴)平面形は円形を呈し、直径40~60cm、深さ15~25cmを測る。  
 (出土遺物)無し。  
 (年代)恐らく奈良~平安時代と推定される。

SB747(第41図)

(位置)自然堤防末端、R・S-8・9グリッドに位置する。検出面はV層中乃至VI層上面である。  
 (規模)南半が調査区外となるため全体の構造は不明である。桁行2間、梁行2間以上で梁行の柱間がやや長い。桁行2.8m、梁行2.7m以上、桁行の柱間は0.8~0.84m、梁行の柱間は2mである。  
 (主軸方向)N-17°-Wを測る。  
 (柱穴)平面形は円形を呈し、直径30~40cm、深さ25~30cmを測る。  
 (出土遺物)無し。  
 (年代)恐らく奈良~平安時代と推定される。



第40図 中野目 I 遺跡SB746

SB748(第42図 図版 6)

(位置) A-2 グリッドに位置する。Ⅶ層上面で確認した。

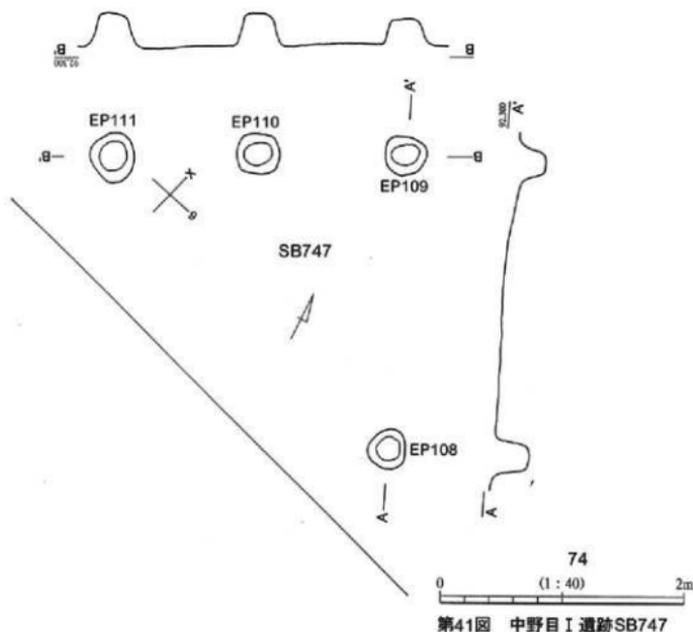
(規模) 桁行 2 間、梁行は中央部を SD400 に切られるため確認できない。南側中央がやや張り出す。桁行 2.6m、梁行 3.6m を測る。桁行の柱間は、0.72~0.84m、梁行の柱間は、1 間と仮定すると 2.7m である。

(主軸方向) N-20°-W を測る。

(柱穴) 平面形は不整な円形を呈し、直径 30~45cm、深さ 25~30cm を測る。

(出土遺物) 無し。

(年代) 恐らく奈良~平安時代と推定される。



第41図 中野目I遺跡SB747

**SB749(第43図)**

(位置)自然堤防上、T・U-2・3グリッドに位置する。検出面はⅥ層上面である。SI446との切り合いは不明である。

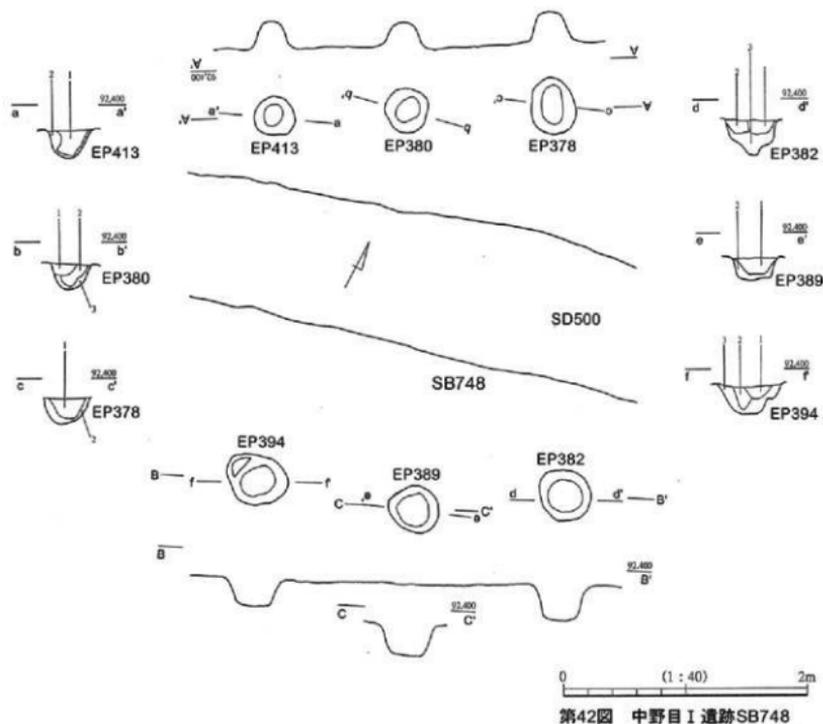
(規模)南半が調査区外となるため全体の構造は不明である。桁行2間、梁行2間以上で、桁行4.6m、梁行2.7m以上、桁行の柱間は1.7~1.8m、梁行の柱間は2.1mである。

(主軸方向)N-10°-Wを測る。

(柱穴)平面形はを呈し、直径30~40cm、深さ30~45cmを測る。EP450がやや内側に入りこんでいる。

(出土遺物)無し。

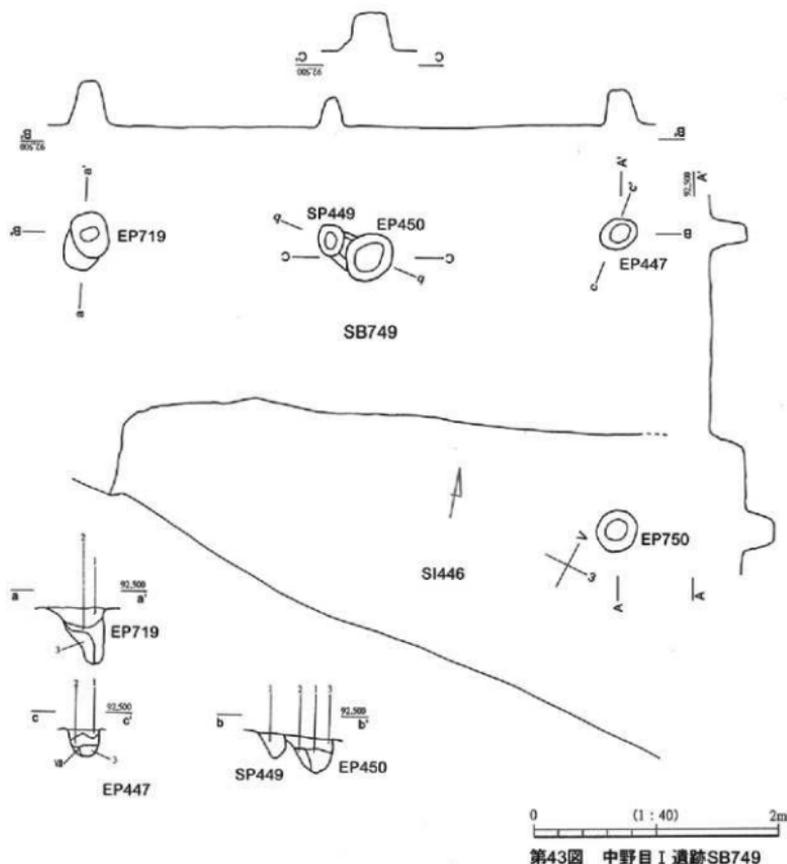
(年代)恐らく奈良~平安時代と推定される。



第42図 中野目 I 遺跡SB748

SB748土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
EP378	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト微量に含む。ポソポソする。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑に含む。掘り方。
EP380	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。ポソポソする。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。10YR5/2灰黄褐色シルト微量に含む。
	3	10 YR 5/2 灰黄褐色	シルト	10YR3/2黒褐色シルト微量に含む。炭化物微量に含む。
EP382	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト粒状(φ2~5mm)に含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑に含む。
	3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト微量に含む。
EP389	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。ポソポソする。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑に含む。掘り方。
EP394	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。ポソポソする。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	均質。柱穴。
	3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑に含む。掘り方。
EP413	1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR5/2灰黄褐色シルト斑に含む。



第43図 中野目I遺跡SB749

SB749土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
EP447	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	2	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10YR3/4暗褐色シルト(地山)を少量含む。
	3	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10YR3/4暗褐色シルト(地山)を多量に含む。柱抜き取り後の埋土。
EP719	1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト微量を含む。柱抜き取り後の埋土。
	2	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	ほぼ均質。ボソボソする。柱穴。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト少量含む。掘り方。
EP450	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト少量含む。
	1	10 YR 2/3 黒褐色	シルト	10YR4/3にぶい黄褐色シルト微量を含む。炭化物微量を含む。柱抜き取り後の埋土。
EP449	2	10 YR 3/3 暗褐色	シルト	10YR4/2灰黄褐色シルト微量を含む。掘り方。
	3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。掘り方。

(3) 土坑(第44図 図版)

今回の調査で検出された土坑は、登録数にして17を数えるが、ほとんどが非常に浅い。出土遺物は僅少で、年代を特定できるものは少ない。

SK155(第44図 図版17)

(位置・重複関係・遺存状態)R-4グリッドに位置する。V層中乃至Ⅷ層上面で確認した。南側にやや張り出すことや覆土の堆積状況から切り合っている可能性もあるが、確認はできなかった。

(規模・平面形・方向)西半が調査区外となるため、全体の規模は不明であるが、長軸約2.2m、短軸約1.4mの南北に長い隅丸方形と推定される。長軸方向は、凡そN-11°-Wを測る。

(堆積土)定期的に堆積したレンズ状堆積を呈すが、焼土及び炭化物を多く含む。F2には焼土の混入が顕著である。

(壁の状況)Ⅷ層を掘りこんで構築している。特に硬化部分は認められなかった。

(床面)湧水帯にあたり、詳細な調査ができなかったが、南側が一段低くなる。

(出土遺物)須恵器(坏・甕・長頸瓶)、土師器(甕)、砥石が出土している。155-01は須恵器坏で、床面から出土している。被熱しており、非常に脆い。底部切り離しは非常に不明瞭であるが、回転筒切りと判断される。155-02は砥石で覆土より出土している。4面使用しており、穿孔がある。

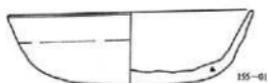
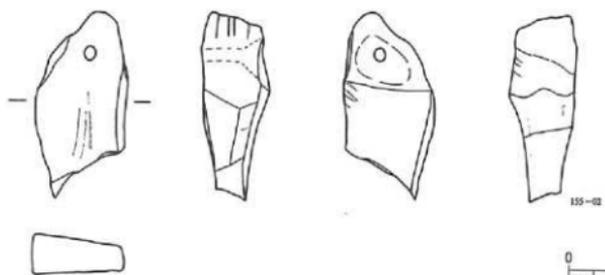
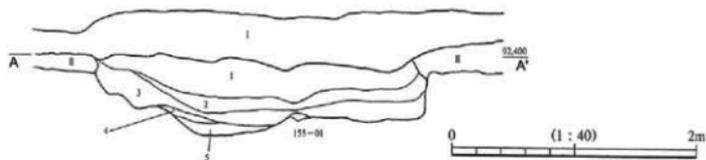
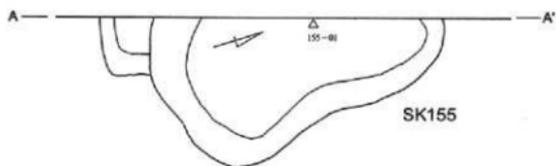
(年代)155-01の出土状況から、8世紀中葉の所産と判断される。

SK155土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	備考
SK155	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状(φ5mm)を含む(2%)。焼土含む。炭化物含む。遺物含む。
	2	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルト粒状を含む。焼土含む。炭化物含む。
	3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	ほぼ均質。
	4	10 YR 4/4 褐色	シルト	10YR2/2黒褐色シルトブロック(φ20mm)含む。
	5	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	10YR4/4褐色シルトブロック(φ5~40mm)含む。

表18 SK155遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)			胎土	調整・成形			備考	持回	図版	
					口径	底径	器高		器厚	外面	内面				底面
155-01	F3	須恵器	坏	I Aa	(146)	100	48	6.5	海綿骨針砂	口ク口	口ク口	回転筒切	被熱。	44	17
155-02	F	石製品	砥石		最大長75	最大幅33	最大厚27						穿孔4面使用。材質凝灰岩。	44	17



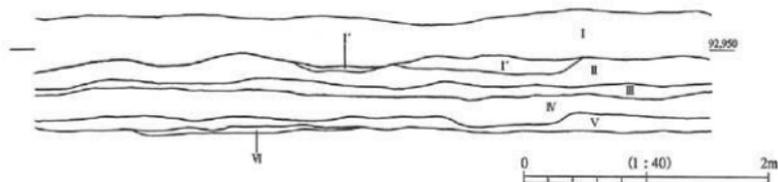
## IV 中野目Ⅱ遺跡

## 1 遺跡の概観

中野目Ⅱ遺跡は、山形市西部を北流する須川の左岸に位置する。遺跡の南方には、奥羽山脈が流下する立谷川、白川の合流地点があり、遺跡は3つの河川の合流地点に位置する。調査時の地目はリング畑で、現中野目集落の南側にあり、中野目Ⅰ遺跡の東方約120mに位置する。標高は約93mを測る。

## (1) 遺跡の層序(第45図 図版7)

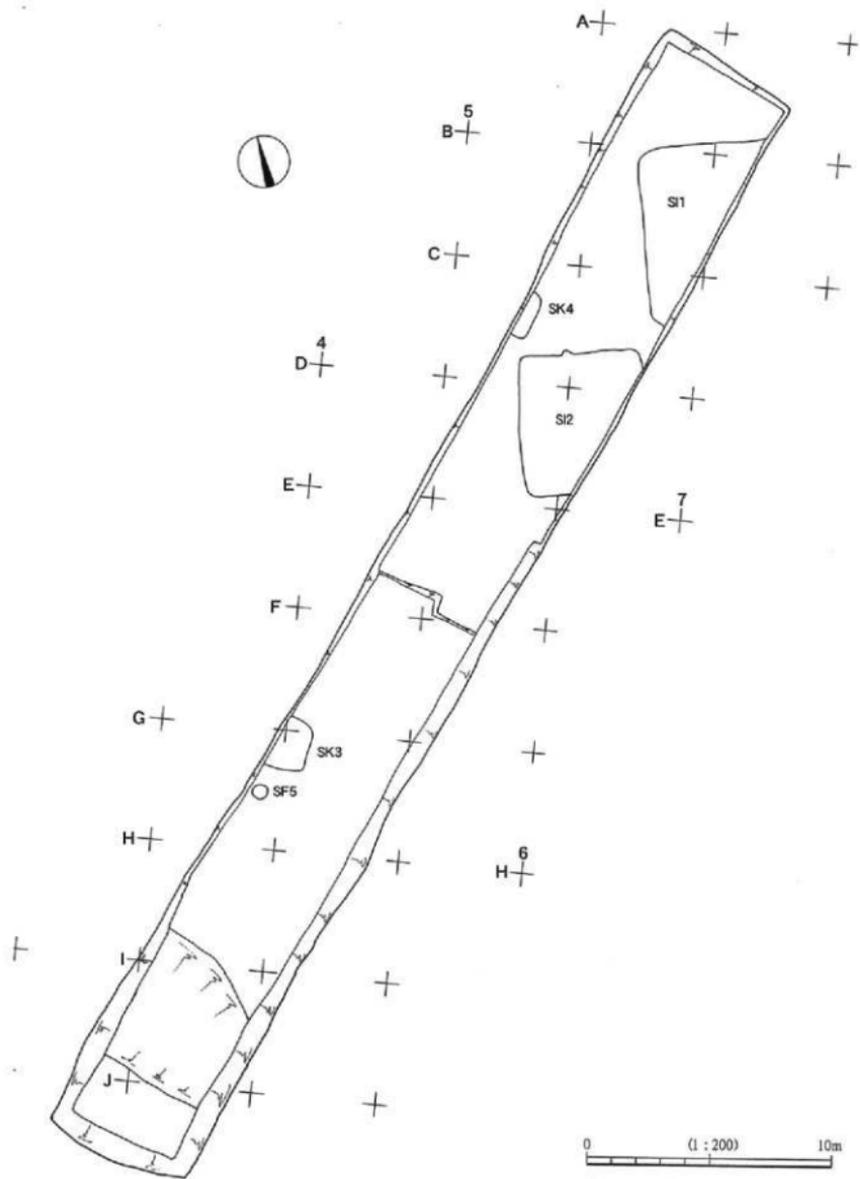
遺跡の層序は凡そ6層に区分し得る。遺跡は須川左岸の旧自然堤防にあたる。Ⅰ層は耕作土で調査区全域において認められるものである。平安時代の遺物の他、近世の陶磁器を少量混入する。客土の可能性もある。Ⅱ層は自然堆積土で、黒色を基調とするが、黒褐色～暗褐色土が混在する。層厚に変化がみられる。Ⅲ層は自然堆積土で、暗褐色を基調とするも、上下の層との区別はあまり判然としない。層厚は比較的安定しており、約20～30cmである。Ⅳ層は黒色を基調とするが、黒褐色～暗褐色土が混在する。堅穴住居跡内覆土あるいは遺物包含層に相当する。Ⅴ層は自然堆積土で、地山(Ⅵ層)とⅢ層の漸移層に相当する。層厚は変化に富み、約20～40cmである。部分的に上下2層に区分し得る。Ⅵ層は地山面で堅穴住居の床面を構築する層で、火山灰質土で緻密である。



第45図 中野目Ⅱ遺跡基本層序

## 基本層序土層注記

層位	土色	土質	粘性	しまり	備考
I	10 YR 3/3 褐色	シルト	あり	あり	平安期の遺物を少量含むほか、近代?の陶磁器片も少量混入。表土(耕作土)。耕作時の攪乱を受ける。客土している可能性あり。
I'	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	あり	表土層のグライ化?
II	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	あり	あり	黒色を基質とするが、黒褐色から暗褐色にかけての土を混在する。部分的に層厚に変化が見られる。表土層下の旧耕作土層に相当する可能性あり。(遺跡形成時とは関係なし。)
III	10 YR 3/2 黒褐色	砂質シルト	あり	あり	暗褐色を基質とするが、上下の層位はあまり判然と分離しない。層厚は20～30cmで比較的安定している。又、堅穴住居跡覆土として堆積しているため、旧表土層に相当するか?(SI 1 F 1に相当する?)
IV	10 YR 2/1 黒色	砂質シルト	あり	あり	黒色を基質とするが、黒褐色から暗褐色にかけての土を混在する。層厚に変化が見られる。堅穴内に堆積する覆土あるいは、遺物包含層に相当する。
V	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	あり	地山とⅣ層の漸移層に相当する。層厚は変化に富み、20～40cmとなる。部分的に地山をブロック状に混入していると思われる部分もあり、色調により上下2層に分層可能な箇所がある。ただし、部分的に明瞭に区分し得る部位もあるため、グライ化等の作用による可能性もある。
VI	10 YR 5/6 黄褐色	シルト	あり	あり	黄褐色粘土質土層の地山、堅穴住居跡の床面を構築している層で、火山灰質土で緻密。所々堅くしまっており、安定していると思われる。



第46図 中野目Ⅱ遺跡遺構配置図

## 2 検出された遺構と遺物

今回の調査で検出された遺構は竪穴住居跡2棟、土坑2基、マウンド1基のみである。遺物は大半が住居内からの出土である。

### (1) 竪穴住居跡(第47～52図 図版8・17～20)

#### SI1(第47～49図 図版8・17～19)

(位置・重複関係・遺存状態)A～C・6・7グリッドに位置する。東半は調査区外である。V層下面からVI層上面で確認した。IV層面上あるいはIII層中より掘りこみ、VI層中に床面を構築している。ほとんど攪乱をうけておらず、良好に依存していた。

(規模・平面形・方向)一辺約6.6mの隅丸方形のプランを持つと推定される。主軸方向は不明。

(堆積土)部分的にブロック状の混入を示すものの、定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。F3以下の堆積土は竪穴住居が廃棄された後ほどなく堆積していたと考えられる。また、F2では地山由来と考えられる黄褐色粘土質土がブロック状、層状に堆積した状況を示す。付近の地山を掘り返した際の掘り上げ土の可能性が高く、住居構築際の土が再堆積したか、あるいは他の住居跡の掘り上げの際の土を廃棄した可能性もある。

(壁の状況)全周において比較的明瞭に確認され、床面から緩やかに立ちあがる。比較的軟弱で、硬化部分等はみられなかった。高さは最大で約26cmとなる。

(床面)地山を床面にしている。部分的に硬く締まる部分があり、床面上で火を使った焼土痕跡もあるが、全体的にやや軟弱である。また、凹凸があり、特に南寄りの一帯に焼土混じりの黒褐色土が広がる範囲もあり、その部分の下には土坑が集中してみられる。

(柱穴)5箇所落ち込みが認められたが、主柱穴とならないと判断される。

(周溝)全周すると推定される。幅10～20cm、深さ10～15cmを測る。

#### SI1 土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	粘性	しまり	備考
SI1	1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)ブロックが層位下に比較的多く堆積。炭化物混入。遺物を包含する。
	2-1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)ブロックが層位下に比較的多く堆積。炭化物混入(F1より多い)。遺物を包含する。
	2-2	10 YR 5/6 黄褐色	シルト	あり	あり	黄褐色粘土質土(地山)ブロックが少量混入。(地山の「床面」と同質だが、非常に軟弱で床面として機能していたとは考え難いため、周囲の地山掘り下げの際の掘り上げ土と解釈したい。)
	2-3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)が少量混入。
	2-4	10 YR 2/1 黒色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)の混入は非常に少ない。(三角堆積)
	3	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)が小ブロックで若干混入。比較的混入物は少ない。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土(地山)がブロック状で多量に混入。炭化物も多量に混入する。
	5-1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	あり	黄褐色粘土質土(地山)が薄い層状に重層になって堆積する。比較的しまりも良く、竪穴住居の床面(生活面)と考えられる。
	5-2	7.5 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	あり	赤褐色を呈する焼土粒がブロック状に混入する。(附属ビット1が付近にありその上面に焼土粒がブロック状に含む層に相当する。)
	5-3	10 YR 4/4 褐色	シルト	あり	あり	地山ロームに黒褐色土粒が小ブロック状に混入する。しまりもよく、竪穴住居の掘り方面と考えられる。
5-4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土がブロック状に多量に混入する。竪穴住居壁際に部分的に認められる。土層で周溝等の覆土に相当すると考えられる。	

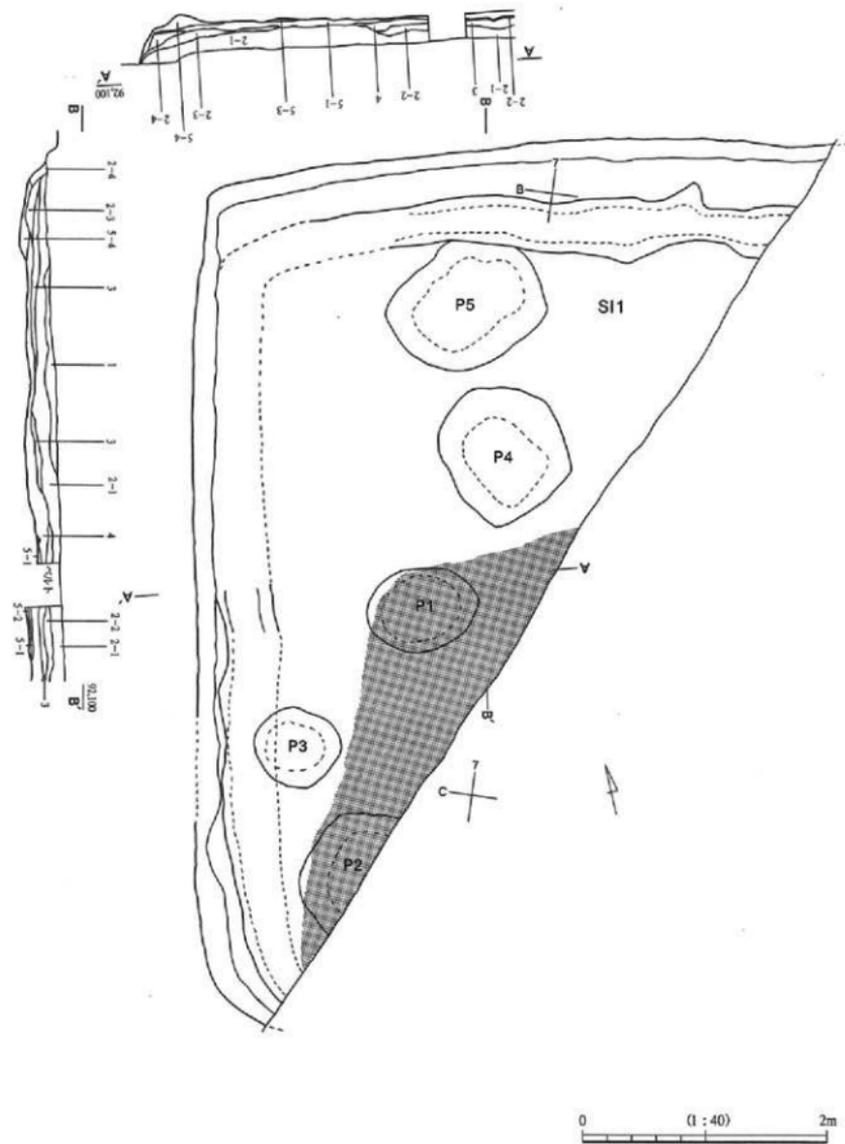
(カマド) 両側に焼土及び炭化物の広がりが見られ、それを取り除くと床面が下がる。南壁沿いのどこかに位置していた可能性が高い。

(出土遺物) 竪穴住居覆土からは、須恵器(坏・蓋・甕)、土師器(内黒台付坏・甕)、柱穴覆土からは、須恵器(甕)、土師器(甕)が出土している。須恵器は、坏・蓋の破片が比較的まとまりのある出土状況を示し、復元可能な個体が多いかと思われたが、ほとんど接合しなかった。また、須恵器甕は体部破片の単体での出土であった。土師器も須恵器と同様比較的まとまりのある出土状況を示したが、ほとんど接合しなかった。図化した遺物は18点である。

(年代) 出土した遺物は廃棄された遺物群と解釈され、住居に伴う遺物が出土しなかったことから、覆土の出土遺物から、9世紀後葉を下限とする。

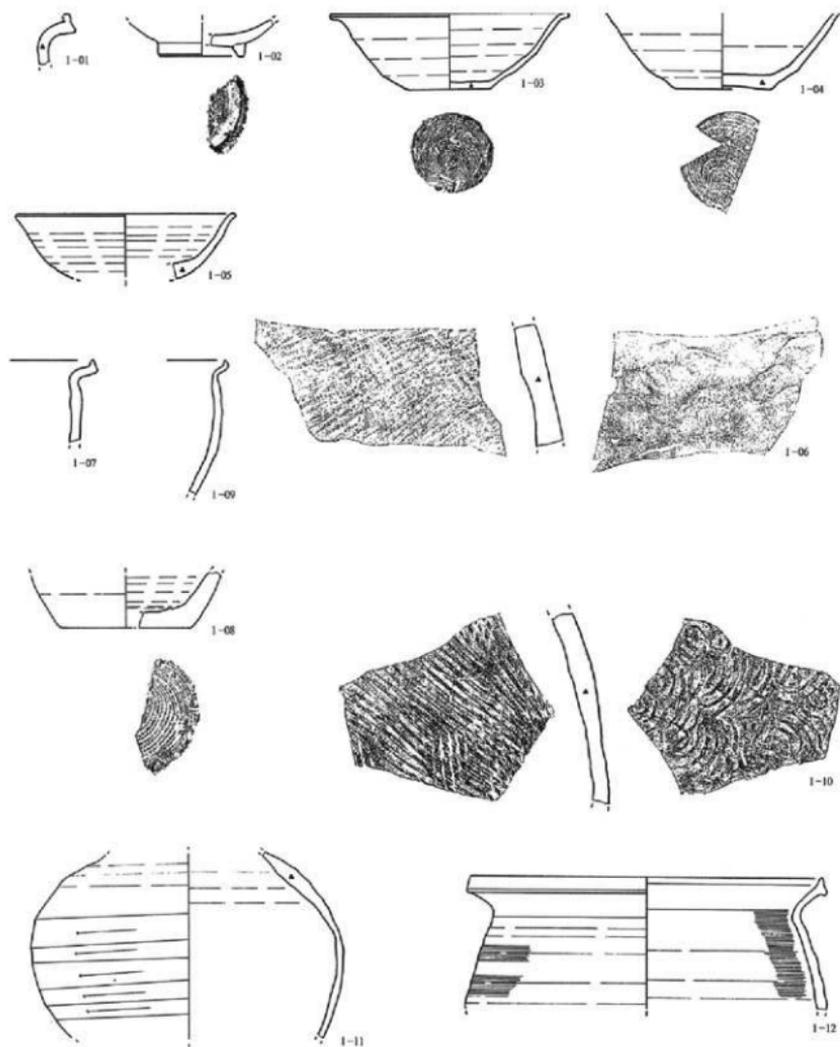
表19 SI1 遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	押固	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
1-01	F1	須恵器	甕	ID1				7	凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ		口唇部内側に沈線がめぐる。	48	18
1-02	F1	土師器	台付坏	II Be		(52)		5	凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロナ	ロクロナ	回転糸切	摩滅。	48	17
1-03	F2	須恵器	坏	I Ac	146	48	46	4	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロナ	ロクロナ	回転糸切		48	18
1-04	F2	須恵器	坏	I Ac	(140)	60	46.5	5.5	凝灰岩質砂	ロクロナ	ロクロナ	回転糸切	酸化焙焼成。	48	18
1-05	F2	須恵器	坏	I A	132			4.5	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロナ	ロクロナ			48	18
1-06	F2	須恵器	甕	ID1				15	石英・凝灰岩質砂	タタキ	アテ			48	19
1-07	F2	土師器	甕	II D7②				7	雲母	ロクロナデ	ロクロナデ			48	18
1-08	F2	土師器	甕	II D7c		(78)		11.5	雲母・凝灰岩質砂	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		48	17
1-09	F2・3	土師器	甕	II D7②				8	雲母・海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ		内面炭化物付着。被熱。	48	18
1-10	P2	須恵器	甕	ID1				11	凝灰岩質砂・海綿骨針	タタキ	アテ			48	19
1-11	P4	須恵器	甕	IE				5	凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロナ	ロクロナ			48	19
1-12	P4	土師器	甕	II D8	(215)			8	雲母・凝灰岩質砂	ロクロナデハケ	ロクロナデハケメ		外面炭化物付着。	48	18
1-13	P4	土師器	甕	II D8	(235)			7.5	雲母・海綿骨針	ロクロナデハケ	ロクロナデハケメ			49	18
1-14	F	須恵器	甕	ID1				10	石英	ロクロナデ	ロクロナデ			49	18
1-15	F	須恵器	甕	ID				6.5		ロクロナデ	ロクロナデ			49	19
1-16	F	土師器	甕	II D2		(80)		7	石英・凝灰岩質砂		ハケメ	編物圧痕		49	19
1-17	F	土師器	甕	II D7①	(144)			3.5	粗砂	ロクロナデ	ロクロナデ			49	18
1-18	F	土師器	甕	II				6.5	雲母	ハケメ	ハケメ		外面炭化物付着。被熱。	49	18



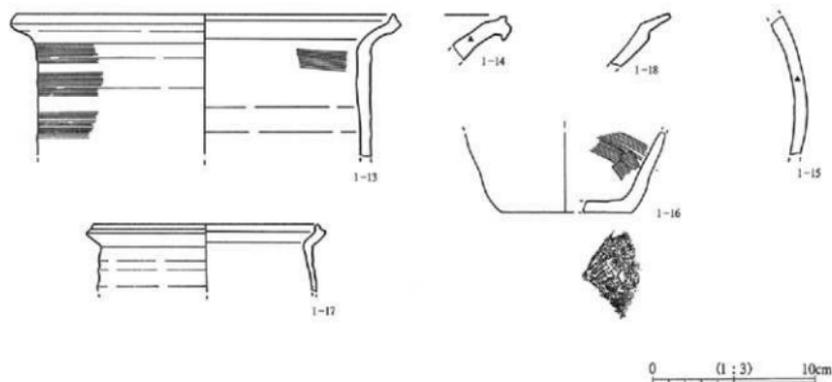
第47図 中野目Ⅱ遺跡S1

IV 中野目Ⅱ遺跡



0 (1:3) 10cm

第48図 中野目Ⅱ遺跡S1出土遺物(1)



第49図 中野目Ⅱ遺跡S1出土遺物(2)

## SI 2 (第50～52図 図版 8・19・20)

(位置・重複関係・遺存状態) C・D-5・6 グリッドに位置する。V層下面からVI層上面で確認した。IV層面上あるいはIII層中より掘りこまれ、VI層中に床面を構築している。一部攪乱をうけるものの、遺存状態は良好である。

(規模・平面形・方向) 5.6m×5mの長方形のプランである。主軸方向は不明。

(堆積土) 定期的に堆積したレンズ状堆積を呈す。大きなブロック状の混入はみられないものの、F1では多量の焼土粒や炭化物が混入するので人為堆積の可能性もある。部分的に攪乱をうける。

(壁の状況) 全周において比較的明瞭の確認され、ほぼ垂直に立ちあがる。比較的軟弱で、硬化部分等は見られなかった。また北壁と西壁に各々1箇所ずつ壁を削って構築された柱穴が認められる。この柱穴が住居に伴うかは不明である。高さは最大で約29cmを測る。

(床面) 地山を床面にしている。硬くしまった部分が見られるものの、軟弱で凸凹した部分が広範囲に広がる。窪んだ部分には、黒褐色土粒を含んだ黄褐色土が堆積しており、部分的に貼床を構築している可能性もある。

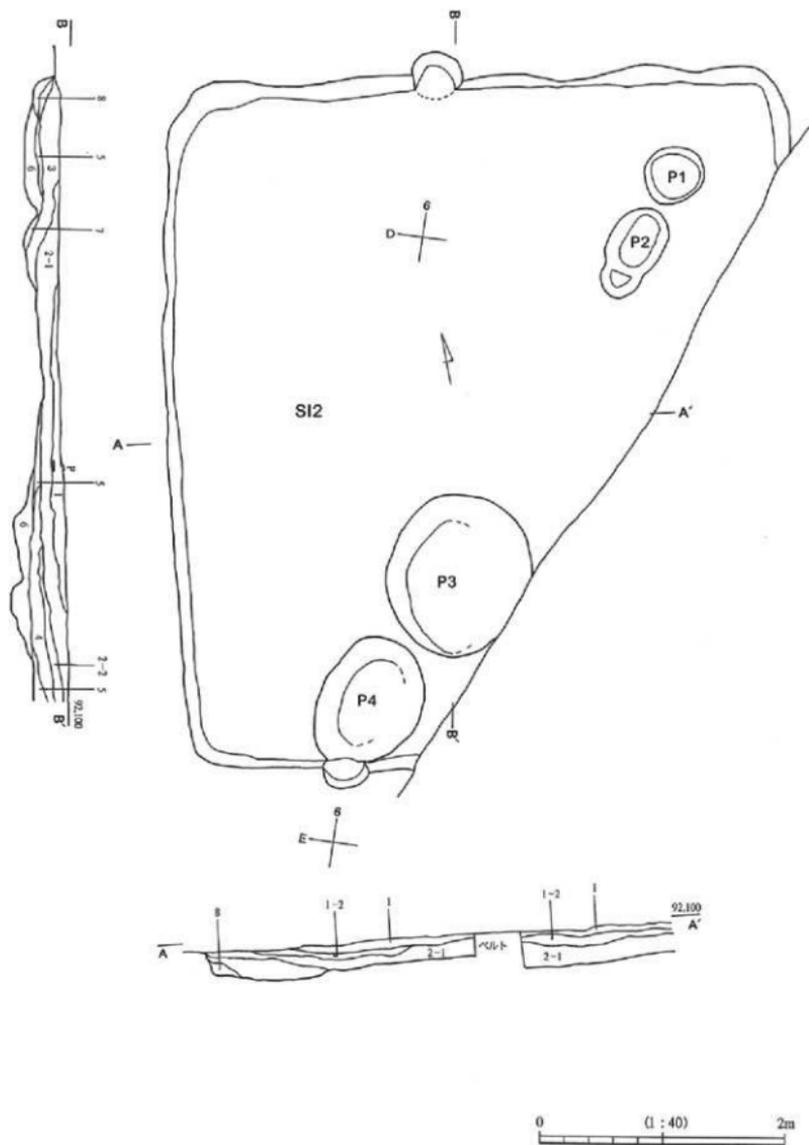
(柱穴) 4本のピットが確認された。P2には抜き取り痕も確認された。しかし、未調査部分もあるため、主柱穴になるかは不明。

(周溝) 確認できなかった。

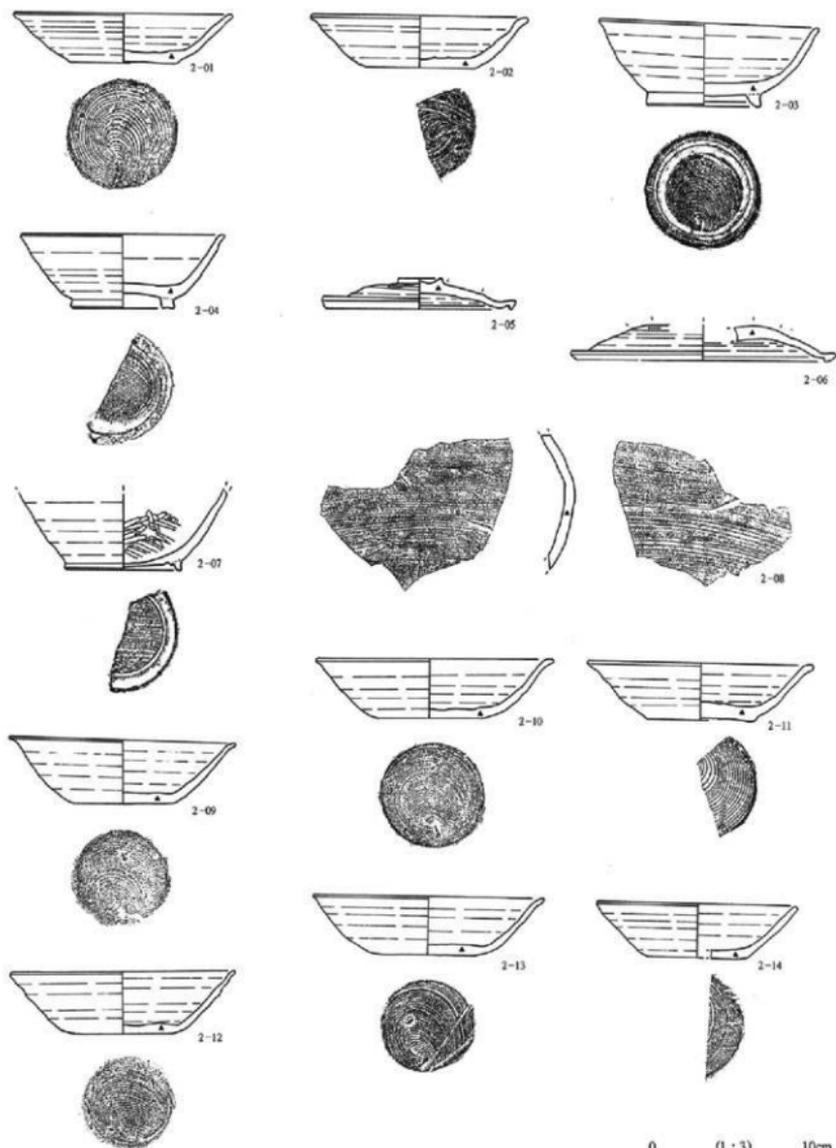
(カマド) P4が貯蔵穴であれば、南壁に位置すると推定されるが、詳細は不明。

(出土遺物) 須恵器の比率が多く、土師器は小破片での出土である。両者とも比較的まとまりのある出土状況を示したが、あまり接合はしなかった。竪穴住居覆土からは、須恵器(坏・高台坏・双耳坏・蓋・甕)、土師器(坏・内黒坏・甕)が出土している。柱穴覆土からは、須恵器(坏)が出土している。図化した遺物は22点である。2-22は双耳坏の耳である。

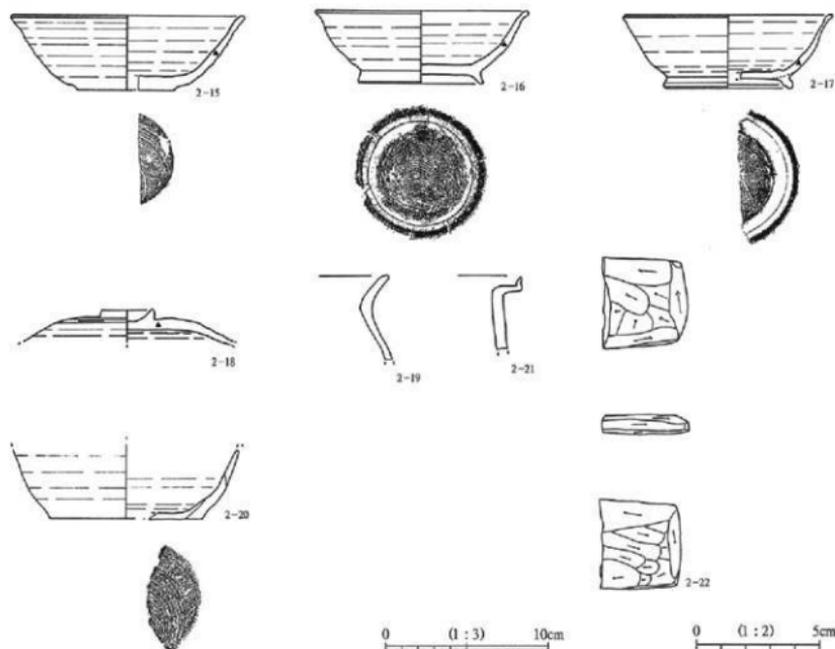
(年代) 出土した遺物は廃棄された遺物群と解釈され、住居に伴う遺物が出土しなかったことから、覆土の出土遺物の年代から9世紀後葉を下限とする。



第50圖 中野目Ⅱ遺跡SI2



第51圖 中野目Ⅱ遺跡S2出土遺物(1)



第52図 中野目Ⅱ遺跡SI2出土遺物(2)

## SI2土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	粘性	しまり	備考
SI2	1	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	部分的に炭化物を多く含む。又焼土ブロックと思われる赤褐色土ブロックも少量混入する。
	1-2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	炭化物をやや多く含む。
	2-1	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土を小ブロック状に多量に混入する。
	2-2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	比較的混入物が少なく均質な層。
	3	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土を小ブロック状に少量混入する。
	4	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや強	黄褐色粘土質土を小ブロック状に多量に混入する。
	5	10 YR 2/2 黒褐色	シルト	あり	やや強	黄褐色粘土質土の小ブロック状混入が若干見られる他、薄い層状に混入する特徴を持つ。
	6	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	やや弱	黄褐色粘土質土の小ブロック状混入が多量に見られる。部分的な落ち込みとして捉えられるので、附属ピット等の覆土になる可能性がある。
7	10 YR 3/2 黒褐色	シルト	あり	弱	焼土ブロックと黄褐色粘土質土の小ブロックが混在する。	
8	10 YR 3/1 黒褐色	シルト	あり	やや弱	比較的均質で混入物が少ない。(三角埴積かもしくは柱穴の覆土に相当する?)	

表20 SI2 遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
2-01	F1	須恵器	坏	IAc	132	66	30	4.5	石英・海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	19
2-02	F1・2	須恵器	坏	IAc	132	64	32	5	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	19
2-03	F1	須恵器	台付坏	IBc	138	70	53	4	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	19
2-04	F1	須恵器	台付坏	IBc	(122)	(63)	44	4.5	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	19
2-05	F1	須恵器	蓋	IC1	138		28	6	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロ ケズリ	ロクロ			51	19
2-06	F1	須恵器	蓋	IC	(160)			5	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロ ケズリ	ロクロ			51	19
2-07	F1	土師器	台付坏	IID		(70)		5	凝灰岩質砂		黒色ミガキ	静止糸切?		51	19
2-08	Y	須恵器	甕	ID				5	細砂	ロクロナデ	ロクロナデ			51	19
2-09	P2	須恵器	坏	IAc	148	60	41	4	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	体部外面磨書「仁」	51	19
2-10	P2	須恵器	坏	IAc	143	60	36	4.5	石英・雲母・粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切	底部磨書「口」内面炭化物付着。	51	19
2-11	F	須恵器	坏	IAc	(138)	(66)	35	4.5	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	19
2-12	F	須恵器	坏	IAc	136	57	38	3.5	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	20
2-13	F	須恵器	坏	IAc	137	56	35	4	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	20
2-14	F	須恵器	坏	IAc	(122)	(62)	34	4	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	20
2-15	F	須恵器	坏	IAc	(142)	(56)	46.5	4	海綿骨針粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		51	20
2-16	F	須恵器	台付坏	IBc	128	76	45	4	石英・凝灰岩質砂・粗砂	ロクロ	ロクロ	回転糸切		52	20
2-17	F	須恵器	台付坏	IBc	126	78	45	2.8	凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロ	ロクロ	回転糸切		52	20
2-18	F	須恵器	蓋	IC1				5	石英・凝灰岩質砂・海綿骨針	ロクロ ケズリ	ロクロ			52	20
2-19	F	土師器	甕	IID2				6	砂	ナデ	ハケミ 黒色ミガキ		外面摩滅。	52	20
2-20	F	土師器	甕	IID7c		(46)		3.6	石英・雲母	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切		52	20
2-21	F	土師器	甕	IID7②				6	石英・雲母・海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ		内外面摩滅。外面炭化物付着。飯熱。	52	20
2-22	F	須恵器	双耳坏	IAorB				8	凝灰岩質砂	ケズリ	ケズリ		耳。	52	20

## (2) 土坑(第53図 図版8・20)

## SK3(第53図 図版8・20)

(位置・重複関係)F・G-3・4グリッドに位置する。V層下面からVI層上面で確認した。

(規模・平面形)約2m前後の隅丸形状を呈し、南東部がやや張り出す。

(出土遺物)須恵器(台付坏・甕)、土師器(甕)が出土している。4点を図化した。3-01は完形で出土しており、3-04はほぼ完形で出土している。

(年代)9世紀中葉の所産と推定される。

#### SK4 (第53図 図版8)

(位置・重複関係)C-5グリッドに位置する。V層下面からVI層上面で確認した。

(規模・平面形)約1m前後の長楕円形若しくは隅丸方形を呈すると推定される。

(堆積土)焼土がブロック状に混入し、人為堆積土と推定される。F1・2がレンズ状に堆積するが、二次的な掘り返し等ではない。Ⅲ層は堅穴住居と比べて大きく落ち込み、ややレンズ状に堆積する特徴を有する。(壁の状況)全周において比較的明瞭に確認された。鋭角に立ちあがる。検出面以下はしまりがみられるが、以上では、やや軟弱になるようである。

(床面)地山中に形成される。比較的締まっており、中央付近でやや盛り上がる。盛り上がり部分ではF6が上に影らむ。

(出土遺物)須恵器(坏)、土師器(甕)の小破片が出土している。ほとんど接合せず、図化していない。

(年代)時期を特定できる遺物がないことから、根拠に乏しいが、凡そ平安時代の所産であろう。

#### (3) マウンド(第53図)

##### SF5 (第53図)

(位置・重複関係)G-3グリッドに位置する。VI層上面で確認した。

(規模・平面形)直径約60cmの円形を呈す。

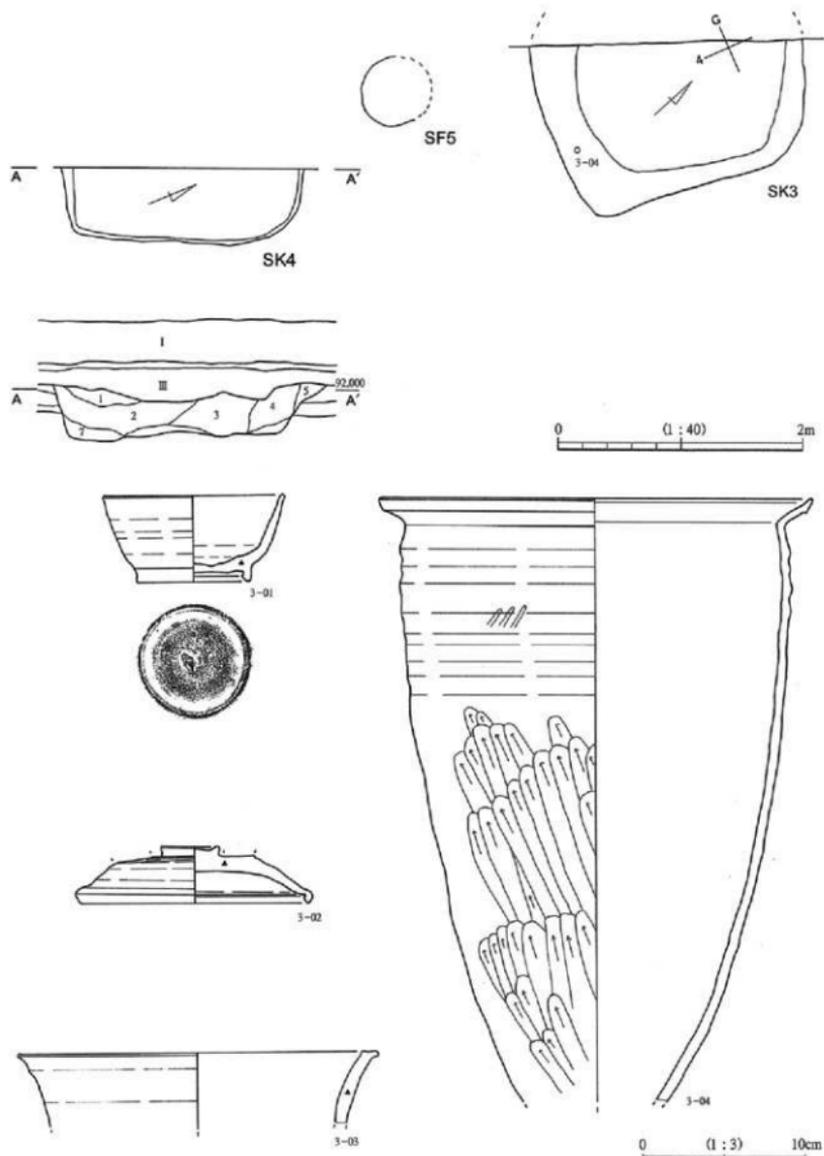
(年代)出土遺物もなく、不明である。

#### SK4 土層注記

遺構番号	層位	土色	土質	粘性	しまり	備考
SK4	1	10 YR 2/1 黒色	シルト質土	あり	あり	地山の小ブロックを少量混入。
	2	10 YR 2/2 黒褐色	シルト質土	あり	あり	地山の小ブロックを少量混入。
	3	10 YR 3/2 黒褐色	シルト質土	あり	あり	地山の小ブロックを多量に混入。
	4	10 YR 2/1 黒色	シルト	あり	あり	比較的混入物が少なく均質。
	5	10 YR 4/3 におき褐色	シルト	あり	あり	
	6	10 YR 2/1 黒色	シルト	あり	やや強	ややしまりのある粘質のある土で地山の小ブロックを若干混入する。
	7	10 YR 2/1 黒色	シルト	あり	あり	地山ブロックが多量に混入する。
	8	10 YR 2/1 黒色	シルト	あり	あり	比較的混入物が少なく均質。

表21 SK3 遺物観察表

遺物番号	層位	種別	器種	分類	計測値(mm)				胎土	調整・成形			備考	挿図	図版
					口径	底径	器高	器厚		外面	内面	底面			
3-01	F	須恵器	台付坏	IBb	110	68	54	5	石英 凝灰岩質砂	ロクロ	ロクロ	回転鋸切		53	20
3-02	F	須恵器	甕	IC1	143		35	7	石英 凝灰岩質砂 粗砂	ロクロケズリ	ロクロ			53	20
3-03	F	須恵器	甕	ID1 (218)				7	雲母 凝灰岩質砂 海綿骨針	ロクロナデ	ロクロナデ			53	20
3-04	F	土師器	甕	ID8 (262)				7	石英 雲母 凝灰岩質砂 海綿骨針	タタキロクロナデ	ナデ	ハケメ	内外面脱化物付着。	53	20



第53図 中野目Ⅱ遺跡SK3・4SF5・SK3出土遺物

## V 総括

### 1 調査の成果

中野目Ⅰ遺跡では、古墳時代後期の竪穴住居跡3棟、奈良～平安時代の竪穴住居跡が13棟、詳細な時期は不明であるが、恐らく奈良～平安時代と推定される掘立柱建物跡が5棟、その他土坑、溝跡が検出され、遺物は整理箱にして24箱出土した。調査区が道路幅に限定されていたが、調査面積に対して住居跡の分布が密であり、未調査部分には更に住居跡が遺存している可能性が高く、当該地に大規模な集落が営まれていたことが推定される。

中野目Ⅱ遺跡では、平安時代の住居跡が2棟、土坑2基、マウンド1基が検出され、遺物は整理箱にして4箱が出土した。遺跡の上面は厚い耕作土で保護されており、中野目Ⅰ同様、更に住居跡が遺存している可能性が高い。

中野目Ⅰ遺跡と中野目Ⅱ遺跡は、距離的にも近接しており、同一遺跡の可能性も高いが、中野目Ⅰ遺跡の東側で確認されたように、水田により遺跡上面が削平されており連続していることは確認できなかった。加えて、遺跡間は試掘調査時に谷地形を呈していることが確認されているので、現段階では別の集落であると判断している。

本遺跡に近接した遺跡としては、中山町三軒屋物見台遺跡(古墳時代後期)、中山町達磨寺遺跡(奈良～平安時代)が、これまで知られていたが、本遺跡は、凡そ上記2遺跡の中間の時期に当てはまるもので、当該地域の歴史を知る上で重要な成果をあげることができた。

以下、本遺跡で主体となる奈良～平安時代の遺構及び遺物について竪穴住居跡を中心に若干の検討を加え、総括としたい。

### 2 奈良～平安時代の遺構及び遺物について

当該期の遺構として確認されたのは、中野目Ⅰ遺跡で、竪穴住居跡13棟、土坑1基、中野目Ⅱ遺跡で、竪穴住居跡2棟、土坑2基である。また、中野目Ⅰ遺跡で検出された掘立柱建物跡については、出土遺物が僅少で明確な時期を確認することができなかったが、凡そ奈良～平安時代の範疇であると考えている。ここでは、両遺跡で検出された竪穴住居跡について検討を加える。

#### (1) 竪穴住居跡の遺物の出土状況について

中野目Ⅰ遺跡と中野目Ⅱ遺跡では、遺物出土状況に差異が認められる。組成でみれば、中野目Ⅰ遺跡が土師器を主体とするのに対し、中野目Ⅱ遺跡では須恵器を主体としている。また、遺物の遺存状況も、前者が被熱あるいは摩滅したものが顕著に見うけられるのに対し、後者はその痕跡が顕著ではない。当然、遺跡が埋没した後の自然環境や住居跡をどれだけ調査したかに起因するとも考えられるが、調査結果では、住居内での遺物の平面分布及び接合関係から、差異を判別することができた。これは、住居跡の廃絶あるいは埋没方法の違いと仮定することができる。

中野目Ⅰ遺跡においては、時期の差こそあれ、出土遺物は、床面付近からの出土は少なく、覆土から小破片が出土し、接合範囲は広い。まとまった個体での出土がみられた、SI465・490においても、上層ではこの傾向が看取される。また、住居の遺存状態があまり良くないが、SI520においても、ほぼ床面

付近から遺物が出土するが、その接合範囲は広い。

一方、中野目Ⅱ遺跡については、遺物の平面分布を図化していないので比較材料に欠けるが、まとまった状態で出土するも、接合はほとんどしない。また、個体としては、図上復元が可能な破片が多い。

これは、中野目Ⅰ遺跡では、自然の営力により埋没した遺物が多く見うけられるのに対し、中野目Ⅱ遺跡では、人為的に遺物が廃棄されたと推測される。

このことは、遺物を包含する堆積土の状況からも傍証を得ることができる。中野目Ⅰ遺跡では、覆土に、焼土、炭化物、地山ブロック等の混入物が認められるも、その密度は低く、形状も不明瞭で、自然堆積であると判断されるのに対し、中野目Ⅱ遺跡では、下層では中野目Ⅰ遺跡と同様の特徴を示すが、上層においては地山ブロックの混入が下層に比して多く、人為的な埋め戻しの痕跡が看取される。

## (2) 竪穴住居跡出土の遺物について

山形県における当該期の酸化焙焼成の土器については、その成形技法の特徴から、「赤焼土器」の名称で呼ばれるものがある。しかしながらその出現時期や区分については、地域的様相の違いもあいまって流動的である。よって本書では「赤焼土器」という用語は使用せず、Ⅰ-須恵器、Ⅱ-土師器の2種に大別している。器種は、A-坏、B-台付坏、C-壺、D-甕、E-壺に分類し、器形や調整技法の特徴により細分したものもある。但し、須恵器は出土量が少なく、全体の器形の判断できるものも少なかったことから、簡単な分類をするに止めた。底部痕跡は、a-無調整回転斫切、b-調整回転斫切、c-回転斫切、d-葉脈痕、e-編物圧痕、f-指頭痕若しくはその後ナデ調整されるものの6類に分類している。分類内容は表24の通りである。

本遺跡で、最も多く出土した遺物は土師器である。供膳形態の土器はほとんど出土せず、煮沸形態の土器が大半を占める。ここでは、甕を中心にその様相を略述する(表25)。

小型の甕には、輪積み成形で、体部外面に縦位のハケメ調整、口縁部にナデ調整が施されるもの(ⅡD1、2)と、ロクロ成形で、底部痕跡が回転斫切のもの(ⅡD7)がある。本遺跡において、ⅡD1類の出土は僅少である。ⅡD2類は、8世紀中葉～9世紀初頭、9世紀中葉、9世紀後葉と断続的に出土する。ⅡD7類は8世紀中葉から9世紀後葉まで連続的に出土している。大型の甕については、長胴平底で、内外面にハケメ調整が施され、底部痕跡が編物圧痕(ⅡD5)のものと、長胴で、丸底状を呈し、体部上半にロクロ調整を、下半にケズリ調整を施し、底部痕跡が指頭痕あるいはその後ナデ調整を施しているもの(ⅡD8)の2種に大別できる。前者は、8世紀中葉から9世紀中葉までみられるが、その出土量は少ない。後者は、所謂「赤焼土器」と呼ばれるもので、8世紀中葉から9世紀後葉まで出土し、出土遺物の大半を占めている。

これらの土師器の類例をあげれば、ⅡD2類については、山形市中地蔵遺跡、山形市境田D遺跡、河北町四ツ塚遺跡から類似した甕が出土している。山形市内の出土例は底部痕跡が編物圧痕で、9世紀後葉のもの、河北町内の出土例では底部痕跡が不明であるが、平安時代後半のものである。本遺跡においては、葉脈痕を残すものもあり、時期もやや古いようである。ⅡD7については、中山町達磨寺遺跡、寒河江市富山2遺跡、寒河江市高瀬山遺跡等でみられる。ⅡD5類については、馬見ヶ崎川の沿岸または扇状地扇端部の遺跡でよく出土するもので、山形市山形西高敷地内遺跡や山形市城南一丁目遺跡、山形市境田D遺跡など、8世紀中葉～9世紀後葉まで出土するようであるが、須川下流域や山形盆地南半の最上川流域では、9世紀前葉には姿を消していくようである。ⅡD8類については、中山町達磨寺

遺跡、寒河江市富山2遺跡、寒河江市高瀬山遺跡、河北町四ツ塚遺跡などにみられ、ⅡD7類の分布とほぼ一致するようである。

以上のことから、輪積み成形で、内外面にハケメ調整を施す甕類(ⅡD2、5)は、馬見ヶ崎流域や立谷川流域等によくみられ、須川下流域や山形盆地南半の最上川流域でも出土するが、その量は比較的少量で、ロクロ成形の小型の甕(ⅡD7)、ロクロ調整やケズリ調整を伴う大型の甕(ⅡD8)は、須川下流域や最上川流域でよくみられ、馬見ヶ崎流域ではほとんど出土しないことが看取される。

### (3) 遺跡の集落域の変遷について

調査区が限定される点と、住居跡が帰属する時期の認定の点で検討の余地があるが、凡そ以下のような住居域の変遷が看取される。

古墳時代後期：西側低位部分から旧自然堤防上まで調査区全域。

古墳時代後期から8世紀末：空白期

8世紀末～9世紀初頭：旧自然堤防上に限定される。

9世紀前葉～中葉：西側低位部分から旧自然堤防上まで広がるが、9世紀中葉には旧自然堤防付近に推移していく。

以上の住居跡の分布域と竪穴住居の遺物の出土状況から、古墳時代には、西側低位部分(現後背湿地)まで住居域として機能し、8世紀末～9世紀初頭には旧自然堤防上に限定され、9世紀前葉～中葉には西側低位部分は埋没し現在のような地形が形成される。9世紀中葉には、再び住居域が西側へ広がる。時間的な連続は確認できなかったが、更に須川よりの自然堤防上に住居域が広がり、9世紀後葉には、集落は廃絶したと推測される。

## 3 まとめ

本遺跡で検出された遺構及び遺物について、簡単に検討をしてみた。まとめると以下ようになる。中野目Ⅰ遺跡は、古墳時代後期に成立し、まもなく廃絶する。その後、8世紀中葉に集落が成立し、9世紀前葉～中葉に一旦廃絶して、低位部分が埋没後、9世紀中葉に再び集落が営まれる。

中野目Ⅱ遺跡については、成立時期は不明であるが、9世紀後葉には集落が移動したと推測される。

土師器の組成からは、仮に、ロクロが使用される土師器を最上川流域の様相、輪積み成形で内外面にハケメが施される土師器を馬見ヶ崎川流域の様相と仮定すると、8世紀中葉～9世紀中葉までは、最上川流域の様相の他、馬見ヶ崎川流域の様相も見うけられるが、9世紀後葉には、馬見ヶ崎川流域の様相がなくなり、最上川流域の様相が強くなるようである。時間の制約上詳細な分析を行った訳ではないので推測に過ぎないが、日本海側の影響の内陸部への伸長とみることができるとも推測される。

以上、今回の調査成果について簡単な検討を行ったが、竪穴住居跡の帰属時期、須器と土師器の組成や、周辺の遺跡との比較等多数の課題を残している。

表22 竪穴住居跡観察表

遺構番号	位置	規模	平面形	主軸方向	遺存状態	確認面からの深さ	壁	床面状況	柱穴	カマド	重複関係	挿図	図版
SI419	B-C-1-2	470×450	方形	不明	上面削平	13	垂直?	平坦・地山	不明	不明	SD400に切られる。	7	3
SI205	L-M-7-8	440×(130)	方形	不明	北半調査区外	35	垂直	起伏あり・地山	不明	不明		8	3
SI106	V-W-2-3	366×360	方形	N-27°-W	上面削平	12	緩やか	平坦・一部貼床	P1	南壁東寄り	SI104・101に切られる。	8-10	3
SI104	W-2-3	(312)×(136)	方形	不明	上面削平・南半調査区外	12	垂直	やや起伏あり・地山	不明	北西側壁 or 西壁北寄り	SI106を切る。	8-9	2-3
SI101	W-X-1	752×672	方形	N-18°-W	上面削平・北東調査区外	14	垂直	平坦・一部貼床	P1-3	南壁東寄り	SD500に切られる。SI106を切る。	8-9	2-3
SI14	W-X-7-8	464×440	方形	N-42°-W	北半調査区外	15	垂直	平坦・地山	P1-3	南壁東寄り	SI8に切られる。	16	4
SI8	X-7-8	320×?	方形	N-76°-W	上面削平・東側一部遺存	9	垂直?	平坦・地山	P1	東壁中央	SI4を切る。	16	4
SI225	J-K-7-8	344×(190)	方形	不明	北半調査区外	24	垂直	平坦・地山	不明	不明		20	3
SI256	F-G-7-9	512×458	方形	N-17°-E	上面やや削平・カマド基礎調査区外	31	垂直	やや起伏あり・地山	P1-2	南壁中央	SD257・259・SP258に切られる。	21	3
SI465	S-T-0-1	436×(156)	方形	N-2°-E	北半調査区外	53	垂直	平坦・貼床	不明	南壁中央		26	4
SI490	O-P-1-2	488×(394)	方形	N-8°-E	良好	34	垂直	平坦・一部貼床	P1-2	南壁?	SD500に切られる。	29	5
SI520	N-2-3	276×226	やや不整な方形	N-82°-W	上面削平	9	垂直?	平坦・一部貼床	P1-3	東壁南より		33	5
SI640	H-I-1-2	434×(390)	方形	不明	南側調査区外	14	垂直	平坦・貼床?	不明	南壁?	SD550に切られるか?	34	5
SI680	O-P-8-9	(486)×472	方形	N-88°-W	南側調査区外	28	垂直	平坦・貼床?	不明	南東隅		35	5
SI446	T-U-2-3	494×(280)	方形	不明	南側調査区外	33	垂直	平坦・地山	P1	不明	SB749に切られるか?	37	6
SI7	Y-9	不明	不明	不明	ほとんど削平・カマド部分のみ遺存	不明	不明	不明	不明	不明		38	6
SI1	A-C-5-7	654×(500)	方形	不明	東半調査区外	26	垂直	起伏あり・地山	不明	不明	南壁?	47	8
SI2	C-D-5-6	569×500	方形	不明	東半調査区外	29	垂直	起伏あり・一部貼床?	不明	不明	南壁?	50	8

表23 掘立柱建物跡観察表

遺構番号	位置	規模		柱間		主軸方向	遺存状態	重複関係	挿図	図版
		桁行	梁行	桁行	梁行					
SB745	R-S-2-3	2間・530	3間・690	160	170~180	N-7°-W	柱穴の一部が調査区外となるが、良好		39	6
SB746	R-S-8-9	2間・380	3間以上・(360)	120	110~120	N-3°-W	南半調査区外		40	6
SB747	R-S-8-9	2間・270	2間以上・(280)	80~84	200	N-17°-W	南半調査区外		41	
SB748	A-2	2間・260	1間?・360	72~84	270?	N-20°-W		SD400に切られるか?	42	6
SB749	T-U-2-3	2間・460	2間以上・(270)	170~180	210	N-10°-W	南半調査区外	SI446を切るか?	43	

表24 遺物分類表

種別	器種	分類	口縁部一底部形態	外面調整	内面調整	底部形態	底部痕跡	
I 類 器	A 杯			ロクロ	ロクロ	平底	a b c	
		B 台付杯	低い高台が付く。	ロクロ	ロクロ	付高台	a b c	
	C 盞	1	リング状のツマミが付く。	ロクロ・ケズリ	ロクロ			
		2	宝珠形のツマミが付く。	ロクロ・ケズリ	ロクロ			
	D 甕	1	大型の甕。	タタキ	アテ			
		2	長胴甕。	タタキ	アテ			
	E 壺	1	広口壺。	ロクロ	ロクロ	平底	b c	
		2	長口壺。	ロクロ	ロクロ	平底	b c	
	II 土 器 器	A 杯			ロクロ	ロクロ	平底	a b c
			B 台付杯	低い高台が付く。	ロクロ	ロクロ	付高台	a b c
D 甕		1	輪積み成形で、体部が直線的に立ち上がり、口縁部が短く外反する小型の甕。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底		
		2	輪積み成形で、体部が丸く膨らみ、口縁部が外反または外傾する小型の甕。体部から作り、底部は内側からはめ込むようである。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底	d e	
		3	輪積み成形で、体部が内湾しながら外傾し、口縁部が大きく開く中型の甕。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底	d	
		4	輪積み成形で、体部が直線的に立ち上がり、肩がやや張りだす大型の甕。底部は内側からはめ込むようである。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底	e	
		5	輪積み成形で、体部が丸く膨らみ、口縁部が外反する大型の甕。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ・ミガキ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底	e	
		6	輪積み成形で、体部が丸く膨らみ、口縁部が短く外反する大型の甕。	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	口縁部：ナデ 体部：ハケメ	平底		
		7	①：ロクロ成形で、体部が緩やかに立ちあがるか若しくは丸く膨らみ、口縁部が外傾し、口端がやや外側に膨らむもの。 ②：ロクロ成形で、体部が緩やかに立ちあがるか若しくは丸く膨らみ、口縁部が外傾し、口端が強く屈曲し直立または内傾するもの。	ロクロ	ロクロ	平底	c	
		8	輪積み成形で、体部が緩やかに膨らみ、口縁部が外傾し、口端がやや膨らむか外側に貼付けがなされるもの。体部から作り、底部は最後に外側からはめ込むようである。	口縁部：ロクロ 体部：タタキ・ロクロ(上半)・ハケメ(上半)・ケズリ(下半)	ロクロ・ハケメ	丸底状で凹凸あり	f	

表25 出土遺物傾向表

遺構番号	IID								その他
	1	2	3	4	5	6	7	8	
104		○			○		○	○	
101	○	○			○		○	○	
14									○
490	○				○	○	○	○	
580					○		○	○	○
256			○	○	○		○		
465		○					○	○	
640					○			○	
8	○				○				
225									○
520							○	○	
1		○					○	○	
2		○					○	○	

## 参考文献

- 山形市史編さん委員会編 1968 『鳩造跡』 山形市史別巻1
- 山形市史編さん委員会編 1973 『山形市史』 上巻
- 山形県教育委員会 1978 『山形県遺跡地図』
- 佐藤庄一・尾形典典・阿部明彦 1979 『山形西高敷地内遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第17集
- 米地文夫・阿子島功 1982 『Ⅱ 地形分類』 『土地分類基本調査 山形』 山形県
- 渋谷孝雄 1982 『境田C遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第62集
- 渋谷孝雄・阿部明彦 1984 『境田C'・D遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第76集
- 佐藤庄一・里見等順 1985 『山形西高敷地内遺跡第3次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第91集
- 長橋 至 1986 『不動木遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第100集
- 佐藤正俊・渋谷孝雄 1986 『遠磨寺遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第104集
- 阿部明彦 1986 『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(1)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第106集
- 阿部明彦 1987 『三軒屋物見台遺跡発掘調査報告書(2)』 山形県埋蔵文化財調査報告書第107集
- 太田 優・黒坂雅人 1987 『新山A遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第109集
- 佐藤正俊・布施明子 1988 『向山・間沢B遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書133集
- 佐藤庄一 1992 『山形西高敷地内遺跡第4次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第173集
- 佐藤庄一・水戸弘美 1993 『山形西高敷地内遺跡第5次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第192集
- 須賀井新入・植松曉彦 1994 『今塚遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財調査報告書第7集
- 鈴木良仁・須賀井明子 1996 『富山2遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書41集
- 長瀬一男・長谷川武 1996 『市内遺跡分布調査報告書』 天童市埋蔵文化財調査報告書第13集
- 佐藤庄一・須賀井明子 1998 『平野山古宮跡第12地点遺跡第2次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター発掘調査報告書第52集
- 阿部明彦・水戸弘美 1999 『山形県の古代土器編年』 『第25回古代城郭官衙遺跡検討会資料』
- 黒坂雅人 1999 『城南一丁目遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第68集
- 三浦浩人 1999 『山辺町遺跡地図』 山辺町埋蔵文化財調査報告書第8集
- 岡部 博・豊野潤子 2000 『四ツ塚遺跡第2次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第74集
- 菅原哲文・大村和弘 2000 『中地蔵遺跡発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第77集
- 丸山晶子 2000 『高瀬山遺跡(2期)第2・3次発掘調査報告書』 山形県埋蔵文化財センター調査報告書第80集
- 五十嵐貴久 2001 『中野目Ⅰ・Ⅱ遺跡』 『山形市埋蔵文化財発掘調査年報-平成5～11年度-』

その他、山形県教育委員会発行の『分布調査報告書』の各巻を参考にしたが、紙面の都合上割愛した。ご容赦ねがいたい。

## 報告書抄録

ふりがな	なかのめいちいせきなかのめにいせきはつつちょうさほうこくしよ							
書名	中野目Ⅰ遺跡中野目Ⅱ遺跡発掘調査報告書							
副書名								
巻次								
シリーズ名	山形県山形市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第9集							
編著者名	國井修							
編集機関	山形市教育委員会							
所在地	〒990-8540 山形県山形市旅籠町二丁目3番25号 TEL 023-641-1212							
発行年月日	2001年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中野目Ⅰ	山形県 山形市 大字中野目	6201	平成11年 度登録	38度 19分 47秒	140度 18分 30秒	20000405 ～ 20000601	2,500㎡	中野目地区住宅団 地造成事業
中野目Ⅱ	字赤坂	6201	平成11年 度登録	38度 19分 47秒	140度 18分 43秒	19991207 ～ 19991224	300㎡	
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中野目Ⅰ	集落跡	古墳時代		竪穴住居跡3棟		土師器(坏・高坏・ 甕) 須恵器(坏)		古墳時代の焼失住 居跡1棟検出。竪 穴住居内から多数 の遺物が出土。
		奈良・平安時代		竪穴住居跡13棟 掘立柱建物跡5棟		土師器(坏・甕) 須恵器(坏・台付 坏・双耳坏・坏蓋・ 甕・壺) 砥石		
							総出土箱数24箱	
中野目Ⅱ	集落跡	平安時代		竪穴住居跡2棟 土坑2基 マウンド1基		土師器(甕) 須恵器(坏・双耳 坏・坏蓋・甕)		
							総出土箱数4箱	

版 圖





中野目 I 遺跡遠景(北西から)



調査区近景



SI106・104・101



SI106精査風景(北西から)



SI106遺物出土状況(北から)



SI106カマド精査状況(北から)



SI106カマド完掘状況(北から)